

The Molecular Biology Society of Japan

MBSJ NEWS

日本分子生物学会

2020.2

No.125

会報

目次

■ 理事長メッセージ (2020 年 1 月)「明日のために、その 2」	1
■ 追悼 関口陸夫先生	2
■ 第 43 回 (2020 年) 日本分子生物学会年会 開催のお知らせ (その 2)	4
【年会のコンセプト その 2】	4
【プログラム】	5
【フォーラム企画の公募について (応募締切: 2020 年 6 月 15 日(月))】	18
【日程表 (予定)】	19
■ 第 42 回日本分子生物学会年会 開催報告	20
■ キャリアパス委員会 年会企画報告	21
■ キャリアパス委員会 年会における発表者の属性統計調査報告 バランスの取れた研究環境を築くために～ 2019 属性調査から学べること～	48
■ 第 9 回 (2021 年) 日本分子生物学会 国際会議支援募集のお知らせ	49
■ 国際会議支援システム利用について	50
■ 第 21 期第 2 回理事会記録	51
■ 令和 2 年度 (第 42 回) 通常総会記録	58
■ 令和 1 年度 (2019 年度) 決算報告	61
■ 監査報告書	68
■ 令和 2 年度 (2020 年度) 活動予算書	69
■ 学術賞、研究助成の本学会推薦について	71
■ 学術賞、研究助成一覧	72
■ 各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ ○千里ライフサイエンスセミナー P1 「新しい医薬品概念が変える医療」	76
■ 第 21 期役員・幹事・各委員会名簿	77
■ 賛助会員芳名	78



特定非営利活動法人
日本分子生物学会

<https://www.mbsj.jp/>

第43回 日本分子生物学会年会



New Faces,
New Questions,
and
Revitalized Worlds

2020年12月2日(水) ~ 4日(金)

神戸ポートアイランド [神戸国際会議場・神戸国際展示場
神戸ポートピアホテル]



上村 匡 (京都大学大学院生命科学研究科)

連絡先

第43回日本分子生物学会年会事務局 (株式会社エー・イー企画内)
〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋2-4-4 一ツ橋別館4F
Tel: 03-3230-2744 FAX: 03-3230-2479 E-mail: mbsj2020@aeplan.co.jp

演題登録期間

2020年7月1日(水) ~ 7月31日(金)

※延長は致しません。ご注意ください。

事前参加登録期間

2020年7月1日(水) ~ 10月7日(水)

<https://www2.aeplan.co.jp/mbsj2020/>

理事長メッセージ（明日のために、その2）

会員の皆様へ

九州での年会は寒い中での開催でしたが、会場は活気に溢れ、あらためて＜分子生物学会恐るべし！＞と感じた次第です。聞きたいセッションが重なっているとか、似たようなメンバーが出すぎとか、いろいろと不満の声も聴きますが、40年の月日をかけてここまで進化したことに、第一回めの年会に出席した者には驚きは隠せませんでした。活気ある年会を開催してくださった年会関係者の皆様に学会を代表して御礼申し上げます。しかし、理事長が悦に入っていたのでは話にならず、さらなる進化に向けて、年会中もいろいろと活動を行いました。

まずは、年会の国際化について、国際化担当幹事を設けることを理事会・総会でお認め頂き、初代幹事として理研の林茂生会員に就任を要請し快諾を得ました。今までに、42回年会は佐々木裕之・副理事長、43回年会は Genes to Cells 編集幹事の上村匡・理事、44回年会は塩見美喜子・副理事長、45回年会は広報幹事の深川竜郎会員と、たまたま執行部メンバーが年会長として揃ったこと。さらに、第46回年会を国際化担当幹事の林茂生会員が引き受けてくださったことで、5か年計画で年会の国際化を進めていくことができる態勢が整いました。前回の理事長メッセージ「明日のために、その1（学会 HP）」に書かせてもらったように、今回の福岡年会から英語での発表をT字型に組んでもらい（会期を通して英語のセッションがあるとともに、2日目は丸一日英語という縦に英語のセッションがある様式を指します）、国際化の第一歩を踏み出しました。これらの試みについて会員からご意見を頂き、それを次の年会に反映させる形で年会の国際化を進化させていきたいと思います。

例えば、私個人の意見を書かせてもらおうと、2日目は丸一日英語という縦に英語のセッションが組まれましたが、ポスター発表のディスカッサーに外国人を指名するような試みを今後は入れてもらえればと思いました。このような今後の進化に向けての意見を会員から頂けると幸いです。

また、海外の学会とのジョイントシンポについても年会中に模索しました。韓国の日本の分子生物学会に相当する KSMCB（the Korean Society for Molecular and Cellular Biology）の Young-Joon Surh 会長が福岡の年会を視察に訪れ、将来的なジョイントの可能性について、まずはお互いの会を知ることから始めることを議論しました。EMBO とのジョイントについては、女性研究者のキャリア・アップに関するワークショップを次の年会から始めることを議論しました。新たな試みを通して step by step で学会の国際化が推進されれば、と思っています。

最後になりましたが、2011年から続いていました「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子 基金」は、2020年が最終回の募集となります。毎年300万円を5名程度の方に贈呈してきました（2020年の助成人数は6名）。多くの若手研究者が、富澤基金で大きな翼を得たと思います。今後とも、分子生物学の振興に向けた、各種基金のご寄付をお考えの方がおられましたら、是非とも事務局までご連絡ください。

2020年1月
特定非営利活動法人 日本分子生物学会 第21期理事長
（基礎生物学研究所）
阿形 清和



九州大学名誉教授の関口睦夫先生は、2019年12月2日にお亡くなりになりました。87歳でした。関口先生は、1978年に発足した日本分子生物学会の創設に尽力され、第1期（1979年4月）から第9期（1997年3月）まで幹事、あるいは評議員として日本分子生物学会の運営に貢献されました。さらに、日本分子生物学会第2回の年会長（1979年、福岡）、そして第6期会長（1989年4月～1991年3月）を務められました。ここに謹んで、哀悼の意を表します。

関口睦夫先生は、1955年に大阪大学理学部生物学科卒業後、同大学大学院理学研究科に進学され、吉川秀男先生が主宰されていた遺伝学教室で学ばれました。当時ようやく遺伝子の本体として定着していたDNAの複製機構を解き明かしたいと考えられ、カイコの絹糸腺、ウサギの虫垂およびファージ感染大腸菌を用いて核酸の合成を中心に研究されました。1959年には、Nature誌に「Synthesis of deoxyribonucleic acid by phage-infected *Escherichia coli* in the presence of mitomycin C. M. Sekiguchi and Y. Takagi, Nature, 183, 1134-1135 (1959)」を発表され

るなど、当時から常に最先端の研究にチャレンジされていたようです。博士課程修了後、1960年4月に金沢大学医学部の生化学教室（高木康敬教授）に助手として赴任されました。1961年には米国に留学され、最初の2年間は米国ペンシルヴァニア大学のSeymour S Cohen教授のもとでファージ誘導酵素系について、その後は米国パーデュー大学のSeymour Benzer教授のもとでT4r遺伝子について研究されました。1965年11月に帰国され、高木先生が主宰されていた九州大学医学部第一生化学教室で、核酸の生化学に関する研究を展開されました。1969年3月には、九州大学理学部生物学科に開設されたばかりの分子遺伝学講座の初代教授として着任され、生涯の研究テーマとなったDNA修復の研究を始められました。1985年4月からは高木先生の後任として医学部第一生化学教室の教授に迎えられ、1991年10月1日からは生体防御医学研究所教授として生化学部門を担当されました。1992年4月から1996年3月の定年退官まで生体防御医学研究所長を務められ、実に30年5ヶ月間に亘り、九州大学での教育と研究に専念されました。

生物にとって、その遺伝情報を担うゲノムDNAを細胞から細胞へ、親から子へと正確に伝え維持することは最も基本的な生物学的機能ですが、DNAは活性酸素による酸化や紫外線、 γ 線などの電離放射線への暴露により多様な損傷を被ることが知られています。DNAは正確に複製されなければなりません、そのためにはDNA上に生じた損傷はすぐに修復される必要があります。関口先生は、紫外線照射でDNA中に生じたピリミジン二量体を修復する酵素を大腸菌に感染するバクテリオファージT4から同定し、1970年に世界で始めて報告されました。その後、精製・純化した酵素（T4エンドヌクレアーゼVと命名）と本酵素の欠損変異体を用いた解析から、DNA修復酵素の生化学的機能と生物学的意義を世界に先がけて明らかにされ、DNA損傷修復機構の研究分野を開拓されました。

関口先生は、その後大腸菌をモデル生物として用い、DNA損傷修復機構と突然変異制御機構の研究を展開されました。DNA上に塩基配列として保存された遺伝情報はアデニンとチミン（A:T）、グアニンとシトシン（G:C）の相補的な塩基対によってその半保存的複製が保障されていますが、関口先生は鋳型DNA鎖に相補的なDNA鎖を正確に複製するには、一分子ずつ相補的なヌクレオチドを対応させる複製機構とともに鋳型DNA鎖の損傷や複製の誤りを修復する損傷修復機構の大きな分子装置が必要であることを明らかにされました。関口先生は、自然突然変異および誘発突然変異を高頻度に生ずる大腸菌の変異株を多数分離し、さらにそれぞれの遺伝子を世界に先駆けてクローン化し、その生化学的な機能を解明されました。その結果、鋳型DNA中に蓄積した損傷を複製の前に修復する一群のDNA修復酵素、DNAポリメラーゼやその関連分子、さらに間違っって新生DNA鎖に取り込まれたヌクレオチドを除去する校正3'→

5' エキソヌクレアーゼ (*dnaQ* 遺伝子産物) と複製後まで取り残された DNA 損傷や誤対合したヌクレオチドを修復する酵素 (*uvrD* 遺伝子産物) などが遺伝情報維持に重要であることを明らかにされました。

関口先生は、大腸菌において最も強力な自然突然変異抑制遺伝子 *mutT* の解析から、MutT 蛋白質が DNA ポリメラーゼの基質ヌクレオチドプール中に蓄積した酸化ヌクレオチド (8-oxo-dGTP) を分解することで、自然突然変異を非常に低いレベルに保つことを明らかにされ、上記の DNA 修復や複製酵素関連の遺伝子に加えて、ヌクレオチドプールの浄化機構が遺伝情報維持の上で非常に重要であることを世界で最初に明らかにされました。さらに、哺乳動物から MutT と相同のタンパク質を同定し、それを MTH1 (MutT Homologue 1) と名付けました。MTH1 を欠くマウスを樹立して解析したところ、複数の臓器で自然発がんの頻度が高くなることが明らかになりました。

九州大学での関口先生の研究は国内外から高く評価され、「DNA 傷害の修復と遺伝情報の維持機構の研究」の成果に対して、1997 年度の日本学士院賞が授与されました。

関口先生は、九州大学定年退官後は福岡歯科大学において、私立大学学術フロンティア推進事業「疾患における遺伝的、環境的要因の相互作用とその制御」(1998 ~ 2007 年度)、さらに 2008 年度からは私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「疾患の抑制におけるゲノム安定性と環境ストレスの制御」(2008 ~ 2012 年度)、「疾患の発症と進展を抑制する分子基盤」(2014 ~ 2018 年度)の研究代表者として 2019 年 3 月に退職されるまで、(1) 突然変異と発がんの抑制機構と (2) 細胞増殖・分化の制御と歯科疾患治療へのアプローチの 2 つの主要課題についての研究を推進されるとともに、若手研究者の育成に尽力されました。この間、活性酸素による遺伝子 DNA の酸化損傷が自然突然変異および自然発がんの原因として重要であることをマウスを用いた研究で明らかにされました。また、発がん物質であるアルキル化剤による突然変異誘発と細胞死の誘発機構の研究を展開し、この 2 つの過程は DNA 修復酵素 (MGMT) とアポトーシス誘導に関わる因子 (MLH1) の欠損によって大きく突然変異誘発、そして発がんへと傾くことを明らかにされました。さらに、ヒトにおいてもこのような修復遺伝子の発現異常や機能異常が発がんやがんの悪性化の原因となっていることを明らかにされ、発がん抑制に関して新しい視点を提示されました。

最近の 5 年間では、関口先生の研究グループは自然状態の細胞内で酸化をひき起こす要因の実体が細胞の代謝に伴って生じる活性酸素であることを明らかにされました。老化もまた酸素ストレスによってひき起こされることを明らかにされ、特に酸素ストレスによる RNA の酸化が重要な要因になることを示されました。RNA は DNA の鋳型から数千分子つくられるので、たとえその一部が酸化されても細胞の機能には大きな影響を生じないとこれまで考えられてきましたが、最近の研究の結果、酸化された RNA が細胞内に残り、それが大きな生物学的効果をもたらすことが明らかになってきていました。関口先生の研究グループは酸化 RNA の細胞内での動態を調べ、酸化された RNA に結合して細胞をアポトーシスに導くタンパク質 PCBP1 を同定し、PCBP1 や関連するタンパク質が細胞の老化、ひいては個体の老化を抑えている可能性を示唆されています。この研究は、関口先生の退職後も福岡歯科大学で継続されています。

関口睦夫先生はその生涯を通して、遺伝子 DNA の損傷修復機構を分子遺伝学と生化学的アプローチで徹底的に研究され、突然変異の分子機構の実体と本質とを明らかにし、さらに老化に関与する RNA 損傷応答機構を発見されるなど、常に世界をリードする研究を展開されてきました。2006 年には、その成果に対して瑞宝中綬章が授与されました。

2019 年 3 月末に福岡歯科大学を退職される際には、「私は今月末で福岡歯科大学での仕事を終え退職することになりました。今後は少しのんびりし、興味ある問題については私なりに考えていこうと思っています。」とのメッセージを先生の教えを受けた門下生の同門会である「睦門会」のメンバーに宛てて、近況を綴られていました。関口睦夫先生は、11 月 14 日の朝に体調を崩され、緊急入院されていましたが、12 月 2 日の夕方 6 時半に眠るように旅立たれました。

関口睦夫先生、長い間お疲れさまでした。そして、ありがとうございました。心よりご冥福をお祈り致します。

九州大学生体防御医学研究所長
中別府 雄作

第43回日本分子生物学会年会 開催のお知らせ（その2）

会 期：2020年12月2日(水)～4日(金)（3日間）
会 場：神戸国際会議場、神戸国際展示場、神戸ポートピアホテル
年 会 長：上村 匡（京都大学大学院 生命科学研究科）
演 題 登 録 期 間：2020年7月1日(水)～7月31日(金)
※延長はありません（Late-breaking abstractは例年通り9月に募集予定です）
事前参加登録期間：2020年7月1日(水)～10月7日(水)
年会事務局連絡先：第43回日本分子生物学会年会事務局（株）イー・イー企画 内）
〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋2-4-4 一ツ橋別館4階
Tel: 03-3230-2744 Fax: 03-3230-2479 E-mail: mbsj2020@aeplan.co.jp
年会ホームページ：https://www2.aeplan.co.jp/mbsj2020/

【年会のコンセプト その2】（英文でより詳しく書かせていただきました）

皆様、すでに公開している年会ホームページ (<https://www2.aeplan.co.jp/mbsj2020/>) はご覧いただけましたか。「このデザインは（神戸で開催するから）神戸ルミナリエ？」とお声を下さる方や、動画の印象から「ステンドグラス越しに眺める雪空」を連想してくださる方もおられます。ですが、ここは一つ「曼荼羅（マンドラ）」と見てはいただけませんか。分子生物学会年会で議論される研究分野の中から、一部をモチーフとして取り込んだ小宇宙が表されています。果てしなく多様な分野が、孤立することなく互いに連関し合う年会は、まさにマンドラの世界ではないでしょうか。

年会のコンセプトである“New Faces, New Questions, and Revitalized Worlds”を実践するべく、オーガナイザーの皆さんが練られた指定シンポジウムのページも、ぜひご一読ください。また、公募ワークショップには創意工夫を凝らした企画を多数ご応募くださり、ありがとうございました。現在選考を進めています。この会報では、一般演題（ポスター）、分子生物学会では初めての試みとなる研究シーズプレゼンテーション“Showcase”、市民公開講座、そしてフォーラム企画の公募（6月15日締め切り）をお知らせしています。次号（6月号）でさらに詳しくご案内申し上げます。

第43回日本分子生物学会年会
年会長 上村 匡
（京都大学大学院生命科学研究科）

Have you kindly visited the Japanese version of the home page of the 43rd annual meeting of the MBSJ (MBSJ2020; <https://www2.aeplan.co.jp/mbsj2020/>)? If not, please take a look. What do you imagine the design presents? You might associate it with The Kobe Luminarie, which is a signature winter event of the Kobe region, or a snowy sky through stained glass. The design actually represents Mandalas, which are symbols of fusion and unity, expressing that the universe and people are fundamentally linked. In every MBSJ annual meeting, participants are exposed to torrents of questions, approaches, and data, all of which relate to the rich profusion of basic life sciences. The impression of the meeting might be a “kaleidoscopic view” where individual reflections are eye-grabbing, but potentially confusing to scientists from different fields. However, it has been the unwavering mission of our society to strike creative sparks along the borders of distinct fields and methodologies, making unifying breakthroughs. Realizing such “Mandalas” is a vast undertaking, far beyond the scope of a single meeting; yet I hope that MBSJ2020 will continue pursuing that ultimate goal. In that spirit, we welcome you to bring new and/or revitalized perspectives to the 43rd annual meeting.

Tadashi Uemura
President of MBSJ2020
(Graduate School of Biostudies, Kyoto University)

【プログラム】

◆シンポジウム（全 19 テーマ）

12 月 2 日(水)（第 1 日目）※予定

網羅的ゲノム解析が切り拓く生命科学

Unraveling the life sciences with genome-wide analyses

オーガナイザー：山本 拓也（京都大学 iPS 細胞研究所 / WPI ヒト生物学高等研究拠点）

山田 泰広（東京大学）

Organizer : YAMAMOTO, Takuya (Kyoto University)

YAMADA, Yasuhiro (The University of Tokyo)

予定講演者：

岡田 随象（大阪大学）OKADA, Yukinori (Osaka University)

工樂 樹洋（理化学研究所生命機能科学研究センター）KURAKU, Shigehiro (RIKEN Center for Biosystems Dynamics Research)

三浦 恭子（熊本大学）MIURA, Kyoko (Kumamoto University)

山路 剛史（シンシナティ小児病院医療センター）YAMAJI, Masashi (Cincinnati Children's Hospital Medical Center)

山田 泰広（東京大学）YAMADA, Yasuhiro (The University of Tokyo)

山本 拓也（京都大学）YAMAMOTO, Takuya (Kyoto University)

超並列シーケンシング技術の普及により、細胞内における DNA および RNA の配列決定や質的・量的変化、さらにはそれらの制御機構までも網羅的（ゲノムワイド）に捉えることが容易となった。現在では、多くの生命科学の研究分野で NGS を用いた網羅的解析技術が日常的に使用され、生命現象の謎の解明や新しい知見の発見に利用されている。本シンポジウムでは、がん、老化、発生、幹細胞、遺伝、進化といった様々な生命科学の研究分野で、網羅的ゲノム解析がどのように利用されているのかを俯瞰することにより、生命現象の本質を明らかにするために必要となる方法論とは何かを考えたい。

Due to massively parallel sequencing techniques, it is now relatively easy to perform qualitative and quantitative genome-wide analyses to study the regulatory mechanisms of DNA and RNA sequences. Researchers in various life science fields have used these techniques to elucidate diverse systems fundamental to life. In this symposium, following on these gains, we will look at how genome-wide analysis will transform our understanding of several relevant life science topics such as cancer, aging, development, stem cells, genetics, and evolution, with attention to advances in methodologies.

細胞競合による生体制御とがん

Cell competition in development and cancer

オーガナイザー：井垣 達吏（京都大学大学院生命科学研究科）

大澤 志津江（名古屋大学大学院理学研究科）

Organizer : IGAKI, Tatsushi (Kyoto University)

OHSAWA, Shizue (Nagoya University)

予定講演者：

井垣 達吏（京都大学）IGAKI, Tatsushi (Kyoto University)

大澤 志津江（名古屋大学）OHSAWA, Shizue (Nagoya University)

藤田 恭之（北海道大学）FUJITA, Yasuyuki (Hokkaido University)

石谷 太（大阪大学）ISHITANI, Tohru (Osaka University)

佐々木 洋 (大阪大学) SASAKI, Hiroshi (Osaka University)
LEVAYER, Romain (Institute Pasteur)

組織中の細胞は互いに生存競争していると考えられ、適応度の低い細胞は適応度のより高い細胞に近接すると細胞死を起こして組織から排除されるという現象が存在する。「細胞競合」と呼ばれるこの現象は、ショウジョウバエから哺乳類まで進化的に保存されており、組織の発生や恒常性維持、さらにはがんの発生過程においても重要な役割を果たすと推測されている。ここ数年の細胞競合研究の進展により、動物の個体発生やがん制御のメカニズムを新たな視点で捉えられるようになってきた。本シンポジウムでは、細胞競合に関する最新の知見を発表していただき、その個体発生やがん制御における役割を考察するとともに、細胞競合の生理的意義や今後の研究の方向性について議論したい。

Cells in the animal tissue compete for their survival with neighboring cells. For instance, in developing tissues or cell culture systems, cells with higher fitness actively eliminate neighboring cells with lower fitness by inducing apoptosis. This phenomenon, called cell competition, seems to be an evolutionarily conserved multicellular process which could play important roles in tissue development and homeostasis. Recent studies in the roles and mechanisms of cell competition have opened new ways of looking at animal development and cancer regulation. In this symposium, we will summarize recent progresses in understanding cell competition and discuss how it contributes to animal development and cancer.

ウイルス研究の多様性：2020 から未来へ

Diversity in virology: 2020 and beyond

オーガナイザー：朝長 啓造 (京都大学ウイルス・再生医科学研究所)

PARRISH, F. Nicholas (理化学研究所生命医科学研究センター)

Organizer : TOMONAGA, Keizo (Kyoto University)

PARRISH, F. Nicholas (RIKEN Center for Integrative Medical Sciences)

予定講演者：

PARRISH, F. Nicholas (理化学研究所生命医科学研究センター) PARRISH, F. Nicholas (RIKEN Center for Integrative Medical Sciences)

LOPEZ, Carolina B. (University of Pennsylvania)

WILEN, Craig (Yale School of Medicine)

渡辺 登喜子 (東京大学) WATANABE, Tokiko (The University of Tokyo)

牧野 晶子 (京都大学) MAKINO, Akiko (Kyoto University)

杉田 征彦 (京都大学) SUGITA, Yukihiro (Kyoto University)

20 世紀のウイルス学は、動植物に病気を起こすウイルスの克服を目的に進んできた。ウイルス分離とモデル生物を用いた病理解析から始まった研究は、培養細胞と遺伝子工学技術の発展を通じて大きく前進し、ウイルス複製と病原性の分子メカニズムの理解を確立した。そして現在、ウイルス研究は多様性の時代を迎えている。最先端技術を駆使した研究に加えて、以前は顧みられなかった非病原性ウイルスと環境ウイルスの多様性にも注目が集まっている。内在性ウイルスの探索や宿主との共進化解析は、ウイルスの起源そして生命進化への役割を明らかにしつつある。多様化したウイルス学はどこへ行くのか？本シンポジウムでは、ウイルス学の未来を予測する新しいウイルス研究を推進している研究者を国内外から招聘し、その方向性を探る。

Virology in the 20th century progressed with the aim of overcoming pathogenic viruses in animals and plants. Isolation of viruses and study of their pathology in model organisms was greatly advanced through development of culture cell systems and genetic engineering techniques. This virology has established our understanding of the molecular mechanisms of viral replication and pathogenesis. Now, virus research is entering an era of diversity. In addition to the studies using cutting-edge techniques, previously neglected non-pathogenic viruses, as well as the diversity of environmental viruses, are now attracting many researchers interested in the nature of viruses. Studies of endogenous

viruses and virus-host co-evolution have begun to predict the origin of viruses and highlight their roles in life evolution over millennia. Where will this newly diversified virology go? In this symposium, we will have information exchanges and active discussions to explore new concepts and future directions in virology.

WPI 生命科学合同シンポジウム

WPI joint symposium for innovative life science & technology

オーガナイザー：柳田 素子（京都大学大学院医学研究科 / WPI ヒト生物学高等研究拠点）

平尾 敦（金沢大学がん進展制御研究所 / WPI ナノ生命科学研究所）

Organizer：YANAGITA, Motoko (Kyoto University/ASHBi)

HIRAO, Atsushi (Kanazawa University/NanoLSI)

予定講演者：

佐藤 莊（大阪大学免疫学フロンティア研究センター (IFReC)） SATOH, Takashi (Osaka University, Immunology Frontier Research Center)

平野 有沙（筑波大学） HIRANO, Arisa (University of Tsukuba)

星野 歩子（東京大学） HOSHINO, Ayuko (The University of Tokyo)

柴田 幹大（金沢大学 / ナノ生命科学研究所 (NanoLSI)） SHIBATA, Mikihiro (Kanazawa University/Nano Life Science Institute)

平岡 裕章（京都大学） HIRAOKA, Yasuaki (Kyoto University)

「世界トップレベル研究拠点プログラム (WPI)」では平成 19 年から現在まで数多くの拠点が形成され、世界最高レベルの研究が行われている。本事業の 1 つの目標は「融合領域の創出」である。本シンポジウムでは、大阪大学の免疫学フロンティア研究センター (IFReC)、筑波大学の国際統合睡眠医科学研究機構 (IIS)、東京大学のニューロインテリジェンス国際研究機構 (IRCIN)、金沢大学のナノ生命科学研究所 (NanoLSI)、京都大学のヒト生物学高等研究拠点 (ASHBi) の 5 拠点から、それぞれの拠点長に新進気鋭の研究者を 1 名ずつご推薦いただき、そのご研究をご講演いただく。5 拠点の領域は免疫、睡眠、ナノ科学、neurointelligence、human biology と多岐に渡るが、このシンポジウムが拠点横断的な交流の一助になればと願っている。

Since 2007, the “World Premier International Research Center Initiative (WPI)” has built many research centers, in which the world's highest level of research is being conducted. One goal of this project is the creation of fusion areas in research. The project leaders of Immunology Frontier Research Center (IFReC) at Osaka University, International Institute for Integrative Sleep Medicine (IIS) at University of Tsukuba, International Research Center for Neurointelligence (IRCIN) at University of Tokyo, Nano Life Science Institute (NanoLSI) at Kanazawa University, and Institute for the Advanced Study of Human Biology (ASHBi) at Kyoto University have recommend young and extremely talented PIs to give lectures on their cutting edge research in this symposium. The five centers cover a wide range of fields such as immunology, sleep medicine, neurointelligence, nano life science, and human biology. We hope this symposium will help exchanges of ideas across the research centers and strengthen the connection between young and talented researchers including the audience.

アーキアの分子生物学が発信するもの

What the molecular biology of archaea tells us

オーガナイザー：跡見 晴幸（京都大学大学院工学研究科）

石野 良純（九州大学大学院農学研究院）

Organizer：ATOMI, Haruyuki (Kyoto University)

ISHINO, Yoshizumi (Kyushu University)

予定講演者：

ALBERS, Sonja-Verena (University of Freiburg)

石野 良純 (九州大学) ISHINO, Yoshizumi (Kyushu University)

跡見 晴幸 (京都大学大学院工学研究科) ATOMI, Haruyuki (Kyoto University)

(TBC)

(TBC)

生物を構成する3つのドメインのうち、アーキアは細菌や真核生物には見られない固有の生命機能を有する。それに加えて、特にDNA複製・転写・翻訳などの情報プロセッシング機能においては、アーキアと真核生物が共通の祖先を有し、アーキアが有する分子メカニズムはより祖先型と考えられている。本シンポジウムではアーキア研究の最前線を紹介することにより、生命進化、DNAの複製・修復、転写および細胞生理に関して、アーキアの分子生物学から学べることを議論したい。

Members of the Archaea, which comprise the third domain of life, exhibit unique biological functions not found in bacteria or eukaryotes. In addition, they also utilize mechanisms that are considered ancestral to those utilized in eukaryotes, most notably in functions related to information processing. In this symposium, we will illustrate the frontiers of archaeal research, and hope to discuss what the molecular biology of Archaea tells us in terms of biological evolution, DNA replication and repair, transcription and physiology.

コケ植物とシャジクモ植物から陸上植物を探る

Land plants viewed from bryophytes and charophytes

オーガナイザー：荒木 崇 (京都大学大学院生命科学研究科)

榊原 恵子 (立教大学理学部)

Organizer：ARAKI, Takashi (Kyoto University)

SAKAKIBARA, Keiko (Rikkyo University)

予定講演者：

榊原 恵子 (立教大学) SAKAKIBARA, Keiko (Rikkyo University)

荒木 崇 (京都大学) ARAKI, Takashi (Kyoto University)

経塚 淳子 (東北大学) KYOZUKA, Junko (Tohoku University)

関本 弘之 (日本女子大学) SEKIMOTO, Hiroyuki (Japan Women's University)

安居 佑季子 (京都大学) YASUI, Yukiko (Kyoto University)

西山 智明 (金沢大学) NISHIYAMA, Tomoaki (Kanazawa University)

基部陸上植物であるコケ植物の3つの主要な系統（蘚類、苔類、ツノゴケ類）を代表するモデル植物のゲノム情報と実験技術の整備が進み、それは陸上植物の姉妹群であるシャジクモ植物にも広がりつつある。これにより、陸上植物を陸上植物たらしめている諸形質の起源と進化の分子基盤を理解することが可能になってきた。本シンポジウムでは、そうした研究潮流を代表する研究を紹介し、陸上植物の進化について議論したい。

Recently, genome information and molecular biological tools and techniques have become available in three major clades of bryophytes, namely, mosses, liverworts, and hornworts. This trends extend to charophytes, sister groups of land plants. With these developments, we are now able to understand molecular bases of the origin and evolution of key characters of land plants. In this symposium, we will introduce recent advances and will discuss land plants' evolution viewed from basal land plants and their sister groups.

拡大する構造生物学

Expanding Structural Biology

オーガナイザー：朽尾 豪人 (京都大学大学院理学研究科)

小林 拓也 (関西医科大学医学部)

Organizer : TOCHIO, Hidehito (Kyoto University)
KOBAYASHI, Takuya (Kansai Medical University)

予定講演者 :

坂田 絵里 (マックスプランク生化学研究所 / ゲッティンゲン大学) SAKATA, Eri (Max-Planck-Institute of Biochemistry & University Medical Center Göttingen)
竹内 恒 (産業技術総合研究所創薬分子プロファイリング研究センター) TAKEUCHI, Koh (National Institute of Advanced Industrial Science and Technology)
南後 恵理子 (理化学研究所放射光科学研究センター) NANGO, Eriko (RIKEN SPring-8 Center)
寿野 良二 (関西医科大学) SUNO, Ryoji (Kansai Medical University)
広川 貴次 (産業技術総合研究所創薬分子プロファイリング研究センター) HIROKAWA, Takatsugu (National Institute of Advanced Industrial Science and Technology)
朽尾 豪人 (京都大学) TOCHIO, Hidehito (Kyoto University)

近年のクライオ電子顕微鏡の爆発的な技術的進展により、構造生物学の分野は歴史的な転換点を迎えている。加えて、分子シミュレーションや蛍光イメージング、データサイエンスの分野においても様々な技術革新が進んでおり、生体分子研究を取り巻く環境は大きく変貌しつつある。近い将来、生体分子の理解やその研究法に飛躍的な進歩が起きることは予想に難くない。重要なことは、これら技術革新の恩恵が、専門家周辺にとどまらず、全ての生命科学研究者に届けられ、分子細胞生物学全体の発展に寄与することであろう。本シンポジウムでは、構造生物学的アプローチによって基礎生物学や医学・薬学などの様々な生命科学の課題に取り組む研究者を招き、生体分子研究の最新情報を共有するとともに、今後の構造生物学の展望を議論する。

Due to the explosive technological progress of cryo-EM in recent years, the field of structural biology has reached a historic turning point. In addition, various technological innovations are progressing in the fields of molecular simulation, fluorescence imaging, and data science. Now, the environment surrounding biomolecular research is changing drastically. In the near future, dramatic progress will be made in the understanding and research methods of biomolecules. It is important that the benefits from these innovations reach all life science researchers, a niche of specialized experts, which will contribute to the development of overall molecular cell biology. This symposium invites researchers who work on various issues in the life sciences such as basic biology, medicine, and pharmacy through structural biology approaches, to share the latest information on biomolecular research, as well as to discuss future structural biology prospects.

12月3日(木) (第2日目) ※予定

動物における腸内微生物叢の進化：宿主-微生物間の相互作用と機序

Evolution of gut microbiota in animals: Host-microbe interactions and mechanisms

オーガナイザー：片山 高嶺 (京都大学大学院生命科学研究科)

早川 卓志 (北海道大学大学院地球環境科学研究院)

Organizer : KATAYAMA, Takane (Kyoto University)

HAYAKAWA, Takashi (Hokkaido University)

予定講演者 :

早川 卓志 (北海道大学) HAYAKAWA, Takashi (Hokkaido University)
鈴木 太一 (マックスプランク研究所) SUZUKI, Taichi A. (Max Planck Institute of Developmental Biology)
中島 啓介 (沖縄科学技術大学院大学) NAKASHIMA, Keisuke (OIST)
服部 佑佳子 (京都大学) HATTORI, Yukako (Kyoto University)
片山 高嶺 (京都大学) KATAYAMA, Takane (Kyoto University)

自然界においては、いかなる動物も微生物との共生なくして生きていくことは出来ない。微生物との関係は、皮膚や口腔内、また腸内において生涯と通じて続く。近年の研究によって、腸内微生物叢が宿主の生理機能や病理に多大な影響を及ぼすことが明らかとなっており、一部においては、ある種の代謝物や遺伝子・タンパク質が特定の生理機能や病理の変化と関連付けられるようになってきた。しかしながら、何が腸内微生物叢を形成するのか、どのようにして腸内微生物叢が制御されているのか、また、どのような進化の帰結として共生関係が築かれたのかということについては未解明な部分が多く残されている。本シンポジウムは、宿主－微生物間の相互作用を支える分子基盤を分子生物学的・進化的側面から考えることを目的にしており、昆虫、魚類、げっ歯類、ヒトおよびヒト以外の霊長類を対象にしている研究者に講演を頂く予定である。

No animal in nature can live without its commensal bacteria. The association begins after birth and continues throughout life at various sites of the body such as the skin, the oral cavity, and the intestine. Recent studies have shown that gut microbes significantly affect host physiology and pathology, and in several cases, specific metabolites or genes/proteins have been linked with particular physiological and pathological alterations in the host. However, our knowledge regarding what shapes the gut microbiota, how the microbial continuity is regulated during life, and why the symbiotic relationship is established as evolutionary consequences remains fragmentary. This symposium will focus on molecular dialogues underlying host-microbe interactions from a viewpoint of molecular biology and evolution. To this end, we will invite five to six speakers who have addressed mechanistic questions regarding these issues using insects, fishes, rodents, non-human primates, and humans.

生物学における機械学習のアプローチの最先端

Machine learning in biology

オーガナイザー：杉村 薫（京都大学高等研究院 物質－細胞統合システム拠点）

小林 徹也（東京大学生産技術研究所）

Organizer：SUGIMURA, Kaoru (Kyoto University)

KOBAYASHI, J. Tetsuya (The University of Tokyo)

予定講演者：

SCHIEBINGER, Geoffrey (The University of British Columbia)

松永 康佑（埼玉大学）MATSUNAGA, Yasuhiro (Saitama University)

太田 禎生（東京大学）OTA, Sadao (The University of Tokyo)

森下 喜弘（理化学研究所生命機能科学研究センター）MORISHITA, Yoshihiro (RIKEN Center for Biosystems Dynamics Research)

近年、生命科学の各領域で、深層学習やデータ同化などの機械学習の重要性が盛んに提唱されている。本シンポジウムでは、分子動力学計算、一細胞シーケンス解析、細胞工学技術、器官形成モデリングなどに対して、機械学習のアプローチを導入することで生命科学を推進している、新進気鋭の研究者を招聘する。分子から細胞、器官にまたがる多様な研究対象を取り上げることで、各論を超えた、より普遍的な技術やコンセプトの創発に向けた議論の場となることを期待している。

Machine learning has become increasingly important in biology. This symposium aims at bringing together scientists from various disciplines who employ machine learning to deepen our understanding of living systems. Presentations cover a wide spectrum of topics such as molecular dynamics, single cell sequencing analysis, cell bioengineering, and organogenesis modelling. By integrating a variety of research subjects ranging from molecules up to organs, we hope that the symposium will stimulate active discussion on more universal technologies and concepts.

Dynamic and structural regulation of chromosome inheritance in meiosis

オーガナイザー：CARLTON, Peter（京都大学大学院生命科学研究科）

篠原 美紀（近畿大学大学院農学研究科）

Organizer : CARLTON, Peter (Kyoto University)
SHINOHARA, Miki (Kindai University)

予定講演者 :

CARLTON, Peter (京都大学) CARLTON, Peter (Kyoto University)
篠原 美紀 (近畿大学) SHINOHARA, Miki (Kindai University)
今井 裕紀子 (国立遺伝学研究所) IMAI, Yukiko (National Institute of Genetics)
澁谷 大輝 (Göteborg 大学) SHIBUYA, Hiroki (University of Gothenburg)
伊藤 将 (カリフォルニア大学デーヴィス校) ITO, Masaru (University of California, Davis)

The correct inheritance of genetic material through sexual reproduction is ensured by a complex array of regulatory mechanisms operating throughout the cell division process of meiosis. While the drastic morphological changes undergone by chromosomes in meiosis, as well as the coordination between recombination and the discrete two-step loss of chromosome cohesion that enables correct chromosome segregation have been the subject of intense investigation, the molecular mechanisms underlying these processes, and by extension all of eukaryotic genetics, have only recently begun to emerge. We will share recent developments in the field and encourage discussion with the aim of generating new connections and understanding.

動物行動や神経疾患の神経基盤の解読と操作

Toward understanding and manipulation of neural bases underlying animal behaviors and psychiatric diseases

オーガナイザー : 今吉 格 (京都大学大学院生命科学研究科)
林 (高木) 朗子 (理化学研究所脳神経科学研究センター)
Organizer : IMAYOSHI, Itaru (Kyoto University)
HAYASHI-TAKAGI, Akiko (RIKEN Center for Brain Science)

予定講演者 :

今吉 格 (京都大学) IMAYOSHI, Itaru (Kyoto University)
林 (高木) 朗子 (理化学研究所脳神経科学研究センター) HAYASHI-TAKAGI, Akiko (RIKEN Center for Brain Science)
山中 章弘 (名古屋大学) YAMANAKA, Akihiro (Nagoya University)
JOHANSEN, Joshua (理化学研究所脳神経科学研究センター) JOHANSEN, Joshua (RIKEN Center for Brain Science)
小宮山 尚樹 (カリフォルニア大学サンディエゴ校) KOMIYAMA, Takaki (University of California, San Diego)

近年、動物の様々な本能行動や高次脳機能を制御する神経基盤が明らかになってきている。電気生理学や神経活動イメージングに基づいた生理学的な理解に加えて、遺伝子や分子レベルでの神経回路研究も進展している。また、光遺伝学や化学遺伝学などを中心に、神経回路に人工的な摂動を加えることができるツールの、分子開発も精力的に実施されている。これらのツールを、ニューロンだけでなく、グリア細胞や神経幹細胞にも適応することで、分子、回路、個体レベルの階層を超えて、脳の作動原理のシステムの理解が進んでいる。また、神経変性疾患や精神疾患など、脳機能の異常・破綻による疾患発症メカニズムや、新規の治療戦略の開発も行われている。本シンポジウムでは、これらの先鋭的研究を進めている研究者の講演に基づき、脳神経回路研究と操作の最先端について紹介し、今後の発展性について議論したい。

Recent studies have revealed neural bases underlying animal's innate behaviors and higher brain functions. In addition to the physiological understandings with electrophysiology and neural activity imaging, neural circuits studies at the molecular levels, such as gene expression controls and protein modifications/transportations, are progressing first. And, development of optogenetic and chemogenetic actuator tools which are able to artificially manipulate neural circuits has been intensely carried out. These tools have been applied to neurons, glial cells or neural stem cells in the brain, and

have contributed to understanding of working principles of the brain at the system level, as well as the molecular, circuit and animal individual levels. Application of these cutting edge technologies has also contributed to understanding of neurological and mental diseases caused by disfunction or misregulation of brain functions. In this symposium, pioneer scientists will introduce the frontiers of these research topics, and we will discuss future possibilities of neural circuit research and artificial interventions.

独自技術開発を通じた新たなブレークスルーへの挑戦

Challenge to technological breakthrough for a more in-depth understanding of complex biosystems

オーガナイザー：永樂 元次（京都大学ウイルス・再生医科学研究所）

猪股 秀彦（理化学研究所生命機能科学研究センター）

Organizer：EIRAKU, Mototsugu (Kyoto University)

INOMATA, Hidehiko (RIKEN Center for Biosystems Dynamics Research)

予定講演者：

遊佐 宏介（京都大学）YUSA, Kosuke (Kyoto University)

武部 貴則（東京医科歯科大学）TAKEBE, Takanori (Tokyo Medical and Dental University)

加納 ふみ（東京工業大学）KANO, Fumi (Tokyo Institute of Technology)

吉本 敬太郎（東京大学）YOSHIMOTO, Keitaro (The University of Tokyo)

沖 真弥（九州大学）OKI, Shinya (Kyushu University)

近年、分子生物学および細胞生物学の発展により、がん・神経系・個体発生などの複雑な生命現象の基本的な理解が飛躍的に進んだ。さらに深い理解に到達するためには、より高い感度および解像度で生命現象を計測・解析し、新たな側面から生命現象を捉える新規技術の開発が求められている。本シンポジウムでは、複雑な生命現象の理解のためのブレークスルーを求めて、既存の技術を超えた独自技術の開発に取り組む研究者に焦点を当てる。

In recent years, with the development of molecular biology and cell biology, a basic understanding of complex biosystems such as cancer, nervous system, and ontogeny has dramatically advanced. In order to reach a more in-depth understanding, it is necessary to develop new technologies that measure and analyze biosystems with higher sensitivity and resolution, and capture phenomena from new aspects. In this session, we will focus on researchers working on the development of original technologies in search of a breakthrough for a more in-depth understanding of complex biosystems.

分子レベルで紐解く植物－微生物間相互作用

Principles of plant-microbe interactions revealed at molecular levels

オーガナイザー：由里本 博也（京都大学大学院農学研究科）

晝間 敬（奈良先端科学技術大学院大学先端科学技術研究科）

Organizer：YURIMOTO, Hiroya (Kyoto University)

HIRUMA, Kei (Nara Institute of Science and Technology)

予定講演者：

由里本 博也（京都大学）YURIMOTO, Hiroya (Kyoto University)

BAI, Yang（中国科学院）BAI, Yang (Chinese Academy of Sciences)

按田 瑞恵（東京大学）ANDA, Mizue (The University of Tokyo)

杉山 暁史（京都大学）SUGIYAMA, Akifumi (Kyoto University)

晝間 敬（奈良先端科学技術大学院大学）HIRUMA, Kei (Nara Institute of Science and Technology)

植物の地上部表面（葉圏）や地下部（根圏）には多種多様な微生物が棲息しており、植物と微生物との生物間相互作用

用は、それぞれの成長・増殖だけでなく、生態系、地球環境の維持において重要な役割を果たしている。近年の次世代シーケンサーやその他の解析技術の進歩により、植物共生微生物の菌叢解析や、共生系における植物と微生物双方の生理・生態の解明に関する研究が進展してきた。本シンポジウムでは、植物-微生物共生関係の特異性や微生物による植物生長促進効果等に関わる植物側および微生物側の生理機能やそれを支える原理について、関与する代謝物やタンパク質、遺伝子に着目した分子レベルでの機能解析により解き明かそうとする最新の研究動向を紹介する。また、分子機構の理解だけでなく、農業への展開も含めた今後の展望についても議論したい。

Wide varieties of microorganisms colonize the surface of the aerial parts of plants (phyllosphere) and the area of soil surrounding plant roots (rhizosphere). Plant-microbe interactions contribute not only to their growth and proliferation but also to maintenance of ecosystem and global environment. Due to the progress of analytical tools and techniques such as next-generation sequencing, community composition of plant-associated microbes and physiology and ecology of both plants and microbes have recently been deeply understood. In this symposium, we would like to introduce recent research trends in the molecular mechanism of plant-microbe interactions revealed by the analysis of metabolites, proteins, and genes involved in determination of the specificity between plants and microbes and plant-growth promotion by microbes. We will also discuss future prospects of agricultural application of the principles of plant-molecular interactions.

「細胞老化から見た個体老化・加齢性疾患」

A molecular link between cellular senescence and age-relevant disorders

オーガナイザー：近藤 祥司（京都大学大学院医学研究科）

高橋 暁子（公益財団法人がん研究会がん研究所がん生物部）

Organizer：KONDO, Hiroshi (Kyoto University)

TAKAHASHI, Akiko (The Cancer Institute of JFCR)

予定講演者：

BERNARD, David (Centre de Recherche en Cancérologie de Lyon)

近藤 祥司（京都大学）KONDO, Hiroshi (Kyoto University)

高橋 暁子（公益財団法人がん研究会がん研究所）TAKAHASHI, Akiko (The Cancer Institute of JFCR)

早野 元詞（慶應義塾大学）HAYANO, Motoshi (Keio University)

城村 由和（東京大学）JOHMURA, Yoshikazu (The University of Tokyo)

本邦は世界最長寿かつ少子化も同時進行し、現在、高齢化率 25%を超える世界唯一の国であり、グローバル高齢化の中で日本はそのフロンランナーである。「老化先進国」日本で観察される、高齢者の多様性は、老化という生命現象の複雑さと、その個人差・地域差の両者を反映する。「老化」したときに初めて顕在化する「多様性」の存在を、我々は意識せざるをえない時代に突入した。「老化の多様性」は、最近の老化研究の成果である「老化の両面性」の積み重なりとも解釈できる。その代表例は、「細胞老化の生物学的両面性」であろう。「細胞老化」は、「細胞癌化に対する生理的防御バリアー」である一方で、「SASP（老化関連分泌因子）を通じて慢性炎症や発癌を促進する」という負の側面も判明した。「細胞老化」の観点からの疾病研究が重要な課題となりつつあり、本シンポジウムでは、その最新の知見を討議いただく予定である。

World-wide, human society is aging, both in developed as well as in developing countries. People over age 65 constitute 8.7% of the world population. Japan represents a super-aging society, in which the aging population exceeds 25 %. While life expectancy is increasing in Japan, there is also an increase of frail people, who are predisposed to be bedridden. Thus, individually variable elderlies are observed in super-aging countries, as aging is a highly complex biological process exhibiting great individual variation. While several hallmarks of aging are listed, cellular senescence is one of the most prominent features in human aging. Recent advances in aging research identified the double-edged sword behavior of cellular senescence. Senescence would serve as a barrier against tumorigenesis in vivo, while SASP, senescence-associated secretory phenotype, from senescent cells promotes sterile inflammation. In this symposium, we would focus on the close link between cellular senescence and organismal aging/ aging-related diseases.

オミクス解析を起点とする生命科学の最前線

Frontiers in Omics-triggered Life Sciences

オーガナイザー：石濱 泰（京都大学大学院薬学研究科）

ファガラサン シドニア（理化学研究所生命医科学研究センター）

Organizer：ISHIHAMA, Yasushi (Kyoto University)

FAGARASAN, Sidonia (RIKEN Center for Integrative Medical Sciences)

予定講演者：

CHEN, Yu-Ju (Academia Sinica, Taiwan)

ファガラサン シドニア（理化学研究所生命医科学研究センター）FAGARASAN, Sidonia (RIKEN Center for Integrative Medical Sciences)

杉山 直幸（京都大学）SUGIYAMA, Naoyuki (Kyoto University)

有田 誠（慶應義塾大学）ARITA, Makoto (Keio University)

岩田 通夫（九州工業大学）IWATA, Michio (Kyushu Institute of Technology)

次世代シーケンサや質量分析の進歩により、比較的容易に大規模データを産出することが可能になってきた。また、最新の数理統計学により、これらのデータから注目すべき現象や分子を抽出することも可能になりつつある。しかし研究現場では依然としてオミクス解析が仮説証明のツールとして使われることも多い。本シンポジウムでは、オミクス解析がもっとも力を発揮する不偏的オミクス計測を起点として生命科学研究を進めている例を紹介するとともに、それぞれのバイオロジーにおいて、どのようにすればオミクス解析のもつポテンシャルを最大化できるかについて議論したい。

Recent advances in next-generation sequencers and mass spectrometry have made it possible to produce large-scale datasets relatively easily. In addition, state-of-the-art statistics approaches allow the extraction of notable phenomena and molecules from these data. However, the omics measurement based on these approaches is still often used as a hypothesis confirming tool. In this symposium, we will introduce examples of life science research starting from unbiased omics measurement where the performance of the omics technology becomes the most effective, and would like to discuss how to maximize the potential of omics analysis in each area of biology.

12月4日(金)（第3日目）※予定

統合合成生物学：人工細胞モデルから多細胞システム制御まで

Multiscale Synthetic Biology: From artificial cells to multicellular engineering

オーガナイザー：齊藤 博英（京都大学 iPS 細胞研究所）

戎家 美紀（EMBL Barcelona）

Organizer：SAITO, Hirohide (Kyoto University)

EBISUYA, Miki (EMBL Barcelona)

予定講演者：

齊藤 博英（京都大学）SAITO, Hirohide (Kyoto University)

戎家 美紀（EMBL Barcelona）EBISUYA, Miki (EMBL Barcelona)

SICILIANO, Velia（Istituto Italiano di Tecnologia-IIT）

車 兪澈（国立研究開発法人海洋研究開発機構）KURUMA, Yutetsu (JAMSTEC)

市橋 伯一（東京大学）ICHIHASHI, Norikazu (The University of Tokyo)

合成生物学は、生物の産業応用とともに、生命システム形成原理の理解を目指す基礎科学を推進する上で重要なアプローチの1つである。生物学、化学、物理学、工学等の異分野の研究者が、異なる階層での人工生命システムや人工細胞の設計及び構築を試みている。本シンポジウムでは、多様な分野から気鋭の研究者を一堂に会し、合成生物学の

最新の話題 - 生命起源の問題に迫る生命システムの創発、多細胞発生システムの構築、応用を志向した哺乳類合成生物学など-を提供する。人工細胞モデルから多細胞システム制御までを含む、様々な階層での合成生物学研究を通じて、生命のように振る舞うシステム形成に必要な原理や、未来の合成生物学のチャレンジについて議論したい。

Synthetic Biology has a promising outlook in biotechnology as well as basic sciences for understanding the self-organizing principle of biological systems in life. Synthetic biology approaches have been attracting biologists, chemists, physicists and bioengineers who are concerned with designing and constructing artificial biological systems across different scales. In this symposium, we invite distinguished speakers from diverse fields and discuss recent hot topics in synthetic biology, including designing and evolving artificial cells to investigate the origin of life, engineering living cells for practical applications, and modulating multicellular systems to examine the underlying mechanisms. We would also like to discuss common design principles of life-like systems and future challenges of synthetic biology.

動植物の概日性ホメオスタシスの共通基盤原理

Common Principles Lying behind Animal and Plant Circadian Homeostasis

オーガナイザー：土居 雅夫（京都大学大学院薬学研究科）

遠藤 求（奈良先端科学技術大学院大学先端科学技術研究科）

Organizer：DOI, Masao (Kyoto University)

ENDO, Motomu (Nara Institute of Science and Technology)

予定講演者：

遠藤 求（奈良先端科学技術大学院大学） ENDO, Motomu (Nara Institute of Science and Technology)

DODD, Antony (John Innes Centre, Department of Cell and Developmental Biology)

CHANG, Hung-Chun (Chinese Academy of Sciences)

MASRI, Selma (University of California, Irvine)

土居 雅夫（京都大学） DOI, Masao (Kyoto University)

細胞・組織・個体に表出する概日リズムは実に多様な階層のフィードバックループ（FL）によって形成される。時計遺伝子の転写および転写後修飾を介した細胞内のFLのみならず、細胞間結合による組織内のFL、複数の臓器をまたいだ円環によるFL、さらには外環境や他個体との相互作用を間に挟んだFLも個体レベルの概日振動の形成維持・調律に重要である。温度、光、エネルギー源の競合等の過酷な環境変化に適応するためには多重の動的制御が必須となる。日夜の劇的な環境変化に生きる動植物が獲得した概日性ホメオスタシスの共通基盤原理を議論したい。

Circadian rhythms are maintained by multiple feedback loops (FL). In addition to intracellular FL via transcription and post-transcriptional regulation of clock genes, intratissue-level FL formed by cell-to-cell interactions, FL mediated by systemic organ-to-organ communications, FL via signals from environment or via social interactions with other organisms are each potentially important for maintaining stable rhythms in vivo. Common principles underlying animal and plant circadian homeostasis will be discussed in this symposium. Dynamic coordination of multiple loops at different layers are likely important for efficient adaptation to severe environmental changes in temperature, light, and energy source.

T細胞の老化と疲弊：代謝制御の観点から

T cell aging and exhaustion: from a perspective of metabolism

オーガナイザー：濱崎 洋子（京都大学 iPS 細胞研究所）

山下 政克（愛媛大学大学院医学系研究科）

Organizer：HAMAZAKI, Yoko (Kyoto University)

YAMASHITA, Masakatsu (Ehime University)

予定講演者：

山下 政克（愛媛大学）YAMASHITA, Masakatsu (Ehime University)

濱崎 洋子（京都大学）HAMAZAKI, Yoko (Kyoto University)

鵜殿 平一郎（岡山大学）UDONO, Heiichiro (Okayama University)

GORONZY, Jorg J. (Stanford University)

HAIGIS, Marcia C. (Harvard Medical School)

T細胞は、様々な免疫細胞の機能を制御するとともにがんや感染細胞を直接殺傷する強力なエフェクターであり、獲得免疫応答において中心的な役割を果たす。近年、加齢に伴うT細胞の機能的変容、すなわち「老化」(T cell aging)が、易感染性のみならず炎症性疾患など様々な加齢関連疾患の発症や病態に深く関与することが明らかになってきた。一方で、がんや慢性ウイルス感染などによる持続的な抗原刺激は、免疫チェックポイント分子の発現を誘導し、T細胞に「疲弊」(T cell exhaustion)と呼ばれる機能低下を引き起こす。本シンポジウムでは、この「老化」と「疲弊」というT細胞の質的変容について、特にここ最近で大きく発展した免疫細胞の代謝制御（イムノメタボリズム）を中心にヒト解析を含めた最新の研究成果を紹介し、その類似点と相違点、分子メカニズム、さらには機能賦活化の可能性について議論したい。

T cells play a central role in the coordination of adaptive immune responses and cell-mediated immunity. Recently, “T cell aging” (dysregulation of T cell function with age) has been recognized as a basis of not only immunological deterioration but also various age-related diseases such as metabolic diseases. On the other hand, persistent antigen exposure during cancers or chronic virus infections upregulates the expression of immune checkpoint molecules and causes “T-cell exhaustion”, a functional failure similar but distinct from T cell aging. In this symposium, recent advances in understanding the mechanisms of T-cell aging and exhaustion will be presented from a perspective of immunometabolism, a rapidly growing field. Furthermore, possible interventions to rejuvenate immunity in elderly and cancer patients will be discussed.

生殖細胞：遺伝情報継承機構の解明とその試験管内再構成

Germ Cells: Mechanism and In Vitro Reconstitution of Genetic and Epigenetic Inheritance

オーガナイザー：斎藤 通紀（京都大学大学院医学研究科）

林 克彦（九州大学大学院医学研究院）

Organizer：SAITOU, Mitinori (Kyoto University)

HAYASHI, Katsuhiko (Kyushu University)

予定講演者：

斎藤 通紀（京都大学）SAITOU, Mitinori (Kyoto University)

林 克彦（九州大学）HAYASHI, Katsuhiko (Kyushu University)

佐々木 裕之（九州大学）SASAKI, Hiroyuki (Kyushu University)

GORIELY, Anne (University of Oxford)

TRONO, Didier (Ecole Polytechnique Fédérale de Lausanne)

LORINCZ, Matthew (University of British Columbia)

生殖細胞は、精子・卵子に分化し、その融合により新しい個体を形成、我々の遺伝情報やエピゲノム情報を次世代に継承する。重要なことに、生殖細胞は、減数分裂、エピゲノムリプログラミング/プログラミングにより、それぞれ遺伝情報、エピゲノム情報の多様性を形成し、種の進化を可能とする。本シンポジウムでは、生命の根源たる生殖細胞による遺伝情報継承機構の解明とその過程を試験管内で再構成する研究の最前線を議論し、これら研究の社会へのインパクトを考察する。

Germ cells differentiate into spermatozoa or oocytes and create new individuals by their fusion, perpetuating our genetic and epigenetic information into new generations. Importantly, they create the diversity of such information through meiotic recombination and epigenetic reprogramming/programming, serving as a driving force of evolution.

In this symposium, we will discuss a frontier of the research for investigating the mechanism of genetic and epigenetic inheritance by germ cells and of the efforts for reconstituting such processes in vitro, with a reference to its potential impact on society in general.

◆ワークショップ（80 テーマ前後）

多数のご応募を頂き、1月31日に募集を締め切りました。採否結果は2月下旬に応募者へご連絡いたします。

◆一般演題（ポスター）

本年会では、優れたポスター発表を行った一般演題に対し、ポスター賞を授与します。全てのポスターを受賞対象とし、ポスター発表者の身分や年齢は問いません。多数のポスター賞推薦者に会場を回っていただき、ポスター賞候補を推薦いただく予定です。推薦上位5%以内の演題に対して優秀賞を、1%以内に最優秀賞を授与します。

一般演題の発表形式はポスター発表のみとなり、公募ワークショップへの一般演題からの採択はありません。また、本年会のポスターセッションではディスカッサー制は採用いたしません。演題投稿期間は7月1日(水)から7月31日(金)となります。本年会では演題投稿期間の延長はいたしませんので、十分お気を付けください。投稿手順などの詳細は6月発行の次回会報、および年会ホームページにてご案内いたします。多数の演題投稿をお待ちしております。

◆バイオテクノロジーセミナー

企業との共催によるランチョンセミナーを開催いたします。

◆その他の企画

ライフサイエンス研究者が持つ優れた研究シーズについて、研究促進や事業化のためのパートナーとの出会いの場を設けます（シーズプレゼンテーション“Showcase”）。また、年会最終日の夕方に、福岡伸一氏（分子生物学者・青山学院大学教授・ロックフェラー大学客員教授）を講師にお迎えして、市民公開講座を開催する予定です。年会参加者も参加していただけます。

その他の企画は詳細が決まり次第、年会ホームページにてご案内いたします。

【フォーラム企画の公募について（応募締切：2020年6月15日(月)）】

生命科学と関連するが、シンポジウムやワークショップ形式にとられない、比較的自由度の高い企画や、技術開発あるいは社会との関連が深い企画を「フォーラム」と位置づけ、1テーマ90分の時間枠（18：30～20：00）で、日本分子生物学会の会員の皆様より企画を公募します。奮ってご応募ください。使用言語は日本語あるいは英語のいずれでも結構です。

新学術領域等の「冠」企画の実施も可能とします。フォーラムの「冠」企画においては、講演者が領域内のメンバーのみでも結構です。ホームページやプログラム集への冠表記には、10万円の協賛金の負担をお願いいたします。冠表記を希望する方は、フォーラム応募フォーマットの該当欄へ掲載を希望する団体名を記載し、併せて「フォーラム冠企画申込書」を年会事務局にメール添付で提出してください。

◆応募要領

年会ホームページより応募フォーマットをダウンロードし、必要事項を記入のうえ、6月15日(月)までに年会事務局宛、E-mailにて提出してください（E-mail：mbsj2020@aeplan.co.jp）。

- 1) テーマタイトル（和文・英文）
- 2) 2名のオーガナイザーの氏名（和文・英文）・所属（和文・英文）（2名のうち少なくとも1名は日本分子生物学会の会員にお願いします。）
- 3) 概要（言語）：使用言語に応じて日本語あるいは英語のいずれか
- 4) 概要（文字数）：日本語の場合全角400文字程度、英語の場合半角800字程度
- 5) 予定演者の氏名（和文・英文）・所属（和文・英文）
- 6) 連絡窓口となるオーガナイザーの氏名、連絡先
- 7) 予想される聴衆数
- 8) 冠表記希望の有無、希望する場合の団体名

備考：時間延長などの御希望がありましたら御相談ください。

問い合わせ先：第43回日本分子生物学会年会事務局

Tel：03-3230-2744 E-mail：mbsj2020@aeplan.co.jp

【日程表（予定）】

		8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
12月2日 (水)		シンポジウム ワークショップ 9:30-11:45 バイテク セミナー 12:25-13:15 学会企画 12:00-13:15 シンポジウム ワークショップ 16:00-18:15 フォーラム 18:30-20:00													
		貼付 展示会 見学 13:15-13:45 ポスター 発表・討論 13:45-15:45 撤去													
		機器・試薬・書籍展示 9:30-17:00													
12月3日 (木)		シンポジウム ワークショップ 9:30-11:45 バイテク セミナー 12:25-13:15 学会企画 12:00-13:15 シンポジウム ワークショップ 16:00-18:15 フォーラム 18:30-20:00 総会 富澤基金 贈呈式 18:30-20:00													
		貼付 展示会 見学 13:15-13:45 ポスター 発表・討論 13:45-15:45 撤去													
		機器・試薬・書籍展示 9:30-17:00													
12月4日 (金)		シンポジウム ワークショップ 9:30-11:45 バイテク セミナー 12:25-13:15 シンポジウム ワークショップ 16:00-18:15 市民公開講座 18:30-20:00													
		貼付 展示会 見学 13:15-13:45 ポスター 発表・討論 13:45-15:45 高校生研究発表 13:45-15:45 撤去													
		機器・試薬・書籍展示 9:30-17:00													

※あくまで2020年2月時点での予定であり、今後変更される可能性があります

第 42 回日本分子生物学会年会 開催報告

昨年 12 月 3 日(火)～6 日(金)の 4 日間、福岡国際会議場・福岡サンパレス ホテル & ホール・マリンメッセ福岡にて開催した第 42 回日本分子生物学会年会は、7,129 名という多数のご参加と、演題数 3,852 (一般演題 3,114 と指定演題 738) にのぼるご発表をいただき、盛会のうちに終了いたしました。演題数は近年では最高の数字になりました。会員の皆様に心より感謝申し上げます。

令和の幕開けを記念する年会となった第 42 回年会では、「分子生物学のネクストステージ」と「食の都福岡へようこそ！大いに食べて、大いに飲んで、大いに議論しよう」の 2 枚看板？を掲げ、いつもの熱い議論と、地方開催のよさを両方楽しんでもらうことを目指しました。横浜・神戸と比べると会場が小ぶりなため開催期間が 4 日間になり、また予想を超える数のワークショップ応募のため会場のやりくりには困難を極めました。お陰様でほぼすべての企画がたいへん盛況だったと思います。一部の会場では聴衆が入りきれず、廊下のモニターにも黒山の人だかりができるという状況が生まれ、ご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。

今回はとくに年会の国際化について工夫を凝らしました。まず、英語で開催されるワークショップを年会 2 日目に集め、すべて英語で開催したシンポジウムと合わせ、この日を英語デーとしました(フォーラム、ランチョンを除く)。また、会期中は必ずどこかで英語のセッションが行われるようプログラムを組み、海外参加者を飽きさせないよう心がけました。海外若手会員の参加支援の条件を緩和し、37 名に旅費の補助を行ったほか、新たに外国籍学生・若手研究者(非会員)への参加支援を導入し、7 名に旅費の補助を実施しました。後者は日本分子生物学会「本体」からの支援によるものです。その結果、25 か国から 264 名のかたがたの参加があり、国際

化推進の第一歩を踏み出せたかなと思います。

分子生物学会最大の特徴ともいえるポスターセッションでは、297 名という多数の会員にポスターディスカッサーとしてご協力いただき、発表 3 分、質疑応答 3 分の持ち時間を仕切ることで、議論の火付け役を担っていただきました。私自身もバックアップ要員を務め、もちろん自由討論にも参加させていただきましたが、例年以上に活気溢れるポスターセッションを実現できたと自負しています。

夕方のプログラムもたいへん充実していました。3 日間で 30 のフォーラム(一部は企業協賛によるチュートリアル企画として実施)や学会企画が開催され、いずれも盛況だったほか、最終日には高校生発表と市民公開講座が開催され、それぞれ 130 名(引率者含む)と 290 名の皆様のご参加を得ました。

本年会の開催にあたり、寄附、展示、ランチョンセミナー、広告などにご協力いただいた企業・団体の皆様に感謝いたしますとともに、お忙しいなかシンポジウム企画、プログラム編成、ポスターディスカッサーの推薦などにお時間を割いてくださった組織委員、プログラム委員の皆様(特に中島欽一組織委員長と伊藤隆司プログラム委員長)、また事前準備から開催当日まで年会の企画運営に取り組んでいただいたエー・イー企画の皆様と、年会にご参加くださったすべての皆様にお礼を申し上げます。

2020 年 2 月
第 42 回日本分子生物学会年会
年会長 佐々木 裕之
(九州大学生体防御医学研究所)

キャリアパス委員会 年会企画報告

2019年の年会では、「それでいいのか？研究室の選び方」、「大学院の無償化を目指して」というテーマで2つのランチョンセミナーを行いました。会場には、学部生から教授の方々まで幅広い層にご参加いただき(初日：約270名、2日目：約240名)、活発に議論を行うことができました。

年会初日の「それでいいのか？研究室の選び方」では、事前にアンケートを実施して866件と非常に多くの回答をいただき、その結果とケータイゴングを利用した当日参加の方々の意見をもとにディスカッションを進めました。研究室選びで決め手となった点の一番が「研究内容」、次に「PIのキャラクター」ということで、納得の回答でした。大学にいたときの実感としては、「(いろんな意味で) 楽かどうか」、「ブラックかホワイトか」などの要因が大きく関わっているような印象ですが、分子生物学会の年会に参加される皆さんは研究重視ということで、安心しました。ただ、研究室に入る前の印象と入った後の実際が異なり、モチベーションを失うこともあります。研究室のホームページや論文を見て、研究内容を確認するのは重要ですが、実際に研究室主宰者と直接お話しされるのが一番間違いが無いと思います。また、自分と合わない研究室に入った場合は、次に移ることを考えたほうが良いとの意見が多くありました。学部の卒業研究で研究室に入ってから、修士課程、博士(後期)課程、博士研究員と何度も研究室を選ぶチャンスはあります。海外にも目を向ければ、非常に多くの研究室がありますので、広い視野で考えてみるといいのではないのでしょうか。もちろん、忍耐力は大切ですが、必要以上にひとつの研究室で無理することはないと思います。現在活躍している研究者の方々のキャリアも様々で、ずっと同じ研究室で大学院から助教、教授になった方もいれば、修士、博士、博士研究員で別な研究室を渡り歩いてきた、あるいは、大学院に再入学した方々などもあります。日本では寄り道や再挑戦することに抵抗感があるようですが、回り道は必ずしも悪いことばかりではないと思います。

2日目の「大学院の無償化を目指して」では、アメリカの大学院事情についてのお話から始まり、無償化のメリットやデメリットなどについてディスカッションしました。単に博士課程の学生が増えれば良いという単純な話ではなく、その後のキャリアパスなども含めて考える必要があることや学生の質の低下に関する危惧など、非常に建設的な議論ができました。ほとんどの大学院生が、大学院生に給与が支払われる場合、「報告書の提出などの負担はいとわない」と回答したことは、彼らの責任感や使命感を表していると思います。日本の研究が欧米諸

国や中国に遅れてきはじめているという危機感が叫ばれていますが、現在の研究の推進の中心を担い、かつ、将来的にも活躍が期待される博士課程学生の待遇改善はまさしく喫緊の課題であるといえます。文部科学省の方にも参加していただき、また、ランチョンセミナー後に情報交換を行いました。引き続き、情報交換や要望等をしていきたいと思っています。

ランチョンセミナーの概要と全文(学会HP)について、是非お目通しいただきたいです。

キャリアパス委員会
委員長代行 木村 宏

【それでいいのか？研究室の選び方】

- 日 時：2019年12月3日(火) 11:45～13:00
- 会 場：福岡国際会議場 2階 203
- 参加者：約270名
- 講 演：花嶋かりな(早稲田大学教育・総合科学学術院)

2019年キャリアパス委員会主催ランチョンセミナーでは、誰もが一度は経験する「研究室選び」がテーマとして取り上げられました。冒頭に司会からイントロダクションとして、8月に実施した事前アンケートの結果が紹介され、続いてキャリアパス委員のパネリストを交えたケータイゴングによる聴衆参加型のディスカッションが行われました。事前アンケートでは866件と例年に増して多くの回答が寄せられ、会場にも多数の学部学生、大学院生、ポスドク、PI(研究室主宰者)の方々にご参加いただき、リアルタイムでコメントをいただくことで「イマドキの理想の研究室」について皆さんと一緒に考える貴重な機会となりました。本開催報告ではセミナーで取り上げられた「研究室選びで重視すべき点」、「研究室内のコミュニケーション」、「働き方とキャリア形成」を中心に本ランチョンセミナーの内容についてご紹介します。

【研究室選びの判断材料】

初めての研究室配属やポスドクのスタートなど、研究者人生において研究室選びはつきものですが、研究室選択は就職先を選ぶのと同じくらいキャリア形成において重要な問題です。今どきの学生たちが何を基準に研究室を選んでいるのか、また現在研究室を主宰するPIが自分のキャリアを振り返って何を重視すべきとアドバイスするのかについては知りたいところです。事前アンケートでは「研究室選びの最も大きな決め手」については学

生、ポスドク、PIとも「研究内容」が1位を占め、研究室は研究テーマありきという考えで一致していました。一方研究内容の次に重視した・すべき項目として、学生は「研究室の雰囲気」を挙げたのに対し、PI自身は「PIのキャラクター（性格・個性）」と意見が分かれ、これら以外にも「研究業績」「研究費」「研究室で使う生物種」「研究機器の充実度」といった研究環境、設備がいずれも研究室の選択指標となることを示す結果となりました。さらに会場の参加者への「研究室選びで何を一番参考にしたか？」という設問に対しては「自らの意思（評判に関わらず、自分が良いと思えばいい）」が最も多く、次いで「研究室やPIの知名度・資金力」という結果となり、このあたりは学会に参加する学生の自主性も伺えました。予想外に「ウェブサイト」は少なく、会場からはホームページは正確な情報が得にくく良いことしか書かれていない、という批判や、海外のホームページのように具体的な情報やPI自身の考えを提示すべき、などPI側から有用な情報を発信することが重要であるという意見が寄せられました。ウェブや第三者の情報よりもPI自身との事前面談をしっかり行うことがミスマッチを少なくするポイントとして挙げられた一方で、あくまでも好きな研究をやりたいという意志が、結果的にやり遂げる環境の獲得にもつながり、条件も照らし合わせた上で最終的に自分で決めるのがよいというアドバイスも寄せられました。

【研究室内コミュニケーション】

研究室は一週間の大半を過ごす場所になりうるので、充実した研究生活を送るためには実験以外にも研究室メンバーとのコミュニケーションが鍵となってきます。「あなたは今の研究室を選んで満足していますか？」の設問に対し、会場の53%が「満足している」と回答したものの、逆に半数近くが何らかの不満を抱えているという結果になりました。不満があると答えた人のうち52%が「研究は充実しているが、研究室生活には不満がある」と答えており、研究室内の人間関係が日々の研究に影響を与え得るということを示唆しています。さらに「選んだことを後悔している」人が全体の10%にのぼり、合わない研究室に入ってしまった場合は進学の段階で他の大学や研究室を選ぶことも考えた方がよい、という意見もありましたが、「ラボ内のディスコミュニケーションから生じている可能性もある」のでPIに相談したり、PI側からも不満の理由を知る努力をしてほしいというアドバイスがありました。「研究室も生き物のようなもので、あなたが入ったことによって研究室自体が変わる（変わってしまうし、変えることもできる）ことを認識したらよいと思う」というコメントもあり、研究室を流動的なものと捉えれば改善策もみえてくるかもしれませ

ん。

具体的な人間関係では学生、スタッフ、PIそれぞれの立場からコメントが寄せられました。自分のPIの好きな点については「頭が良い、能力が高い」、「Discussionにほとんど付き合ってくれる」が上位を占め、不満点については「多忙すぎる」、あるいは少数派ですが「威圧感がある」「頼りにならない」等のシビアなコメントも寄せられました。一方「PIのほうから見た研究室の学生・スタッフ」は不満点の1位が「ギラツキが少ない」、2番目が「研究室に来て研究をしない」という結果になり、PI世代と今の研究室の学生では意識にギャップがあることもわかります。具体的な学生・スタッフとの交流について、飲み会やラボ旅行などのラボイベントについては学生、スタッフ、PIとも「どちらかという開催したい」という回答が最も多く、「先生との呑み会楽しい」という声もある一方で「有志に開催してもらい、私は福澤諭吉に代理参加させる」という配慮もあり、また「30歳代以下限定の教員＆院生の飲み会がある。もちろんPIにはナイショ…話の内容は推して知るべし」「いわゆる『ブラック研究室』と言われていても、中の人たちが楽しそうに文句を言っているラボは良いラボだと思います。」というコメントから、PIから離れたところでメンバー同士が愚痴を言い合える環境も、ある意味健全な研究室の証と伺えます。研究室のメンバーは一緒にいる時間が長いので仲良くやらなければいけないという心理がはたらきがちですが、サイエンスのよいところは立場に関係なくフラットに議論できるところにあり、多少合わなくてもお互いリスペクトしながらサイエンスを真摯にやっていけば新しい発想や問題解決につなげていける、という助言もいただきました。

【研究室の働き方改革】

実験系研究はデータを出してなんぼの世界でもあるので、研究室の滞在時間が長くなりがちです。会場では「あなたは土曜日または日曜日（どちらかでも）ほぼ毎週研究室に行っていますか？」という設問に対してはすべての職階で8割近くが「はい」という結果を占めました。数少ない企業の参加者は「いいえ」だったので、勤務時間に対しての認識が企業と大学とで異なる実体が見えにされました。一方大学でも「働き方改革」が提唱されてから土日に働くことが厳しくなっている傾向もあり、機関によっては届出を出して承認を得ないと土日に働けないという事例もありました。「夜間は事故の可能性があり、極力避けるべき。時間がなければ朝早く来て始めるほうが良い。研究時間が長いこと、研究室の滞在時間が長いことは、業績とは無関係でむしろ時間効率の悪さをさらけ出している。」という意見の一方で、「正月は休むと言っていましたが、もう2日です。いつから研

研究室に来るのですか？」というコメントもあり、このあたりは夜間土日祝日の研究についてPI間でも認識の違いがあることがわかりました。実際「夜間土日祝日の研究について」は各カテゴリとも「自主的に行う場合は良いが強制されるべきではない」という回答が一番多かった一方で、「実験内容や状況が差し迫っている場合は、やるべきだと思いますか？」という設問については「やるべき」という意見が多い結果となり、他にも「休日は機器が空いているのでありがたい」、「細胞があるから土日は1時間だけ行く」、「土日は家事・育児があるので休めない」など、それぞれの状況に応じた働き方を遂行している状況も伺えました。また研究以外の業務が多すぎるという議論もありました。「PIを見ていて大変だと思いますか？」また「PIになって大変ですか？」という設問ではいずれも「はい」が8割を占め、「研究以外の仕事が多過ぎるように見えて、研究続けて目指すのこれなのか、と思って悩んでしまうときも…」というコメントや「忙しすぎてメンバーとなかなか話す時間がない」といった多忙による研究室メンバーと接する時間の少なさも問題として取りあげられました。一方で、アカデミアは研究が好きでこの道に進んでいる人がほとんどなので、その研究ができるということ自体が幸せという捉え方もありました。最近アカデミアの研究に対しても「仕事」という言葉が先行し土日実験することがマイナスに捉えられ、学生にとっても研究室選びのファクターとして「楽な研究室」が重視される傾向もありますが、本来研究とは熱中できる趣味で、だから土日もしたい、という意見もあり、それぞれの価値観をふまえた上で働き方を最適化していく必要があることを考えさせられました。

【研究室の選択とキャリア形成】

ほとんどの研究者は初めての研究室配属から独立したPIになるまでに、複数の研究室を渡り歩くことになります。実際に研究室の選択はキャリアにどのような影響を与えるのか？についてもディスカッションがなされました。「大学院時代、今の職の期間に研究に求めること」は「知識・技術・ロジックの習得など研究者としての成

長」が多かった一方で、「研究室を移る際、研究対象や手技が変わること」については「業績ができるまでに時間がかかるからなるべく避けたい」「ある程度やってきたことは活かしたい」という意見の他に「時間はかかるが多くのことを学びたいので率先して変えたい」という回答も多く、多様な技術や知識を吸収することが研究者のキャリア形成に重要であることがわかります。さらに「次に研究室を移るなら前回とは違う視点で選ぶ」と回答したポスドク・non-PIは、現在の研究室は「研究内容」で選んだが、次の研究室を選ぶ際には「PIになれるかどうか」を指標とするという意見が多く、研究室選択がキャリア形成に重要な問題であることをあらわしていました。会場からは「若い時は自分がいいと思った研究室を渡り歩いた。意図せず、キャリア形成に意義あったことに年とってから驚いている」というコメントも寄せられ、大学院やポスドク時代の経験や人脈が研究室を離れてからの財産となり、将来的にさらなるキャリア形成につながっていることが示唆されました。

おわりに

今回研究室選択というテーマで開催しましたが、セミナー後の回収アンケートでは「全PIに聞いてほしかった」という意見も多数寄せられた一方で「他の研究室の状況を知ることができてよかった（いつもラボに引きこもっているの）」「同じようなことで困っている人がいろいろいると元気がでた」などの意見も多く、普段入り込むことのできない他の研究室の実態を知るだけでも、前向きに研究室生活を送るきっかけになれることが示唆されました。パネルディスカッションを通じて理想の研究室には一つの正解があるわけではなく、PIの考え方や運営によって様々なパターンが存在しうることがわかった一方で、メンバー同士のコミュニケーションが一つのキーワードになったと思います。本ランチョンセミナーがみなさんのこれからの研究室選び、また充実した研究室生活を送るための一助となりましたら、キャリアパス委員一同として嬉しく思います。

（文責：座長・花嶋かりな）

〈アンケート〉 集計結果（四捨五入しています）

【問1】あなたの年齢は？

① 24歳以下	20	20.2%
② 25～29歳	24	24.2%
③ 30～34歳	14	14.1%
④ 35～39歳	9	9.1%
⑤ 40～49歳	15	15.2%
⑥ 50～59歳	13	13.1%
⑦ 60歳以上	4	4.0%

計 99 100.0%

【問2】 あなたの身分・職階は？

① 学部学生	3	3.0%
② 大学院生（修士）	21	21.2%
③ 大学院生（博士）	20	20.2%
④ ポスドク	11	11.1%
⑤ 大学教員（助教・講師・准教授）	23	23.2%
⑥ 大学教員（教授）	14	14.1%
⑦ 研究員	2	2.0%
⑧ 主任研究員・チームリーダー・室長以上	1	1.0%
⑨ 企業	3	3.0%
⑩ その他（特命教授）	1	1.0%
計	99	100.0%

【問3】 このセッションを何で知りましたか？（※複数回答可）

① 学会ホームページ	33	28.9%
② 年会ホームページ	36	31.6%
③ 会報	4	3.5%
④ プログラム集	29	25.4%
⑤ ポスター	2	1.8%
⑥ 会場内の広告	3	2.6%
⑦ フェイスブック	0	0.0%
⑧ クチコミ	3	2.6%
⑨ その他（ランチョンセミナー抽選紹介メール）	2	1.8%
⑨ その他（ランチョンセミナー整理券配布デスク）	1	0.9%
⑨ その他（アプリ）	1	0.9%
計	114	100.0%

【問4】 このセッションを開催した時間帯はどうでしたか？

① ランチョン形式でよかった	98	99.0%
② ランチョン以外の時間帯がよかった	0	0.0%
※ 未記入	1	1.0%
計	99	100.0%

【問5】 前半の講演はいかがでしたか？

① とても面白かった	37	37.4%
② まあまあ面白かった	38	38.4%
③ 普通	21	21.2%
④ あまり面白くなかった	0	0.0%
⑤ つまらなかった	0	0.0%
※ 未記入	3	3.0%
計	99	100.0%

【問6】 後半のディスカッションはいかがでしたか？

① とても面白かった	48	48.5%
② まあまあ面白かった	39	39.4%
③ 普通	8	8.1%
④ あまり面白くなかった	2	2.0%
⑤ つまらなかった	0	0.0%

※ 未記入	2	2.0%
計	99	100.0%

【問7】 今後このような試み続けるべきだと思いますか？

① 是非続けるべき	87	87.9%
② 続けるべきだが方法を変えた方がよい	7	7.1%
③ やめた方がよい	0	0.0%
④ わからない	2	2.0%
※ 未記入	3	3.0%
計	99	100.0%

【問8】 このセッションに関する感想をお聞かせください。

- ・事前アンケートの結果を配布いただき、ありがとうございました。
- ・事前アンケート結果が面白かったです。PIがPIのキャラを重視しているのはエゴにもとれるし、真実の声にも聞こえる。
- ・事前アンケート結果で、やはりボスと下の人間の間で認識の乖離があるなと思いました。
- ・事前アンケート結果で、PIと学生の認識のズレがおもしろかった。大学が研究機関でなく就活予備校となってしまっている今、サイエンスができない研究室も多いかと思う。そんな研究室の学生同士のミスマッチも考えていきたい。
- ・事前アンケート結果は、違いが分かりやすかった。
- ・事前アンケート結果で、自分と同じ思いの人は意外ということを知れてよかった。
- ・事前アンケートは、選択肢の設定の仕方がすでにある結果を期待してなされているように感じました。
- ・このように、学生、non-PI、PIなどのそれぞれの立場の意見を見ることができるとは興味深かった。ディスカッションでも出ていたように、この学会に来ている人々ですら、意見が分かれるということが明らかとなって良かった。
- ・ディスカッションにあったようにこの学会に来ている人々で意見をまとめるとこのようになる。是非とも、もっと幅広い枠で意見を集約して、すれ違いを正していく機会とできると良い。
- ・本学では、たてわりの教育システムをこわして、フラットなもの、かき根の高さを下げることがめざしている。教員がもっと学生達とふれ合える環境を作ろうと考え、改革を進めている。
- ・いわゆる”ブラック”ラボのPIはこういうセミナーに興味がない、または「自分は大丈夫、正しい」と思っているのではないかなと思う。もっと周知してほしい。全員に当事者意識をもってほしい。
- ・全PIが聞いてほしい。
- ・うちのボスにも来てほしい。そして改めてほしい。
- ・毎年、学生が多いような…。先生方にもきてほしい
- ・学部学生に一番伝えたい内容なのに、学会に来ている学部学生はあまり多くないのではないかな？と思った。
- ・この内容を来ていない学生、PIにも共有したほうがいいのかも…
- ・今回のギロンにもありましたが学会にこれてない学生のイケンも大切だと思います。オンライン中継とかは？
- ・この議論を研究室に配属する前の学部生に伝えられたら、より効果的だと思います。
- ・とてもおもしろかった。学会会員全員（学会に來れない人含む）の意見を聞きたい。
- ・学会に来る人達は、やっぱりサイエンスに対してちゃんとしているなど。
- ・学会に参加している方々の参加型セッションなので、共通認識を持てた。
- ・母集団が、本学会に來れる研究者、学生である、ということを知りながら結果を考えること。
- ・学生が先生の意見を知る場にもなるのでよいと思う。
- ・他ラボの状況が知れて、いい機会でした。（いつもラボに引きこもっているの）自分のラボとてらしあわせて、今後に役立ちそうです。
- ・雑務に追われていて研究の進みが遅いものの、他のラボはもっと大変なのを知って少し救われました。（もちろん業務改善は必要ですが）
- ・研究室で悩んでいるのは自分だけじゃないことが分かって、よかった。
- ・同じようなことで困っている人がいろいろいるなと元気がでた
- ・学生の意見（本音）を聞けておもしろかった。
- ・色々気付かせてくれた（学生の考えとか）。
- ・学生は彼なりに考えて行動しており、このセッションだけかもしれませんが、未来に希望を感じました。
- ・答えはないのだが、こういう問題を出し合う機会が良いと思う。多様性を認めるということが大事だと思います。
- ・土日に働くことのディスカッションが面白かったです。
- ・「研究室の選び方」がテーマなのに内容が浅い。土日に來ているとか、PIが多忙だとか、研究費とかいらぬ。広く浅くではない、テーマをほり下げるセッションにしてほしい。
- ・すでに研究室を選んでしまっている集団なので、ちょっと違う、という感じがしました。
- ・不満点についてもとり上げていて、参考になった。
- ・とても面白かったが、学生の視点の話ももう少しあるとよかった。
- ・PIの本音がもっときけたら良かった
- ・パネルディスカッションは有意義ではあったが、もう少しコメントの更新スピードを上げてほしいと思った。
- ・タイトルと内容にギャップを感じました。進行が（リアルタイムレスポンス）ムズカしかったのかもしれませんが。ただ、ラボで仲良く家庭的と促す一方で、働き方改革の話題は矛盾するのかな。
- ・コメント含め、色々な状況・意見を知れて良かったが、パネリストが非常に気を使って話しているように感じた。せっかくの機会なので、全体的にもっと率直な意見が聞きたい。
- ・パネリストはキャリアパス委員に限る必要はないのでは？
- ・フロアからの意見をパネリストが批判するような場面があったが、少し配慮がない印象…

- ・司会が話しすぎだ。パネリストに話をもっとふって下さい。鈴木先生と木村先生しか目立っていません。第一三共の人は2度しか話していないのでは？
- ・花嶋先生の司会、明瞭で良かったです！
- ・選択肢から選ぶ設問よりも具体的な意見を聞く時間を増やす方が良いのではないかと思います。
- ・ディスカッションの時間が長い方が良いです。
- ・もう少し後半のアンケートの選択肢を増やしてほしい。
- ・アンケート結果をMBSJのwebsiteでdownloadできるようにしていただけたら、ありがたいです。
- ・設問が優しすぎる。本音に迫れない。コメントは本音が少し知れて、参考になった。
- ・コメントの方法に、乱暴な言い方等は避けるよう促す注意書きがあると、見て嫌な気持ちにならないので助かります。
- ・もっとドロドロしてほしい。
- ・去年のセッションの方が楽しかった。
- ・匿名のため、本音の意見がいろいろ聞けて面白かった。
- ・近未来的で、双方向にコミュニケーションが取れた面白いセッションでした。
- ・コメントがとても面白かった。
- ・とてもおもしろいお話を聞けました。何よりコメントで参加できるのがよかったです。
- ・会場の方も参加できてよかったです。
- ・和やかな雰囲気でした。
- ・とてもおもしろかった。参加してよかった。
- ・とても興味深かったです。
- ・今後の参考になりました。
- ・大変参考になりました！！
- ・研究を続けても良いかもしれないという希望が少しもてました。ありがとうございました。
- ・研究室決めは大切なので、学ぶことが多かった。研究＝趣味になるのが理想的だなと思いました。
- ・アカデミアと企業との接点をより拡げて欲しい。

【問9】 来年以降のセッションで取り上げて欲しいテーマがあれば教えてください。

- ・ぜひ同じテーマでつづけてほしい
- ・学生で研究室を変えるメリット・デメリット
- ・企業からアカデミアへの移籍について
- ・アカデミックな道はどんな感じか（博士やポスドクの良いところ悪い所）
- ・修士学生の就活について（学生目線と職員目線）
- ・D進するかどうか。決め手。Dを取ったそのあとの将来について。
- ・ポスドクのキャリアパス
- ・ポスドク先のあっせんを受けるべきか。
- ・大学と大学以外のポスドクの働き方のちがい
- ・今のPI以外の人の目標は何か。研究をきわめたい / 学位をとりたいたい / 就職のためのキャリアアップなど
- ・よい M1、M2、Dr 像
- ・ラボ内の常識、ジェネレーションギャップについて
- ・学生（院生）はPIのことをどう考えているのか。PIは学生（院生）のことをどう考えているのか。
- ・PI vs. その他のようなディスカッションでお互いのすれ違いを共有していけると良い。
- ・PIや学生のモチベーションをくじくような日本の研究環境について。どうしたら研究力をあげ、PIも学生もハッピーになることができるのか。
- ・ラボ運営を改善するために
- ・ブラックラボやブラックPIに対して周囲（ラボメンバー、近所のラボ、学科）はどう接するか？
- ・アカハラ、パワハラ、セクハラ関連… アカハラなのに、隠ぺいされている、または指導に熱心なのにセクハラと（第3者に）うたがわれる…。この事実のズレ、どうすれば改善できるのでしょうか？
- ・「ファーストの論文をいつ書くか、どう書くか。」DCのように、早期に業績を求められる風潮とも関連して。早期業績主義は学生が研究室を移る妨げにもなっていると思うので深刻な問題だと感じている。
- ・予算について。国の予算に研究者がコミットする方法はないのか。
- ・研究費
- ・基盤的経費問題
- ・若手研究者の研究費について
- ・大学院生減少問題
- ・失敗談中心のトーク
- ・研究の質向上に関するテーマ
- ・キャリア形成とプライベートの両立
- ・研究とライフイベント（子育て）の両立、妥協について。学生参加者が多いと難しいかもしれませんが。
- ・特になし

【問10】 本年会での属性調査（添付資料）をご覧になった感想をお聞かせください。

- ・学部生が多くおどろいた
- ・学生が多い
- ・学生が多くて活気がありよかった。
- ・女性比率はまだまだ少ないですが、このような資料を見て「少ない」と認識することが重要だと思います。
- ・大学に持ち帰って、現在進めている大学院の組織改革の参考としたい。
- ・とても参考になりました。
- ・今後の参考にさせていただきます。
- ・今後も続けていってほしい

- ・勉強になりました。
- ・まだじっくりみてません。

【問 11】 その他、ご自由にどうぞ。

- ・ご飯おいしかったです。
- ・食事中や、コメント入力中等で、話の流れについていくことが難しいところがあった。
- ・配布資料は弁当をたべながらだったのでちゃんとみれてない。スライドの文字も小さくみづらかった
- ・会場間が遠くて開始に間に合わなかった
- ・スライドの文字が少し小さい。部屋の前付近の照明を落とした方が見やすいと思った。
- ・委員長の胡桃坂先生がご登壇されず、残念でした。皆に元気を与えてくださるパネリストですので。次回は是非！

〈ケータイアナライズシステム〉

〈アンケート〉 集計結果（四捨五入しています）

練習設問：皆さんの属性について教えてください。

・学部学生	14	8.1%
・大学院生（修士）	38	22.1%
・大学院生（博士）	32	18.6%
・ポスドク、助教、講師、准教授、研究員等の非 PI 職	39	22.7%
・独立助教・講師・准教授、主任研究員等の junior PI 職 （非テニュア・テニュアトラック）	10	5.8%
・教授等の PI 職（テニュア）	23	13.4%
・企業	2	1.2%
※未入力	14	8.1%
計	172	100.0%

設問 1：研究室を選ぶにあたり、何を一番参考にしましたか？

・研究室や PI の知名度・資金力	41	26.5%
・当該研究室メンバーの助言	12	7.7%
・友人や知り合いの研究者の助言	12	7.7%
・ウェブサイト	4	2.6%
・自らの意思（評判に関わらず、自分が良いと思えばいい）	73	47.1%
・その他	13	8.4%
計	155	100.0%

設問 2：研究室を移る際、研究対象や手技が変わることをどう思いますか？

・業績がでるまでに時間がかかるから、なるべく避けたい	31	20.3%
・時間はかかるが、多くのことを学びたいので率先して変えたい	96	62.7%
・PI の方針なので、嫌でも従う	2	1.3%
・何も考えず、流れのまま身を委ねる	12	7.8%
・PI の方針に従わず、自らのテーマで大発見をして見返したい	5	3.3%
・その他	7	4.6%
計	153	100.0%

設問 3：あなたは今の研究室を選んで、満足していますか？

・満足している	77	52.7%
・研究は充実しているが研究室での生活には不満あり	36	24.7%
・研究は充実していないが研究室生活は充実している	19	13.0%
・選んだことを後悔している	14	9.6%
計	146	100.0%

設問 4：（設問 3 で「1. 満足している」以外を選んだ方）どのような不満ですか？（複数回答可）

・ やりたい研究ができない ……………	17	15.6%
・ 研究や実験指導をしてもらえない ……………	23	21.1%
・ ハードワークを強要される ……………	10	9.2%
・ PI（先輩）が威圧的で意見が言いにくい ……………	14	12.8%
・ サイエンスをやる雰囲気がない ……………	22	20.2%
・ その他 ……………	23	21.1%
計	109	100.0%

設問 5：あなたは土曜日または日曜日（どちらかでも）ほぼ毎週研究室に行っていますか？

・ はい ……………	57	64.0%
・ いいえ ……………	32	36.0%
計	89	100.0%

設問 6：夜間土日祝日の研究は、実験内容や状況が差し迫っている場合は、やるべきだと思いますか？

・ やるべき ……………	133	91.7%
・ やる必要はない ……………	12	8.3%
計	145	100.0%

設問 7：（PI 職・ junior PI 職以外の方）PI を見ていて、大変だなあと感じますか？

・ はい ……………	88	88.0%
・ いいえ ……………	12	12.0%
計	100	100.0%

設問 8：（PI 職・ junior PI 職の方）PI になって、大変だなあと感じますか？

・ はい ……………	21	84.0%
・ いいえ ……………	4	16.0%
計	25	100.0%

設問 9：（設問 8 で「1. はい」と答えた方）何が一番大変ですか？

・ 多忙による研究室メンバーと接する時間の少なさ ……………	3	14.3%
・ 学生のモチベーションを上げるための努力 ……………	4	19.0%
・ 大学院（博士過程）進学率の低下 ……………	1	4.8%
・ 研究費の維持 ……………	12	57.1%
・ その他 ……………	1	4.8%
計	21	100.0%

設問 10：（PI 職・ junior PI 職以外の方）ボスとのコミュニケーション（研究以外の雑談や、食事を一緒に取るなど）は重要だと思いますか？

・ 重要 ……………	37	37.8%
・ ある程度必要 ……………	56	57.1%
・ 全く必要ない ……………	5	5.1%
計	98	100.0%

設問 11：研究室のメンバーとはどう付き合いますか？

・ 友達になってプライベートでも仲良くしたい ……………	37	26.4%
・ 研究室の中だけで仲良くできればよい ……………	70	50.0%
・ 実験ができる人とは仲良くするが、そうでない人とは社交辞令程度 ……………	10	7.1%

・実験に必要なことは話すが、極力話はしないようにする ………	3	2.1%
・盛り上げ役として、みんなをまとめた ……………	15	10.7%
・その他 ……………	5	3.6%
計	140	100.0%

コメント一覧

No	ハンドルネーム	コ メ ン ト
1	五目	上司（教授）には指導している感を伝えていて、実際には部下は放置か仕事丸投げっていう指導教員が結構いる気がします
2	楽しかったです	ご飯が美味しかった
3	あいうえお	みなさん経歴がすごい
4	YUKI.N	福岡、うどんが美味しかったです！
5	学生	是非ブラックラボの見極め方を教えて欲しいですね。
6	いんせー	PIとの飲みが接待のようになっている。気にいられない学生との待遇の差が大きいの、いかざるを得ないと思う。
7	ねこ	おしほりの水分量がすごい
8	hoge	企業にお勤めの方もいらっちゃって、本セッションが有意義に進むことを期待します
9	JJ	趣味にのめり込む PI を研究させるにはどうすればいいか教えてください。
10	デカ尻侍（切腹）	福岡万歳！（ちょんまげ3本）
11	gene	先生の専門外の実験をやる機会が多く専門外というのもあって助言がほとんどもらえず、自分で調べて一からやるしかないのが辛いです。
12	梅ちゃん	学部学生ですが講師を企業でやった事有ります。修士受かると良いな
13	M1 女	先生と一緒にランチしたいけど、いつも忙しそう
14	ボッチ	学生の頃の研究室選びは消去法で選びました。
15	ざっくす	尊敬できる指導教員の元、自主的に研究させてもらい大変感謝してます
16	YUKI.N	他大学に行くには web は大事だと思ってます…
17	モーモー	ラボにホームページがあるのですね
18	パワハラ耐性株	ウェブサイトの更新が滞っているので参考にならないことが多い
19	ナシ	web はウソ、大袈裟なことが多い。カッコいいことしか書かない
20	hoge	ウェブサイトに情報がないのは、忙しすぎてそこまで手が回らないのだと思います。実指導を重視していると思います
21	ルクマン	オーバードクターが多い研究室で怖いです
22	学生	いや、「研究内容」っていう選択肢がないから、「自らの意思」って答えてるんでしょ
23	KM	ホームページにけっこうお金や労力使って作成しても、誰も見ていないのですかねえ …
24	とりっぱー	ホームページ作るのにもお金かかりませんか？
25	ボッチ	ホームページの更新は大変です。
26	院生	Web サイトが数年間更新されていないラボも多いですね
27	修士学生	web の情報を鵜呑みにするのは良くないと私も思います
28	まる	結局 web ページよりも論文を見たりすることが多い
29	さぶろう	わたしの研究室は学生がホームページを作らされていましたよ
30	おやじ	やりたいことをやるのが一番重要ですね。
31	YUKI.N	ある程度やってきたことは活かしたい。

No	ハンドルネーム	コメ ン ト
32	mi	Web に 2019 の論文が掲載されていないと、更新がされていないのか論文が出ていないのか判断できないので勿体無いなと思います
33	D2	将来のキャリアパスを考えて、企業に行きたいなら1度は手技が変わる経験はあった方が良いでしょう。視野の広さという点や、大学では味わいにくいスピード感を嫌でも体験できます。
34	おやじ	視野を広げるのは重要だと思います。何でもチャレンジ！
35	ポッチ	ひとつの狭い世界の「常識」だけではなく、研究室をうつることで違う世界の別の「常識」も知る必要があると思います。
36	デカ尻侍（切腹）	理不尽な教授陣には、兵糧攻めじゃ～～（ちょんまげ3本）
37	しゅうし	今回の参加者に学生が多いから、その点も踏まえてアンケート結果を見るべきでしょうね。
38	D2	実験をして成果がでないのと、サイエンスの価値がないのは別だと思います
39	まなぶ	若いうちはしほりすぎず、広い知識を。
40	院生	分野を変えるのはハードルが高く感じます
41	某大学教授	いろいろと考える良い機会でした。世は変換点を迎えています。どの方向に学生や若手研究者を導くべきかビジョンを示す必要があると思います。
42	ラボ替え修士学生	ウェブ情報を信じて入って後悔しています。やりたかったことが出来なかった。
43	M1です。	学部時代の暗い雰囲気から楽しい雰囲気のラボに移って半年です。楽しい日々を過ごしています。前のラボと違い、教授が積極的にディスカッションしてくれるのはとても好きなんです、教授の頭の回転の速さについていけない時があります。
44	鈴木ファン	満足している人いいなあ。
45	おやじ	多かれ少なかれ不満はあると思いますよ。
46	胡桃坂先生のファン	胡桃坂先生が来られなくなったということで、心配しています。
47	みそしる	2年前からやりたいと思っていた実験を散々否定されて今頃になって突然やろうと言いだされた。一体この2年は何だったんだと言いたい。
48	YUKI.N	サイエンスの雰囲気が無いと研究室生活にも満足できないし、研究も充実しない…
49	ルクマン	オーバードクターが多い研究室なので将来が怖い（不満）
50	院生	研究への興味を失っている。学生の成果で学会に出て、質問に答えられない。悲しい。
51	パワハラ耐性株	この場に来ることができている時点で、実験面である程度充実している気が…
52	ポッチ	研究室がハラスメントの巣窟になっているケースがあります
53	院生	ボスの性格、業績、方向性などは確認したが、ラボメンバーの様子まで確認すればよかったな～と思っている
54	のん	人間関係でしょうね
55	レレレ	話を否定されるようになった
56	学生	「土日来ないなんて非常識」という、パワハラ PI は教育者として不適格
57	M1	先生がお金は豊富にあるのに共同研究に躍起になって、企業のスクリーニングをひたすらさせるだけ。研究をさせてほしい。
58	航海	PIの機嫌を損ねないために、PIの研究を行なっている。
59	院生	ラボの中でも指導教員によって満足度が違うように感じます、
60	YUKI.N	42番に同意です。
61	学生	先生「自分で調べてやってください。」
62	ナポレオン	生物という学問自体が結果出すの大変なのでハードワークなのは仕方ない気がしている
63	ナシ	サイエンスをやる気がないPI（終身雇用者）を辞めさせる方法はないのか。やる気を出してくれるのが一番ですが。
64	カンチッチボンバー	やりたいことは山ほどあるが、なかなか今やっている研究と結びつけることが難しい

No	ハンドルネーム	コメ ン ト
65	大学院生	干される学生が多いので怖くて意見できない
66	蜚	ボスがやる気ない。ゼミでも有意義なディスカッションができない。
67	D1	サイエンスをしない研究室は何をしているんですかね。
68	PI	学生の数が多すぎる。学部や修士で出ていくので、難しいテーマを与えられない
69	まる	コミュニケーションは難しい
70	ととと	特許関係の仕事をふられて自分の研究できず、指導も受けられない
71	D2	就活を経て、アカデミアと企業は全く違う世界と感じました。今の生活に不満がある方はぜひ企業を目指してみてください。企業は良い社員を入れないと詰みますので、情報発信に積極的です
72	匿名	先生には満足していますが学生の先輩にどうせ結果でないとよく言われるのはイラつきますね
73	M2	研究者は教育者ではないので、人として尊敬できる人を選ばないとダメだなと感じています
74	クラ吹き	PIの人格がとても重要 学部生だが同期が既に3人も辞めている
75	博士3年目	うちのラボは土曜にセミナー（半強制
76	☆☆☆	PIが論文を読まないの、サイエンスな議論ができない。言うことがいつもコロコロ変わるのはいらい
77	助教	木村先生、仰る通りです！
78	とりっぱー	任されたと思ってやったら勝手にやったと言われ、一つ一つ確認すると自分です考えろと言われます。
79	おやじ2	勇気を持ってラボを変えましょう。
80	ははは	大学執行部に締めつけられ、大学全体のやる気が低下しています
81	地雷搜索隊	地雷研究室を探すには成果の論文を確認するのがいいですか？
82	スチューデントX	MDの方の意見が聞きたい
83	満足している人	自分のとこのPIは学生が成長できるように、メンタル面も気にかけてくれます。ありがたい事です。
84	ブラック	前いたラボは不登校退学続出だった
85	ポスドク	ラボのホームページってどれくらいお金をかけるものなのか
86	氏	これ以上ないくらいいい上司です。強いて言うならすこーしだけケチ…
87	ボッチ	PIの人格がだんだんおかしくなってくることもあります。
88	a	HPが更新されてないことが多いかも。
89	かいちょう	もっと違うPIと一緒にラボセミナーやラボを共有することを奨めたい。小生の場合は、岡山大学時代に倉谷滋と阿形清和の教授同士で1つのラボみたいにしたが、学生にも教員にも結果的に良かったと思ってる。学生にはボスと全く違う視点でサイエンスと接しられるのは良い事だし、若手にもグチこぼすには良い環境が提示される。学生が研究の方向性を転換するにも良い環境が与えられる。
90	か	教授との人間関係より教授以下のPIとの人間関係
91	ルクマン	ポスドクが1ヶ月でラボに来なくなりました。意味深
92	P	サイエンスをやる雰囲気がないってどういうこと？
93	しゅうし	発信したくても、PIに学校等の運営に関する雑務が多すぎてHP更新ができないことも
94	カンチッチボンバー	論文投稿が忙しく、なかなかじっくりと勉強できない
95	おやじ	ヒトに強制しても、効果はでません。
96	YUKI.N	研究で必要なら行くけども、なるべく行かなくても良いように実験設計をしている（つもり）
97	ポスドク	自分で考えて行動するスタッフがおらず、PIの考えに軸がないのでディスカッションにもならず、サイエンスをする環境でない…。

No	ハンドルネーム	コメント
98	ボッチ	どういう立場であっても土日祝、深夜も研究室にいないと評価しないPIがいます。
99	パワハラ耐性株	休日は機器が空いているのでありがたい
100	院生	週末は彼女とデートに行くのでラボにはいきません
101	まる	熱心な人は実験の都合が中心に来てるように思う。
102	M1	PIに「〇〇くんは土曜日来ないね」とか言われると、自分も休んだら言われるのかなって思う
103	いん	培養しているとまあ来ざるをえない
104	修士学生	土日は休みたいです。土日出るなら平日早く帰りたい。
105	p	PIが土日に来るので行かないといけない空気になっている
106	D1	長く働く云々というより毎日面倒を見なきゃいけない細胞があるから土日は1時間だけ行きます。
107	レレレ	人が他にいないと集中して進められます。
108	hoge	企業は人件費という概念がありますが、大学は学生ならタダで使える駒ですからね
109	阪大生	土日祝休ませてくれ
110	まる	働き方改革…やりたくてやってる人は良いのでは、と思う。
111	みそしる	辛い土日は鍵が閉まっているくらいのラボなので、プロトコル上の理由以外は行きません。何とかこれでメンタル保っています。
112	MDです	研修医ルートも院生ルートも同じくらい働き方改革が遅れているので…
113	院生	土日は実験の都合上仕方ない時もありますよね…後仕事が捗る
114	鈴木ファン	助教ですけど土日行ってます。ワンオペなので行かないと研究が終わりません。
115	パワハラ耐性株	働き方改革というのは働く時間を制限することなのでしょうか。働く際の気持ちの変革にこそ（働くことを楽しむことができるような）にこそ改革があるのではないかなと思います。
116	ナシ	土日は家事、育児があるので、休めません
117	ボッチ	人手不足なので土日にも仕事をしに行きます。
118	えむいち	自分の研究が進むから土日行くことに苦はない
119	とりっぱー	細胞培養のことだけ、しに行きます
120	接待学会	うちのボスは週に2日しかいない
121	学生	木村先生の新学術の計画班の准教授に土日に学生にラボへ来ることを強制する先生いますよね。そんなやつを野放しにしていんですか？木村先生
122	修士学生 K	お金もらってる先生は労働基準法適用で、働いてもお金もらえない学生は労働基準法適用外なの変なの
123	PI	PIは率先して土日休むべき
124	p	壇上の先生方は土日働いてますか？
125	カンチッチボンバー	少し前は日曜日も行ってたのですが、歳をとる毎に心身ともにガタがきているような気がしたので、今はしっかり日曜日は休むようにしています。
126	S いう	週末休んでもいいけど、論文でなくて困るのは自分だよ。
127	助教	土日は邪魔が入らないので研究やデスクワークが進む
128	ピーアイ	土日に実験をする必要はないが、平日の時間を有効に使うためには、来た方がいいと思う。
129	学生	夜遅くまでやることを自慢する人がいたのが、ちょっと嫌でした
130	D	飼っている生物によってはしかたないのでは
131	学生ブチョー	私学は土曜も授業や入試、父母会、いろいろあって、休みはほとんどないし、祝日にも授業があります。
132	院生	7/5=1.4 倍働けます

No	ハンドルネーム	コメント
133	院生	リミットが近い中やった夜中の実験はいい思い出でもあります
134	無記名	PIですが、一人ブラックで働いてます。もっと教養に満ちた生活にすべきと考えてます。
135	YUKI.N	PIは大変そうですね本当に。正直将来こうなりたいとは絶対思いません。だからドクター行くのやめました。
136	し	土日働きますが、年に有給を20日取っています。
137	カンチッチボンバー	コアタイムをなくして、曜日や時間帯をみんなバラバラにした方が実験機器が使えてうまく研究が回ると思う。
138	HM2	教授の学校運営の仕事が多すぎます。もう少し研究室のことに力を入れてさせてあげてほしい…
139	M1	先生が大変そうだと話しかけにくい…
140	修士です	PIは出張がめっちゃめっちゃ多い。月に何回も東京に行っててラボにはほとんどいない。
141	まる	会議とか、研究以外の仕事が多そう。いつも忙しそうに思う。それでもディスカッションの時間をしっかり取ってくれて本当に有り難い。
142	すあま	やはりお金
143	ボッチ	スタートしたばかりの研究室なので自分以外のメンバーがおらず、忙しくて大変です。
144	ポスドク	PIには指導だけでなく、ラボメンバーをマネジメントする役目もあると考えていますが、どうでしょう？
145	博士がくせい	土日は私生活を優先して、残った時間を研究に費やす。
146	みそしる	学部学生への講義の準備が大変そう。
147	モーモー	研究費を維持するのにPIが動いてて多忙になる、
148	修士	うちの先生は会議をサボって楽しそうに学生と実験しています。
149	あ	研究費の維持が大変になってしまっているのは国レベルの問題でしょうね
150	まる	モチベーションの低い学生を頑張らせるのは大変だと思う
151	PI	学生一人一人に寄り添うと疲れる
152	あたし	日本の研究費予算って少ないイメージ
153	YUKI.N	ひさびさに実験したPIが「やっぱ実験は楽しいね！！」と満面の笑みで言っていて、研究以外の仕事だらけなんだな…と。
154	氏	勉強もできないし勉強しない馬鹿な学生のお守りをするのは教授の仕事ではないと思う
155	マツコ	3週間の教育実習から戻ってきたら、教授が一回り小さくなっていました。忙しかったんですね。
156	おやじ2	法人化の影響でしょうか。雑用が増え続けています。
157	アルハラ耐性株	研究以外の大学のことで忙しそう。大学教授は研究だけを行えるわけではないが、研究の妨げになるような業務までやっているのはどうなのだろう。
158	院生	先生方、主に何の仕事で忙しいのでしょうか？
159	ナシ	研究以外の、技術員や秘書さんかパーマネントでいてくれたら、雑用は減ると思う。理系院卒（修士卒）ぐらいが事務方に勤めたら、強いのに
160	D2	研究の好き嫌いとは？好きというのは、触れた時間や愛着のような気がします。どんな研究でもやっていたら愛着が出てきませんか？
161	ルクマン	博士課程へ進学する人が少ないのは、同世代に比べて経済的に圧倒的に不利になるから。DC1でも月20万しかもらえないし、学費も払わないといけない。
162	苦学生	PIに昼から深夜まで飲み連れ出され研究が進まない 会議をサボって飲みに行く
163	のん	働き方改革が大事なうけど、それ守ってPIなった人がおそろくない。やりたいから自主的にやった結果でしょう。働き方改革は労働に対し報酬を与えないためで実は雇用者側の都合を反映したものではないか？そもそも労働に対し報酬が出ない研究者にはそもそも報酬が出ていないことが問題じゃないの？

No	ハンドルネーム	コメント
164	院生	指導教員の先生がサイエンスが大好きな人なので、その先生の生徒達の QOL は自分を含め高いように感じます
165	M1	先生が 18 時にお昼ごはん食べてるときある
166	しゅうし	科学的興味に基づいて自由に研究できるのがアカデミアのいいところなのに、研究費のことを考えて自由に研究できなくなってる気がする
167	D1	研究以外のしごとが多すぎそうに見えて、研究続けて目指してるのこれなのか～と思って悩んでしまうときも…
168	ボッチ	PI になっても自分のやりたい研究がなかなかできない。やりたい研究は時間を見つけてほそぼそとやっています。
169	私大教員	研究室配属では、教員は学生を選べないというのは大前提なんでしょうか？
170	D1	学部の際は 16 時に帰れる研究室が人気でした。
171	僕	趣味で研究をしてると、それはそれで危険では？
172	さ	実験は趣味ってスタンスはよさそうですね
173	YUKI.N	簡単卒論書いて卒業できる「楽な」研究室は人気です。間違いありません。
174	カンチッチボンバー	確かに、いろいろやらなければいけない『仕事』があって、学部生の時と比べて、研究と向き合う時間が短くなっている気がします。
175	博士	楽な研究室選ぶ人はこの学会すらこないでしょうね。
176	あ	自腹で学会行ってたなあ
177	しゅうし	「楽で就活しやすい」を基準に研究室を選ぶ人けっこういますよね。その研究室の PI はかわいそう。
178	修士学生 K	ハードワークでもいいから興味のあることを研究したい。学部生のときは部活と両立しやすいところをえらんだけど…
179	某国立大出身	うちの大学でも研究室を楽さで選ぶ人が大半でした
180	PI a	PI でも時々実験に参加すると、ラボのプロジェクトの進行具合や、担当者の力量が見れていいですよ。
181	ぴ	先生がくまモンみたいでかわいい
182	はかせ	興味が学部生の間に変わることは、いいのでは？しかし、研究の指導をしないといけないのは PI の先生方は大変だとも思う。
183	私大教員	学生数が減っているの、ミスマッチが無いようにもっと戦略的に配属決定したほうがいい。
184	YUKI.N	楽な研究室を求めて来た研究室における研究指導ってどうしたら良いのでしょうか。(M1)
185	M1	学部で就職する人たちには楽な研究室が人気だった
186	まる	モチベーションの低い学生って、なんでその学部に来たんだろうと思う。「大学に行くこと」の意義問われているのかな
187	学部生	コスパがよい、という言葉は学部生からよくききますね…
188	おやじ 2	研究は楽しいですが、管理職は特に楽しいわけではないですね。でも誰かがやらないと。。
189	PI	アメリカの学生はどのような基準で研究室選びをするのでしょうか？
190	院生	ラボに入る前のやる教員を上げるより、入った生徒のやる気を保つ方がむずかしそうです
191	ルクマン	月 30 万の援助があったら今の 5 倍は博士学生が増える（と思う）
192	P	先生との呑み会楽しいです！
193	カンチッチボンバー	院生になると『仕事』が増えてしまうことはしかたがないことでしょうか、学費を払っているの、もっと研究に没頭したい！ってゆうのは、わがままなのでしょうか、
194	修士マン	教授が時々ご飯に誘ってくれて、学生には手の届かないような高級店に連れて行ってくれる。
195	ナシ	ある程度とは、学生の都合の良い時かな？

No	ハンドルネーム	コメント
196	YUKI.N	ボスとの信頼関係が無いとディスカッションもできないので。ただ、学生側からはなかなか行きづらいので話しかけやすい雰囲気を作って欲しいです（ワガママ）
197	ポッチ	まともに取り合わない PI に対しては学生やポスドクはコミュニケーションを諦めるのでは？
198	助教	PI に挨拶をしても無視されるので話す機会がない
199	しゅうちゃん	普段からディスカッションしやすい雰囲気を作ることはとても大事だと思います
200	学生ブチョー	「楽」の定義にもよりますね。体力的にきつくとも精神的には「楽」に、のびのびと研究をさせてあげられるようにするのが PI の役割です。
201	とりっぱー	ボスの話を延々聞かされる時間を、ボスはコミュニケーションと思っている可能性がある。。
202	JK	毎日ランチをスタッフ全員で取っているラボは雰囲気が良さそうです。
203	みそしる	研究上の根拠のない想像話とか、論文にはないような pitfall の体験談は日常的なコミュニケーションから得やすいと思う。
204	すあま	普段からこういうコミュニケーションとってるとディスカッションとか相談が本当にしやすくなるので大事ですね
205	M1	先生、博多でフグ食べたいです
206	院生	飲み会の時、誰が先生の隣に座るかで、よく揉めます。ネガティブな方で。
207	か	先生との BBQ たのしい
208	いんせー	週に 1 回は飲みに行っている。お金がない。
209	m1	研究室の飲み会は楽しいが、参加費が財布にきびしい、、
210	ポスドク	本質と外れた所でマウントをとりたがる人ばかりなので、あまり一緒に食事はしたくない。
211	おやじ 2	コミュニケーションは全ての基本だと思います。これができるようになるのが、研究室に所属する大きな意味です。
212	ぼすどく	ボスがおしゃべりなのもあって、ほぼ毎日話しています。それを通して個人の事情を分かってくれるのでありがたいです。
213	学生	業績とって行く人がいます。
214	氏	先生焼肉つれてって
215	研究室学生メンバー	予定合えばバーベキュー行ったり TRPG やったりします
216	修士	実験で良くない結果が出ている時も、友だちとして支えてくれるメンバーの存在はとても大きいです。
217	はかせ	付き合いは、所属ラボが、家庭持ちが多いラボとそうでないラボで、全く違うと思うな。
218	YUKI.N	今日も研究室の同期と同じ部屋借りて学会に来ています。毎年分生の夜は一緒にサイエンスを語って楽しんでいます。
219	M1	多国籍軍だから仲良くなり方が難しい
220	みそしる	30 歳代以下限定の教員 & 院生の飲み会がある。もちろん PI にはナイショ話の内容は捺して知るべし、
221	カンチッチボンバー	実験ができるできないに関わらず、一生懸命にする人に時間を割きたいです。
222	いんせー	飲みをコミュニケーションだと言って週一で言っているが、キャバクラやラウンジにまで付き合いわれてお金がかかるのは嫌だ。
223	ポッチ	自分のラボに学生がいないので、協力関係のあるラボの学生に構ってもらっています。
224	学生	PI は学生をどういう風に思っているのか全くパネラーから伝わらない。本音としては学生は無償労働者と思っていますか？なぜ PI の機嫌を我々学生が取らなきゃいけないんですか？我々は労働者ではなく、学生です。PI の論文作成の手ゴマではありません。後、コメントする人、みんな、良い子すぎでしょ。本音で話そうよ。
225	パワハラ耐性株	やるべき研究を差し置いて雑談しているところにいることは苦しい。
226	ナシ	ボスが、アカハラ・セクハラを恐れて、学生とコミュニケーションを取りにくそう。学生はいつも研究の話だけをしたいわけではないだろう。

No	ハンドルネーム	コメ ン ト
227	まる	お互いのテーマの話を沢山のメンバーとできるので、色々な見方を知れて楽しい
228	院生	飲み会に行った時に先生が1万円を置いて帰って行って、すごく尊敬したのですが、翌日おつりを請求された時は驚きました。
229	かいちょう	私の場合はボスと先輩との麻雀で人生を学んだ。面子が足りない時に博士論文を書いてる先輩が無理矢理雀荘に連れて行かれた上に、ボスが負け始めたら博士論文はどうなった、とプレッシャーをかけていた。人非人の世界だったなー
230	おやじ3	同じ機器、空間を共有する仲間なので、お互いをリスペクトしたいですね。
231	D2	相手の発言は、人格に対する攻撃かサイエンスに対する疑問か切り分けて考えることが大事です
232	M1	228さん うちのPIも、昨日1万置いて帰られそうでしたが、引き留めました笑
233	ほー	いろんな研究室があるんだなあ
234	マツコ	うちの先生は講演の謝礼とかをいつも寄付してくれて、学会の旅費とかにしてくれます。
235	あああ	教授という共通の敵がいるのでメンバーと団結する
236	匿名	若い時は、自分がいいと思った研究室を渡り歩きました。意図せず、キャリア形成に意義あったことに、年とってから驚いてます。
237	ピーアイ2	学部学生が、旧帝大系の大学院に進学してしまい、自分の研究室に学生が残らない。残ったごく少人数の学生がかわいそうで、また、申し訳ない気持ち。
238	?	女性少なめの分野だと、セクハラは日常茶飯事。
239	m1	仲が良ければ、とまではいかなくても、ある程度のコミュニケーションが保証されていた方が透明性があるっていい研究室だと思います
240	ポッチ	前職の時の学生が訪ねてきてくれます。
241	院生	ラボの後輩が家にやってきて、2人で3時間くらいゲームキューブの格闘ゲームで遊んだのはいい思い出です
242	余談	このセッションで投稿されたコメントのログが後で閲覧出来るようにすると復習しやすそう。
243	みそしる	昨日、留学していた同期の院生（同い年）が帰ってきたのでまた飲もうよとLINEが来ました。やっぱり持つものは同期ですね。
244	PI	大学院進学時に研究室や分野を移ることがもっと活性化した方が良いと思う。しかし、最近はむしろ逆行して「囲い込み」をする方向に進んでいるように思い、危惧している。
245	そういえば	学生がテストの採点をするのは良くあることなののでしょうか。生徒の単位まで出してるぞ
246	YUKI.N	PIにはなりませんが、いい先輩になれるように頑張ります。
247	ポッチ	ここのログを後々見返す手段はあるのですか？
248	初参加でした	他ラボのことを知れて、いい機会になった。
249	バワハラ耐性株	こういう匿名で意見できるシステムをラボに導入したらどうなのでしょう。いい方にも悪い方にも転びそうですが。
250	余談	このセッションに来ている方々は改善意欲の高い人だと思うので、このセッションの内容を真に聞かないといけないのは来てない人かも知れない。
251	こみ	コミュニケーションでPIがどんな工夫をしているのかを知りたい
252	あーあ	学生に、旧帝大系の大学院に進学した方が、就職が良さそうだから、と言われた。
253	ナシ	研究室への文句や意見は、面と向かって言って欲しい。匿名じゃ、改善できねーよ
254	余談さんへ	それはそうで、アカハラ横行してたりサイエンスできなかったりするラボは普通にある
255	絶縁	出身研究室のPIから些細なことで絶縁されました。

【大学院の無償化を目指して】

●日 時：2019年12月4日(水) 11:45～13:00

●会 場：福岡国際会議場 2階 203

●参加者：約 240 名

●講 演：安田 涼平（マックスプランク・フロリダ研究所）

今回のランチョンセミナーでは、大学院の無償化（あるいは実質的な無償化）について、日本の現状とアメリカでの例を併せて考えてみました。アメリカの大学院に関して、マックスプランク・フロリダ研究所の安田涼平博士にお話していただいたあとでパネルディスカッションを行いました。また、会場には、文部科学省の相川さんにもお越しいただきました。

学会参加者に行った以前のアンケートで「現在減少傾向にある博士課程進学率は、どうしたら増加すると思うか」との質問に対する答えで最も多かったのは「経済的サポートを充実させる」ということでした。また、会場で行ったケータイゴングによる「大学院の無償化によって、日本人の博士課程進学者が増加すると思いますか?」、「大学院無償化・給付型奨学金制度が適用されたら、迷うことなく博士課程に進みますか（進みましたか）?」との質問に対する答えも7割以上が「はい」との回答でした。分子生物学会の参加者が対象なので、研究意欲のある学生・研究者が母集団であることを差し引いても、これらの結果は、経済的サポートが博士課程への進学に大きく影響するということを示唆しています。その一方で、この母集団の中でも上記の質問に「はい」と答える割合が7割強に留まった（つまり、3割近くが「そう思わない」という回答であった）ことは、大学院

博士課程を修了した後に必ずしも明るい未来が見えないこと、あるいは、現在の研究室が必ずしも自分の興味や研究スタイルとあっていないことが要因であるとも考えられます。パネリストのコメントにもあったように、大学院の無償化（経済的サポート）、大学院の教育内容の充実、その後のキャリアパスの3つを一体で検討・改善していく必要があると思われます。

また、大学院無償化した場合に、大学院生の質も懸念されます。安田先生がアメリカの大学院事情について説明して下さいましたが、優秀な大学院生を集めるために（教育、研究、経済的に）優れた環境を提供しているとのことでした。大学院は実質的に無料であることに加え、給付型奨学金や給与が支払われるのが普通とのことでした。当然、選抜は厳しくなり、日本で定員を埋めるのに必死になっている状況とは異なっているようです。日本においても、実質的な授業料無償化や給付型奨学金・RA制度などにより博士課程の待遇改善が進めば、研究意欲があっても経済的な理由で進学を断念する学生の進学を促すことができると思われます。また、その財源をどうするのかというのは問題についても議論がありましたが、大学の資金活用や研究費の規模が異なるため、アメリカの方式をそのまま日本に導入するのは無理がありそうです。日本の大学も変わる必要はありますが、それ以上に、次世代を担う人材を国として育てるという政策も重要であると思います。

ランチョンセミナー後には、そこでのディスカッションを受けて、キャリアパス委員と安田先生が文部科学省の相川さんと意見交換を行いました。

（文責：座長・木村 宏）

〈アンケート〉 集計結果（四捨五入しています）

【問1】あなたの年齢は？

① 24歳以下	26	21.3%
② 25～29歳	14	11.5%
③ 30～34歳	10	8.2%
④ 35～39歳	6	4.9%
⑤ 40～49歳	28	23.0%
⑥ 50～59歳	28	23.0%
⑦ 60歳以上	10	8.2%
計	122	100.0%

【問2】あなたの身分・職階は？

① 学部学生	9	7.4%
② 大学院生（修士）	21	17.2%
③ 大学院生（博士）	5	4.1%
④ ポスドク	9	7.4%
⑤ 大学教員（助教・講師・准教授）	32	26.2%

⑥ 大学教員（教授）	30	24.6%
⑦ 研究員	2	1.6%
⑧ 主任研究員・チームリーダー・室長以上	5	4.1%
⑨ 企業	4	3.3%
⑩ その他（研究センター長）	1	0.8%
⑩ その他（特命教授）	1	0.8%
⑩ その他（記述なし）	2	1.6%
※ 未記入	1	0.8%
計	122	100.0%

【問3】 このセッションを何で知りましたか？（※複数回答可）

① 学会ホームページ	33	24.1%
② 年会ホームページ	49	35.8%
③ 会報	3	2.2%
④ プログラム集	31	22.6%
⑤ ポスター	4	2.9%
⑥ 会場内の広告	12	8.8%
⑦ フェイスブック	0	0.0%
⑧ クチコミ	2	1.5%
⑨ その他（ランチョンセミナー整理券配布デスク）	1	0.7%
※ 未記入	2	1.5%
計	137	100.0%

【問4】 このセッションを開催した時間帯はどうでしたか？

① ランチョン形式でよかった	116	95.1%
② ランチョン以外の時間帯がよかった（夕方・夜）	2	1.6%
② ランチョン以外の時間帯がよかった（記述なし）	1	0.8%
※ 未記入	3	2.5%
計	122	100.0%

【問5】 前半の講演はいかがでしたか？

① とても面白かった	72	59.0%
② まあまあ面白かった	39	32.0%
③ 普通	7	5.7%
④ あまり面白くなかった	0	0.0%
⑤ つまらなかった	0	0.0%
※ 未記入	4	3.3%
計	122	100.0%

【問6】 後半のディスカッションはいかがでしたか？

① とても面白かった	48	39.3%
② まあまあ面白かった	40	32.8%
③ 普通	14	11.5%
④ あまり面白くなかった	2	1.6%
⑤ つまらなかった	0	0.0%
※ 未記入	18	14.8%
計	122	100.0%

【問7】 今後このような試みを続けるべきだと思いますか？

① 是非続けるべき	101	82.8%
② 続けるべきだが方法を変えた方がよい	14	11.5%
③ やめた方がよい	0	0.0%
④ わからない	1	0.8%
※ 未記入	6	4.9%
計	122	100.0%

【問8】 このセッションに関する感想をお聞かせください。

- ・海外の状況を知ることができて、良かった。日本も修士学生に優しくなってほしい
- ・アメリカなど、他国ではかなり充実していることを知ってびっくりした。
- ・アメリカの状況について理解出来た。やはり国内で無償化は難しいと思う。
- ・米国の話はよくわかった。そのうえで、日本は？どうするのか。
- ・彼我の違いの認識は大切。次は財源の問題。
- ・日本では米国のような博士の企業就職や、企業からのPI転身が、シームレスになってないことから、大学院無償化にしてもしょうがない。
- ・科学に対する考え方が日本人は欧米人と異なる点がありそれも関与しているかもしれない。大変考えさせられるテーマでした。学部生の学費の問題もある。これは米国でも問題になっているのではないかと→米国のやり方をそのまま導入するのは全うではないのではないかと。国立大学はそれ以外に文科省にdependしない研究費運営費の獲得という問題もある。(企業との提携、企業との寄附金連携)
- ・日本と米国では大学院入学時の研究力がちがうことにもっと焦点をあててもよいと思いました。米国の大学院志願者のトレーニングシステムに興味があります(現状では日本の修士1年は教育している感がつよく、米国と同じレベルの給与は難しいと思います。一方、欧米のボスドクの一部は実験しなくて困ることも聞きます。出口が実は甘いのでしょうか…)
- ・留学中にも感じていたが、米国と日本の温度差を再確認した。研究者育成に関して、次世代に継続できるように真剣に考える必要があると思った。
- ・日本が全体的に科学を重視していないのではないかと疑問に思った。良い学生を良い環境で育てて、その学生を活かせる社会に出来るとより良い。
- ・前半の話について、MDの話も欲しかった。
- ・後半のトークがおもしろかったが、なかなか結論は難しい。
- ・昨日より雰囲気重い感じだったが、それだけ切実な問題だと思う。知らない事も多かったので、考えさせられました。
- ・様々な立場からの考えや、大学による制度の違いが大きいことがよくわかった。
- ・議論の価値があるいい内容だと思いました。
- ・引き続き考えていきたい。
- ・真剣に考えるべき問題だと再認識させられた。
- ・同じような問題意識を皆で共有できてよかった。
- ・無償化は必要だとあらためて思いました。うちの大学でも授業料の引き下げは常に議論しています。
- ・学費無償化は重要。まずは実施して、問題点を明確化して問題を1つ1つ解決して、前進してほしい
- ・セッションだけでなく、具体的に行動に移してほしい。
- ・このようなセッションを毎年実施しても問題は解決しない。早くアクションをおこなえば日本の学術は崩壊するだろう。優秀な人材は確実に海外の大学院に流れるだろう。
- ・どうしても財源、国といった大きな組織を動かす必要がある議題なので、研究者が団結して訴えて行く、具体的に行動していく必要がある気がします。
- ・大半の議論は、どこかで聞いた内容だった。大学院教育の受益者は国というコメントは、学会として国に訴えていく上で重要な観点だと思った。
- ・キャリアパス委員の皆様にはぜひ国への働きかけを頑張っていただきたいです。
- ・アンケート結果などは(本日のモバイル)文科への提言などにまとめ、貴重な資料としてお使い頂ければと思います。基金について日本ではどのようなシステムを構築出来るかなど考える必要性を感じました。
- ・「提言」としてまとめられて、関係省庁に提出して、財政的な措置へつなげていくことが重要と思う。もちろんそのためのコンセンサスづくりが必要
- ・国の制度の違いを聞いたのは興味深かった。本気で制度を変えようとする意気込みは感じられなかった。
- ・今後もこのような試みを是非続けるべき。無償化が実現したら続けなくてもいいのかもしれない。大学院生教育、キャリアパスについては引き続きやってほしい。
- ・文科省、財務省の役人、政治家にパネラーになってもらい意見を聞きたい。
- ・文科省の方も交えたパネルディスカッションも今後ききたい
- ・国の根幹である科学の人材を育成する事は大変重要。国の担当者、政治家にも答申を出す。セミナー参加を促す。
- ・登壇者が偏っていると感じました。今日のテーマであれば、文科省の方や大学院生も入れるべきだと思います。
- ・全体として面白かったが、無償化には問題もある。反対派の先生もパネリストに入れてほしい
- ・企業側のパネリストもいた方がよい。
- ・会場にいる学生の生の声を、もっと聴きながら進めた方が、より効果的だと思う。
- ・会場の意見をもっと取り上げるようにした方がよい。
- ・学生側も登壇すべき。目的をはっきりすべき(意思確認なのか、方法の検討なのか)。
- ・大学院に進学に決めた時は迷いはなかったが、卒業近くになって自分の進路の不透明さに不安になったのが思いだした。
- ・私も、院生になりたいと思ってはいたけれど、その時の生活費とかどうしようとか、学振をとれなかったらどうしようと思っていたので、このセッションをきいて、いつか無償になるといいなと思いました。
- ・大学教員の給料がもっと上がるか、博士の間だけでも給料が出れば(学振以上)、博士課程進学も考えました。
- ・博士卒業後のネガティブなイメージをなくす努力も必要だと思う。日本では逆に就職しにくくなる。アカデミックなポジショ

- ンが少ない。コネありきの世界。自分も博士卒業後の方が難易度が高そうで修士卒で就職しました。
- ・大学院生のサポートは重要。ただ大学院に行かなくなっている理由はキャリアパスの問題の方が大きいのではないかな。
- ・大学院生の質を向上するために、無償化を考える。そのための人材確保のために無償化する。
- ・大学院無償化と生活費補助（給料）は違うのでは？給料方式にするべき。授業料無償化は学会参加などに反映されない。これは成績などにひもづけてもいいと思う。
- ・博士前期課程（M2 年間）と後期（D3 年間）は分けて議論しないとイケないのでは？ M2 年で何もしないで出ていく学生が一定数いて、それらも無償化するのは問題。
- ・大学院の入試を難しくすればモラトリアムな大学院生を減らせると思いました。大学院生も授業料を無償化すれば、より学生が意識をもって研究に取り組めると思いました。さらに給料ももらえれば良いと思います。（学生の研究への自覚を高めるため）
- ・博士号取得者の処遇をあげることが重要。そもそも文科省の役人は Dr 号をもつべき。
- ・PD に未来がないことが大きな問題。ポスドク支援も併せて必要。
- ・国公立教員はやはりあぐらをかいている印象があります。しかも文科省任せな意見もいかがかと。学部学費を上げて院に回す。教員数を減らす、給料減俸くらいの自助努力が必要だろう。
- ・企業は多くの博士を採用してますよ。条件も良い。「企業がとってくれない」という前提で話をしているのが納得できなかった。
- ・ぐちからの脱却を
- ・想定範囲内で少しものたりなさを感じた
- ・昔からいわれていたことです。何も変化していないことが気がかりです。
- ・大学院教育に対する（自身の）スタンドを変える必要があると感じた。
- ・応用研究に傾いたとしてもベンチャー企業等の設立等の大学自体が収入を得る仕組みを進めていくべきだと思う。そこから基礎の重要性も議論されるのでは。
- ・学生や教員などの様々な意見を見れるシステムが良かったと思う。
- ・生の声を聞けるのはとてもよい
- ・会場からコメントが出せるのが非常に良かった。
- ・リアルタイムのコメントが出来るのは良かった。
- ・ネット掲示板みたいでよかった。
- ・オンラインでコメントしました。予想よりおもしろかったです。
- ・おもしろい取り組みです。
- ・面白かったです。
- ・大変良かった。
- ・リアルタイムで意見が出てきて、おもしろい。
- ・アクセス URL を常に掲示するべきだと思います（すぐに見えなくなって書き込めません）。（コメントのリアルタイム表示はとてもよいと思ったので）
- ・コメントに「いいね」する機能が欲しいです。
- ・サイエンスの世界で重要な問題であると思うので、次回もこのような会をもうけるべきだと思います。

【問9】 来年以降のセッションで取り上げて欲しいテーマがあれば教えてください。

- ・引き続き、同じテーマで
- ・新しい話題もあると思いますが継続的にやってもよいテーマかと思っています。
- ・継続して最低3 年間は行うのが良い。
- ・今回の結果に対する文科省の返答
- ・無償化に向けたアクションプランを示す。
- ・大学院無償化した場合の大学院入学前の学生トレーニング方法
- ・パネリスト、座長が言われるように、大学院の無償化をしてどうするか。という vision が必要と思われました。
- ・「日本の大学院生の評価システム」これ、あって無いのも同然。所属研究室の教授の顔色を見て評価しているだけだと思う。
- ・大学院の定員など
- ・博士進学、理由は何ですか
- ・大学院生の就職口について
- ・院卒業後のありかた。企業だと、新卒一括採用をやめ通年採用にするなど。
- ・企業の担当者がドクターに対する考え・意識
- ・博士取得者の就職について。企業の人事担当者にも参加してもらって
- ・博士課程進学後のキャリアの安定について
- ・Ph.D の就職をどうするか。
- ・キャリアパス（学位取得後の進路）
- ・博士に進学したら、結婚タイミングはいつですか
- ・研究者とライフプラン（結婚、出産、子育て等）を考える場をもって欲しい。
- ・男性のワークライフバランス。なぜ男はワーク 100% 許されるというかほめられるのか
- ・女性のキャリアパス（ポスドク～PI の女性比率を上げるには）
- ・夫婦、家族をもつ中での研究者生活
- ・少子化と大学教員ポストの確保
- ・大学でのポスドクポスト・給与について
- ・アカデミックのポスト数
- ・日本における博士の地位向上
- ・大学院の質の向上
- ・大学院（博士）の教育システムについて
- ・大学院の教育プログラム
- ・研究以外の分野のプロの方々も交えて議論すると良いと思います。（スポーツ、音楽などなど）
- ・生命科学の世界での議論ではなく、工・農・薬・医、あるいは文系も含めた意見なり現実をまとめる
- ・科学（生物学）を正しく（一般に）発信していくには

- ・科研費の充足率が非常に低いことについて。
- ・大学関連予算、研究予算
- ・海外への道　・アカデミア

【問 10】 本年会での属性調査（添付資料）をご覧になった感想をお聞かせください。

- ・オーガナイザーの女性比率を上げるべき。
- ・オーガナイザーの女性比率も同じになるといいなと思いました。
- ・以前に GRC で参加者の男女比が 6:4 であることは問題で 5:5 にするように対応すべきとの議論がなされたことを思い出しました。約 30 年前です。わが国では依然として苦戦していると感じました。抜本的な対策を待望しています。
- ・会員の男女比が偏るのはしかたないが、WS スピーカーなどの男女比は会員の男女比にかかわらず 1:1 になることを目指すべきでは？
- ・女性比率が低いのは非常に問題だと思います
- ・定着するまで工夫がいると思う。WS に女性オーガナイザーのわくを作る。声かけ
- ・もっと女性のクラスメイト、同僚がほしいです。
- ・上位職に女性が少ないことを反映していると思う。キャリアが中断した人に対する支援が必要。
- ・性差がこのまま無くなることを願う。
- ・予想どおりなので…この改善を急ぐ
- ・10 年前、20 年前との比較を見てみたい。5 年後の想定とか。
- ・シニアが多い。
- ・研究したい人は男女関係なくできるようになってきているのだなと思いました。
- ・女性研究者の支援は確かに大切であるが、ただ女性とあるだけでは意味がないと思う。
- ・妥当なアンケート結果だと思います。国に頼る時代は終わった気がしました。
- ・女性スピーカーは年々増えている印象があるがどうなのか
- ・勉強になった。
- ・good
- ・コンパクトで見やすいくいと思う。

【問 11】 その他、ご自由にどうぞ。

- ・時間は 1 時間で十分だと思いました。
- ・もう少し時間が長くても良いと思った。
- ・英語訳もあればいいかな。
- ・ランチのお弁当は汁なしのほうがいいと思います。今日のお弁当はこぼれてしまいましたら大変です。
- ・ありがとうございました
- ・有意義でした。
- ・昨日の研究室を選べセミナーもとてもおもしろかった。このようなセミナーを毎年続けてもらいたい
- ・毎回、キャリアパス委員の方々ありがとうございます。
- ・胡桃坂先生の復活を願う。

〈ケータイアナライズシステム〉

〈アンケート〉 集計結果（四捨五入しています）

練習設問：皆さんの属性について教えてください。

・学部学生	7	5.4%
・大学院生（修士）	32	24.8%
・大学院生（博士）	11	8.5%
・ポスドク、助教、講師、准教授、研究員等の非 PI 職	22	17.1%
・独立助教・講師・准教授、主任研究員等の junior PI 職 （非テニュア・テニュアトラック）	7	5.4%
・教授等の PI 職（テニュア）	36	27.9%
・企業	1	0.8%
※未入力	13	10.1%
計	129	100.0%

設問 1：あなたの（所属する機関・学部の）大学院では学費免除の（または学費分を補填するような）制度はありますか？

・ある：100% 免除が全員にある	6	5.3%
・ある：部分免除が全員にある	9	7.9%
・ある：100% 免除が一部学生にある	39	34.2%
・ある：部分免除が一部学生にある	38	33.3%
・ない	10	8.8%

・ 知らない	12	10.5%
計	114	100.0%

設問 2：大学院の無償化によって、日本人の博士課程進学者が増加すると思いますか？

・ はい	81	71.1%
・ いいえ	16	14.0%
・ どちらとも言えない	17	14.9%
計	114	100.0%

設問 3：大学院無償化・給付型奨学金制度が適用されたら、迷うことなく博士課程に進みますか（進みましたか）？

・ はい	72	64.3%
・ いいえ	11	9.8%
・ 変わらない	25	22.3%
・ その他	4	3.6%
計	112	100.0%

設問 4：大学院の無償化により、大学院生の質はどうかと思いますか？

・ 上がる	37	33.3%
・ 下がる	12	10.8%
・ 上下の幅ができる	55	49.5%
・ その他	7	6.3%
計	111	100.0%

設問 5：大学院の無償化はメリットが大きいですと思いますが、あえてあげるなら無償化することのデメリットは？

・ ない	18	16.2%
・ 大学の運営費が減る	17	15.3%
・ やる気の無い学生が増える	29	26.1%
・ こしかけの学生（簡単に辞める学生）が増える	38	34.2%
・ その他	9	8.1%
計	111	100.0%

設問 6：無償化が進学者全員ではない場合、対象者を選考する際の条件として何が最も重要と考えられますか？

・ 世帯の収入（家計の条件）	29	26.6%
・ 学業成績	24	22.0%
・ 申請書の評価	50	45.9%
・ その他	6	5.5%
計	109	100.0%

設問 7：大学院の無償化により、大学院生の責任（進捗状況・研究成果の報告義務等）が課せられることは？

・ 良い	97	88.2%
・ 悪い	8	7.3%
・ どちらでもない	4	3.6%
・ その他	1	0.9%
計	110	100.0%

設問 8：大学院無償化は海外からの留学生にも拡大するべきだと思いますか？

・ 拡大するべき（日本の大学院の国際競争力を高めるから）	48	43.6%
・ 拡大するべき（公平にするなどその他の理由から）	16	14.5%

・一定の基準を設けるべき	38	34.5%
・すべきでない（日本国民の税金でまかなうものだから）	6	5.5%
・すべきでない（その他の理由から）	2	1.8%
計	110	100.0%

設問 9：大学院無償化を日本ではどのように進めるべきだと思いますか？

・国策として一律全員を対象にすすめる	39	35.8%
・国策として一部（優秀者、低所得世帯など）を対象にすすめる	45	41.3%
・大学院ごと、研究室ごとに教員が努力する	4	3.7%
・学振 DC など拡大したうえで、大学院生が個別に努力する	19	17.4%
・その他	2	1.8%
計	109	100.0%

設問 10：大学院無償化の制度を定着させるために、最も努力が必要な人・団体は？

・大学教員	12	11.0%
・大学院生・大学生	11	10.1%
・企業	10	9.2%
・文部科学省	67	61.5%
・その他	9	8.3%
計	109	100.0%

コメント一覧

No	ハンドルネーム	コメ ン ト
1	tag	企業が博士号取得者を、もっと採用すべき
2	大学院無償化は諸刃の剣	[pros] やる気ある学生が心理的経済的負担を減らせる。 [cons] 就職できなかった学生が人生の選択先送りに利用する危険性（先送りすると、ますます状況が悪くなることが多いのだが） 無条件無償化を避け、動機と意義を訴える申請書類が不可欠なのは。
3	某大学教員	大学院進学の詳細なメリットを示す必要があると思います。
4	こけこっこ	ドクターを増えない背景には教育費、科研費の削減だけでなく卒業後のポストの無さや結婚が遅れるなど様々だと思います。まずは教育費の無料化とポストを充実させるために政府に積極的に言うことがいいと思います。修士でも十分生活できるのにリスクをかかえて進学する人はなかなかいないです。それならば優秀であっても修士で卒業する人が多く出てくると思います。ドクターが増えるといいなと思います。
5	氏	奨学金でなくても、研究に準ずるアルバイトなどをさせて学費や生活費を賄えるようにするべき
6	かいちょう	OISTでの大学院は無償かつ給料が出て寮まであるのに日本の若者は行かずに海外からの若者が行っている現実がある。これは、授業料が無料かどうかの問題以前に今の日本の若者に研究者を目指す憧れがないのが問題であることを示唆している。われわれの頃は修士で結婚して授業免除を受けるとともに塾の講師をしながら研究者を目指す輩が多かった。博士の学位を取得しても職はなく、研修料を払ってオーバードクターをする先輩達がほとんどだった（そんな生活してでも研究者になることに憧れていた）。
7	修士2年	私自身、博士に行くのを学費を理由に断念した部分もあるので、仕組みが変わってくると良いなと思います。
8	あるPI	グラントシステムと研究に対する国の意識が違いすぎます。
9	Kiyopy	税金、寄付金を投入するための広報活動が必要
10	ルクマン	そもそも、なぜ日本が大学院生に十分な援助をしないのか、理由を知りたいです。
11	名無し	基礎研究の積み重ねで生活が成り立っている事実を発信、広報して国の政策に反映できるようにする。
12	PI	学生への経済サポートは絶対に必要です。ですが、厳しい selection が極めて重要です。

No	ハンドルネーム	コメント
13	[素]	企業が博士をもっととるべきという意見もあるが、多くの企業は博士に給料分以上の働きをさせるノウハウがないのだろう。博士の活用方法とセットで売り込めると良い。バイオ系でうまくいっているベンチャーも少しずつ出てきているので、博士自身が研究や知識技術と「スタートアップ」などの制度を活用して積極的にベンチャー起業する道も選択肢にすると良い。
14	cam	企業からの支援も必要
15	名無し	企業との共同研究で、院生を奴隷のように使おうとする動きを見たことがある。そもそも学生を大事に扱うような意識を、PIだけではなく助教レベルでも持たなければならない。学生は無給奴隷ではない。
16	しゅうし	アカデミア周りの人は無償化が必要と思ってる人が多いと思う。国レベルで支援できないのは、その他、大多数の国民の理解が得られていないからなのでは。
17	YUKI.N	学費免除については国立がそれなりに頑張ってますよね。学費は国立とは思えないくらい高いですが。
18	無償化しましょう	私は学費全額免除システムに恵まれていて、研究に専念できます。研究は世界に進歩させる需要な力です。大学から卒業した後、進学という選択肢は迷わなく、進路として選べば、世界はより良い将来へ進みます。
19	NT	奨学金を設けて、人を増やしたとしてもその増えた人員を教育するだけの力（研究資金、教育ノウハウなど）がないと思う。プラスで、大学院入学のセレクションをきつくして、入学した人をしっかり育てる環境作りが必要。
20	キャリアパス委員会 サポーターの若手	博士課程を無償化することは、大学が責任をもって博士号の質をきちんと高めることとセットで行われる必要がある（博士号の価値を下げてしまうような学生を輩出しないように大学としても責任を負う必要がある）。そして、大学院を途中で辞めることを社会が受け入れる、また博士号取得者の活躍の場を広げるためにも、社会全体の流動性を高めることが必要。これには終身雇用なども含めた社会全体の仕組みを変えていく議論が必要だが、若者から見ると、既得権益層・高齢者が基盤にある日本社会を変えていくことは簡単ではないように感じる。
21	国立大	国立大は大体そうだが、学振もらったら独立家計になって学費免除になるのが意味がわからない。もらっていない人は学費払うのに。どっちを免除にすべきなのか。
22	PI60 歳目前	日本の今日の大学や科学は、子弟のために高額授業料を納め、子弟の生活費を払って子弟を大学そして大学院に通わせている父母の支持とその経済的負担に支えられています。その父母の負担を軽減するべく営々と積み上げられきた制度の（日本学術振興会の特別研究員事業など）の一層の拡充が、施策の筆頭に来るべきです。採択件数を増加させるために、この制度への割り当て予算総額を増やすことです。しかし財務省の壁を越えるには、現在のJSPSや文科省のレベルではできないことです。ノーベル賞受賞者の先生方に文部科学省の大臣になって頂き、ご尽力して頂くしかないのでは。
23	Kiyopy	企業にとっても魅力的な博士課程修了者を大学院が送り出せていない点を教員は反省すべき
24	博士	学振は決して好待遇ではないが、それが学生の待遇の上限になっているような現状はいかがなものか。福利厚生家賃補助なしで実質16万円は生活保護未満。
25	あ	博士進学も視野に入れているが、学部から現在の修士までで奨学金を借りていて返済が不安になる。経済面での支援も必要では無いか。
26	YUKI.N	博士になって頑張って研究してPIになってアレ（今の指導教員のブラック労働）かと思うとちょっと…
27	修士	日本と海外における研究室の環境（勉強に専念出来るかどうか）や博士号取得の基準に大きな差があるなと感じました。そもそも日本の博士号に海外と同等の価値はあると見られているのでしょうか？
28	あるPI	学部1、2年生にアンケートすると、三分の一ぐらいは将来研究者になりたいと答える。彼らの夢をもっと実現できるようにしたいものです。
29	PI	大学院生を数を単純に増やす事を目的とするのではなく、優秀な（研究にむいた）学生を増やす事がたいせつです。全体的な数は、減っても良いのでは。
30	NT	ネガドクはいらない。
31	氏	高校生や学部1、2年生にきくと研究者になりたいと言う人は多いが、現実を理解していないだけでなく、そう言う人に限ってバイトに勤しんでいたり勉強に真剣に取り組んでいない。私の大学の特徴がもしれないが…
32	YUKI.N	学生が月に4.3万円稼ぐって大変なんです。
33	プロフ56	博士課程に進んでしまうともう後戻りができないという意識が強くなるので、経済的問題を解決したとしても、逆にその感覚が強くなるのでは？学位取得後の道筋を十分に選択できるしくみが先決。
34	ポスドク	無償化で進学希望者が増えて、セレクションしないといけない状況になれば質は上がると思います。単純に大学院生が増えるだけだとダメでしょうね。

No	ハンドルネーム	コ メ ン ト
35	学生	無償化と同時に定期的な研究に関する審査とアドバイスなどの機会をつくり、気を抜かないようにしながら応援する。今自分はバイトの時間が障害になっている。
36	日本頼むよ	国レベルでやるには、一般の方に理解してもらえるように、必要性を発信していくことも大切だろう
37	企業さん	奨学金という名の学生ローンを借りなくて済み、学費が無償になれば、第一のハードルが低くなるのではと思います。まずはこれが重要です。借金がないのはその後の人生にとっても重要です。第二のハードルは博士取得後の進路がせまい点です。残念ながら、多くの日本の企業は博士を必要としていません。バイオ系ですと大手製薬企業を除いて、必要としていないのが現状です。大手製薬への就職はアカデミアで生き残るのと同じくらい大変でしょう。ベンチャーなら多少ハードルは低いですが、ベンチャーは会社の生き残り自体が大変です。基本的に、日本ではアカデミアにしろ企業にしろ、優秀な人材を安く雇いたいという本音があります。無償化になれば嬉しく思います、ならないんじゃないかな、と思います。
38	わかく PI	リーディング大学院プログラムなどで、給付型奨学金が出ていたときには、国内外から優秀な人材がリクルートできていた。プログラム自体はまだ続いているが、お金がなくなり、受験生は激減し、学生のレベルも著しく下がった。卓越大学院制度も一時的で、かつ競争的資金であるので、もう少し安定したサポート制度が求められる。
39	博士	学振は決して好待遇ではないが、それが学生の待遇の上限になっているような現状はいかがなものか。福利厚生家賃補助なしで実質 16 万円は生活保護未満。
40	ある PI	大学院課程の入り口だけでなく、途中でもバリアは必要
41	non	大学が国からお金をもらおうと頑張るのではなく、自分達でお金を稼ごうとする起業家精神も大切なポイントの1つであるように思います。
42	あ	無償化すると、モラトリアムを獲得する目的で進学する人も増えるのでは。
43	Kiyopy	税金を透過させるには、学生が投票に行くこと。投票先となりうる政治グループを送り出すこと。
44	ルクマン	博士課程に進学して、しっかり研究できる優秀層の人は、企業に就職した方が経済的に裕福になる可能性が高いのでリスクをとらず、就職してしまう
45	[素]	進学希望者が少ないことについて。トップクラスの研究者の年収が、スポーツ選手はおろか、商社やNHK職員と同等以下の給料というのはやるせない。その程度の社会的評価ということなのか、名誉にお金は要らないということなのか。
46	PI60 歳目前	成果報告は最低限の労力で済むように。日本では何でもかんでも「報告書！報告書！」で、関係者全員が消耗するだけで不毛。誰も読まない報告書など不毛。
47	私大教員	文科省はきっと金が無いので、国公立は今ままで行きましょう。私大がまずは独自に無償化始めましょう。私大が研究を引っ張る時代です。
48	国が…	増税しても公約と違うことにお金を使うからもうどうすればいいのやら…選挙で勝つしかないんですかね…
49	YUKI.N	世帯の年収も考慮すべきかとは思いますが、世帯の年収が低くて学費免除になったのに全然研究しない人を見ると、私の方が頑張ってるのにな…となります。何故か昼飯も私よりいいもの食べてるし(僻み)
50	名大生	名大では企業との共同研究で学生に企業から給料を払わせる制度を開始しつつある。学振や RA 以外の alternative な選択肢を作ることも大切。特に企業との共同研究の場合は、特許が絡むことが多く学生が無給の上に被害者になるケースが多すぎる。全ての大学でこれを始めるべき。
51	。	身の丈にあった教育しかできない状況どうにかしたい。もっと伸びたいです。
52	Kiyopy	学生を無償の労働力だと思っている生物系ラボが多数ある中で、「世界の中でレベルが高い」という自己評価は、学生から見ると違うのでは。
53	ns	お金を出す人に登壇して欲しい。タイムリーな文科省のコメントを聞きたい
54	NT	財源が国からの補助金のみでは、大学が国からの補助金をもらうために、大学が政府の顔色を伺うような教育プログラムを作る恐れがあるのではないかな。多角的な財源の確保が必要だと思う。
55	ぴーあい	授業料の無償化、プラスアルファのサポート、どちらも最低限のセレクションをパスしたら全員が対象にならないと思ったより進学率増えないと危惧する。サクセスレートが今の学振より高く半分くらいとかだとしても、優秀な学生ほど落ちたときのリスクを考えて二の足を踏むだろう。(博士を考えてた修士学生に学振取ろうよ、と話したときの反応がそうで、進学辞めたことがある)
56	学生ブチョー	奨学金採用に対する審査や面接をしている私大の教員です。学部生にしてすでに1千万円の借金をしている学生もおります。採用して奨学金を貸すのは正直簡単ですが、その後の返済が可能か不安になり、自己破産とならないようにあえて不採択にすることもあります。無償化が理想ですが、せめて無利子の奨学金をもっと潤沢にしたいし、免除制度を復活させて欲しいと思います。

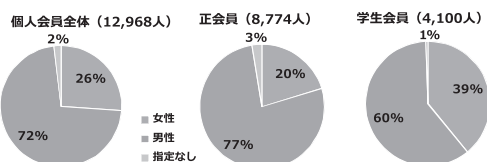
No	ハンドルネーム	コ メ ン ト
57	M2	どの大学でも学部、修士の時点で飛び級が設けられて欲しい。その結果、無償化への負担額も減り、学力向上も望める。また、博士への進学、企業の採用率の向上も見込めるのではないかと。
58	PI	大学院無償化は定員減とカップルさせて資格認定を厳密にする事で質の向上を図る。支出の総額がさほど変わらないようにすること。無給の労働力を期待する研究室にはそぐわないだろう。海外の学生にも門戸を開いて競争率を上げることで質の向上を図るべき。
59	助教	博士まで奨学金を借り続けると1000万円を超える人もいる。学費だけでなく、生活費を援助すること、現在返済している人にも免除制度を拡大するべき。
60	PI	ムーンショットの予算を全額学振DCに回せば3年間くらいは申請者100%採択できるはず。
61	共同研究	企業がスポンサーになりやすい分野なりにくい分野があると思うので、企業頼りになると研究分野間で格差が出そう。
62	PI	議論を聞いていても、現実問題としてどうやって具体的に無償化の原資を確保するのか、見通しが見えない。
63	YUKI.N	教員の仕事をこれ以上増やしたら、学生の面倒一切見れなくなりますよ。
64	助教	アメリカの学会のように学会の前後で組織的に政治家や財務省、文科省などに陳情にいったらどうか。
65	名無し	オリンピックをやってなければ10年くらい日本全国の大学院無償化できてたのでは？
66	PI	博士（後期）課程の無償化は、人材育成のために効率的。優秀な学生の取りこぼしを少しでも減らすために有効（自身の納得、親の説得）。フェローシップや給与の議論とは分けて、まっさきに実現すべき。メッセージ性も高い。今の博士進学率では学費収入も微々たるものでは。様々な改革を、まずは博士（後期）課程の無償化から始める。
67	オラ	日本の企業は博士号取得者を使えるレベルの事業を扱っているところは多くない。外資系などに目を向ければ、活発に採用してるところも。国は企業を甘やかすのをやめて、真に競争力のある企業を育てる努力をして欲しい。
68	[素]	某地方団体が大金をかき集めている「ふるさと納税」のような仕組みで「アカデミック納税」ができないか？ 寄付者への還元は何にしたら魅力的か、博士を目指す頭脳を絞ってみよう。
69	か	学生が頑張るの、留学をするくらいしかなさそう
70	PI	阿形先生を国会に送り込む
71	ルクマン	オリンピックはオリンピックで重要でしょう。
72	端溪	国際競争力を高める上で、無償化は大切だと思うが、現実的に財源をどうするか、大学の研究費を減らすのかという覚悟が問われる。寄付も最先端の研究に寄付したいという人を集めるのにも苦労しているところなので、大学院無償化への理解を得られるのか疑問。本来は高校無償化よりも意義があるかもしれないが。
73	PhD	日本のPhDの価値はなぜ低いのか
74	YUKI.N	法人税をアカデミック納税で代用できるようにして、協力してくれた企業は大学と研究提携できるようにするとか？
75	た	博士号取得という観点で言えば社会人ドクターなんかを支援する企業とかはあるので、自分はこの現状のなかそのまま博士進もうとは思いませんでした。
76	正攻法はもう無理？	その財務省の壁を越えるには、有効打があるのか？ 国の財源をあてにできないのなら、Googleに教員と学生のデータ取り放題にさせてGoogleに授業料と生活費を全額出させる？
77	PI	文科省 財務省に頑張れと言っても無理だろう。納税者、議員を納得させる論理構築を組み立てないと実現は難しい。例 このままの趨勢では10年後には高度な技術者が国内に不足する。（外国人ばかりになる？ しかし中国にもっていかれる？）国内の研究基盤が脆弱化する。
78	ルクマン	医学部みたいに学部6年かけて研究者を育てて、医者と同じ給料にしたら増えそう
79	博士課程	この会議場にいる人々にとっては無償化の必要性は当然のことだが、外にいる人々は必ずしもそうは思っていない。誰がどうやって彼らを説得すべきなのか？ここに並んでいるコメントのような言葉遣いでは、決して利害の異なる人々の心に響かないであろう。当事者の私も含め、恥ずべきである。
80	企業さん	日本の企業が、今後博士号取得者に高い給料を出すようになるとは思えません（給料上がれば嬉しいですが）
81	Kiyopy	社会人ドクターを支援するが、博士課程の人材の採用は消極的、という企業がある理由をよく考えて。

No	ハンドルネーム	コメ ン ト
82	[素]	昔は「足裏についた飯粒」(取らないと気持ち悪いが取っても食えない) といいながら博士を目指す人がいたのに、今、支援が充実しても多くならないのはなぜ? ここに集まる皆さんは有望と思うけれど、どんな夢があれば困難に勝てますか?
83	hoge	財源確保のためには、教育・研究に用途を限定した国債を発行できるようにするのが、ベターでしょうか。財政健全化の幻想が敵ですね。
84	大学院の価値	やはり日本の社会全体で PhD の価値が低いと思います。そこも含めて変えていくには 50 年くらいかかると思います。大学に魅力がなければ学生も大学院に残ってくれないと思います。科研費の使用制限をゆるくし大学院生のサポートをできるようにすべき。
85	PI	大学院は夢を叶える所。夢を叶えるためには学費完全無償化にしないと来ない者は進学してもすぐリタイアしてしまうと思います。大事なのは、学生が進学したら教員は生活費も含めて考えてあげて、大学院生も夢を叶えるためにリスクを感じて奨学金取れるよう努力すべき
86	修士学生 K	アメリカでは博士号とった人は、企業で高給取りになれるそうだが、アカデミアではどうなの?
87	YUKI.N	小中高については、教育基本法にも書いてある通り「人格の完成」が目的ですからね。
88	Kiyopy	ジャーナル論文が出たら博士号与える、みたいなことをやっていたら、採用も給料も期待できないのは当然
89	タックル太郎	良い学生を良い環境で育てて、その学生は日本で活躍できる場があるのでしょうか? 活躍の場が必要に思います。
90	助教	一部の国立大学の学費値上げは、明らかにおかしいので、それぞれの大学で値上げさせないことも必要。
91	ある PI	資源のない日本で頑張らなければならないのは、人材育成ではないでしょうか?
92	かいちょう	小林さんの言うように、博士研究者に国が投資することの実績作りが先ずはポイント。そのためには大学の教員達が博士や修士の院生を鍛える時間を確保できるようにすることが不可欠。
93	正攻法はもう無理?	科研費と同様に、防衛省の研究費を使えらしたら、防衛省の研究費への応募をタブー視するのをやめたらどうか。

疑問：シンポジウム・ワークショップなどのオーガナイザー・口頭発表者における女性比率は、学会員全体における女性比率と比べて低いのではないのでしょうか？

大学や研究機関での男女共同参画を推進するために、学術研究発表の場である学会の大切な役割の一つは、優れた研究に対して、性差などに関係なくより積極的に発表し、評価される機会を創出することである。上記の疑問をもとに、日本分子生物学会キャリアパス委員会は、年会発表者が属する性（属性）について、2009年度（男女共同参画委員会／当時）から継続調査を行っている。

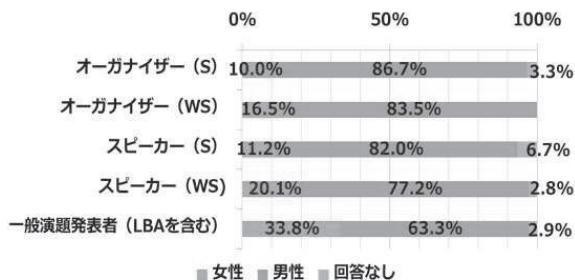
日本分子生物学会会員の男女比率（2019年9月30日現在）



発表者が決まるプロセスの違い

- シンポジウム (S)
オーガナイザー：年会側が検討・依頼（他薦）
スピーカー：オーガナイザーが検討・依頼（他薦）
- ワークショップ (WS)
オーガナイザー：応募者（自薦）の中から選抜される
スピーカー：オーガナイザーが検討・依頼（他薦）
- 一般演題発表者
自発的な申し込み（自薦）

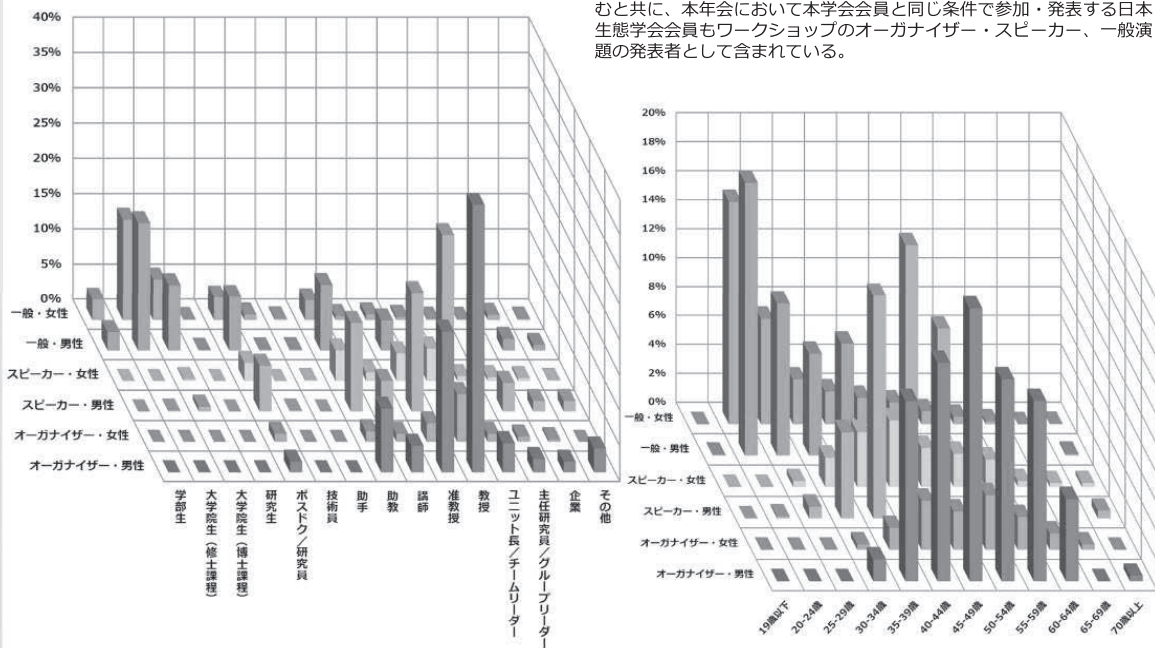
各カテゴリーにおける女性比率の比較



第42回年会における属性調査

今回は4,161名が調査対象となった（のべ人数）。年会の演題登録システム（日本語版・英語版）にアンケート設問を設置（回答は任意）。性別、年齢、所属、職階（身分）について、発表者には投稿時に協力して頂いた（3,895名。Late-Breaking Abstracts投稿分を含む）。一部のオーガナイザー等に関する調査では公開情報や本学会会員データ（学会個人情報保護方針に依拠）なども併用した。なおシンポジウム・ワークショップのスピーカーには非会員の演者を含むと共に、本年会において本学会会員と同じ条件で参加・発表する日本生態学会会員もワークショップのオーガナイザー・スピーカー、一般演題の発表者として含まれている。

職階・年齢とカテゴリーとの関係



2019年会ではワークショップのスピーカー（一般演題からの採択を含む）がほぼ正会員の男女比率と同等となった。なお一般発表については2009年の調査開始以来最も高い女性比率であった。さらに学生会員の一般発表者（学部生・大学院生）のみに着目すると、女性比率は約43%となり、学生会員における女性比率（39%）を上回っている。他方、近年の属性調査結果まとめに対しては「（属性調査の基準になっている）『会員の男女比率』が、学生会員では40%近いが正会員では20%に減ってしまうことにも注目すべきだと思う」との感想が複数寄せられている。研究発表の場においては、性差にかかわらず研究者としてのビジビリティ（可視性）を高めることでその後の研究機会・キャリア獲得などに結び付けることが期待される。シンポジウム・ワークショップのオーガナイザーやスピーカーの多くは正会員であることから、その男女比率が学会員における男女比率との近似値になることが望ましい。

第9回(2021年)日本分子生物学会 国際会議支援募集のお知らせ

日本分子生物学会では、昨年に続き、2021年(2021年1月～12月)に開催計画のある国際会議に対しまして支援事業(開催補助金の助成)を行いますので、ここにお知らせいたします。

分子生物学の黎明期には先鋭的な少人数の若手研究者による会議から革新的な発見と数多くの新分野が誕生しました。科学研究におけるグローバル化とインターネットにおける情報共有が急速に進む現代においても、国際会議において研究者が率直に意見交換を行い相互の理解と信頼関係を深めることはますます重要になっています。質の高い国際会議を日本において開催することは日本発のオリジナルな研究を国際的にアピールし、国際的なリーダーシップを担うために重要です。また、若い時から最新の研究と真摯な議論に接することは研究者育成の要の1つと考えられます。本支援は、日本とアジア発の国際会議を育て、我が国の研究を世界に向けて発信する場を設けることを目的として立ち上げられました。

本国際会議支援(開催補助金の助成)を希望される方は、下記の要項に従って、奮ってご応募ください。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
理事長 阿形 清和
国際会議支援・選考委員会委員長 石川 冬木

■募集要件

1. テーマ：分子生物学に関連した分野において活力の高い議論が期待できるもの。新分野を探索する独自性の高い、萌芽的なテーマも考慮する。
2. 開催規模：参加人数は50名以上400名程度までとし、そのうち外国からの参加者が少なくとも20%程度いること、さらに口頭発表者の中で外国人が3割以上を占めることが望ましい。
3. 開催の形式：
 - 1) 主催者あるいは共同主催者が分子生物学会会員を3年以上つとめていること。教育・研究機関の主催、研究費主催のものは除きます。(組織委員(国内)については、できるだけ本学会への入会を推奨します)
 - 2) 共催：他の団体との共催は可とするが、その場合、参加費に関して分子生物学会会員価格(特に学生会員を考慮されたい)が設定されていることが望ましい。
4. 留意事項：
 - 1) できる限り、国内の若手研究者の口頭発表の機会を作ることが望ましい。

- 2) 会議開催に際しては、分子生物学会が用意している支援システム(JTB 西日本 MICE 事業部による国際会議トータル支援システム)を利用することができる。本システムは、①基本システム代金：23万円(事前参加登録受付・演題投稿受付・カード決済等の基本システム設定)、②オプション/メインHP代金：25万円(全体デザイン・ページレイアウト・サーバ管理12ヶ月・更新メンテナンス12ヶ月)、③オプション/オンライン査読システム：8万円、④オプションその他、などからなります。
- 3) 支援が決定した後は、主催者は各種の報告書・広報ポスター・国際会議HP等に本学会からの支援を受けて開催されることを、表示する義務を負うものとします。
- 4) 採択された場合には、会議終了後、開催責任者にミーティングレポートを執筆いただきます。学会誌「Genes to Cells」に掲載しますことをご了解ください。
- 5) 残金が出た場合、補助金の返還を求めることがあります。

■開催補助金と件数

援助する金額は、一件あたり100万円～250万円。年間2件程度。開催期間・参加予定人数によって金額の変動あり。学術振興会の国際会議等の大型支援を助成された場合は多少の減額あり。

(補助金の使用用途は限定せず自由度を持つものとします。他経費で補えないものが望ましい。ただし国際会議終了後、本学会への会計報告(収支決算書概要)提出の義務を有します。また、分子生物学会から支援を受けたことを、HP、要旨集などに明記いただきます。)

■応募方法

申請書は、分子生物学会ホームページからダウンロードして使用してください。

所定の申請書に、国際会議の目的、形態、予定講演者、おおよその予算規模と使用用途等を記載し、電子データで学会へ提出してください。

■申請書送付先

〒102-0072 千代田区飯田橋 2-11-5

人材開発ビル 4階

日本分子生物学会 国際会議支援・選考委員会 御中

TEL：03-3556-9600

E-mail：info@mbsj.jp

■締切期日 2020年3月31日(火) (必着)

■スケジュール (開催補助金の交付)

- 2020年3月31日：応募締切
- 2020年4月～5月：選考
- 2020年6月：補助金の交付 (予定)

■選考

国際会議支援・選考委員会が選考に当たり、理事長承認のもとに決定します。

国際会議支援・選考委員会

石川冬木 (委員長)、荒木弘之、五十嵐和彦、一條秀憲、佐谷秀行

分子生物学会による、国際会議支援システム (参加登録～演題受付～カード決済／Web 運用) 利用のご案内

分子生物学会では、日本発の国際会議を学会が支援するために経済的支援を行うことに加え、国際会議を開催する研究者の事務的な負担を減らすため、支援システム (JTB 西日本 MICE 事業部による国際会議トータル支援システム /Web 運用) をご用意しております。国際会議支援の詳細は同公募要項の中に書かれているとおりですが、同支援事業の応募とは別に、システムのみを使用されたいとの希望者につきましては、分子生物学会の会員であれば同額での利用が可能です。

システムのみを使用されたい場合は、学会事務局 (分子生物学会 国際会議支援システム・システム利用係り E-mail : info@mbsj.jp) まで E-mail にて、開催概要と連絡先を明記のうえ、お申込みください。(一旦、学会を経由してから、JTB の担当者をご紹介します)

《支援システムの概要》

本学会が JTB 西日本 MICE 事業部と長期契約を交わしたことにより、JTB 西日本 MICE 事業部による国際

会議トータル支援システムを通常より割安価格で利用できます。

- ①基本システム代金：23 万円 (事前参加登録受付・演題投稿受付・クレジットカード決済等の基本システム設定)
- ②オプション / メイン HP 代金：25 万円 (全体デザイン・ページレイアウト・サーバ管理 12 ケ月・更新メンテナンス 12 ケ月)
- ③オプション / オンライン査読システム：8 万円
- ④オプションその他、が利用できます。(メニュー詳細については、一旦、学会を経由した後、JTB の担当者が説明いたします)

なお、この支援のみを受ける場合も、分子生物学会の支援 (システム利用) を受けたことを当該会議の HP、要旨集などに明記いただきます。

◆特定非営利活動法人 日本分子生物学会 第21期第2回理事会記録

日 時：2019年12月2日(月) 13:30～18:00

場 所：福岡国際会議場 4階「411」

出席者：阿形清和（理事長）、佐々木裕之（副理事長 / 第42回年会長）、塩見美喜子（副理事長 / 第44回年会長）、荒木弘之、五十嵐和彦、稲田利文（庶務幹事兼）、上田泰己、上村 匡（編集幹事兼 / 第43回年会長）、大隅典子、菊池 章、木村 宏（庶務幹事兼）、倉永英里奈、小原雄治、中島欽一、中山敬一、鍋島陽一、原 英二、正井久雄、町田泰則（監事）、深川竜郎（広報幹事 / 第45回年会長）、以上20名

欠席者：石川冬木、一條秀憲、胡桃坂仁志、後藤由季子、近藤 滋、斎藤通紀、佐谷秀行、西田栄介（GTC編集長）、三浦正幸（会計幹事兼）、本橋ほづみ、山本 卓、吉森 保、小安重夫（監事）、以上13名

事務局：福田 博（記録）、金子香奈里、並木孝憲、山口恵子

本理事会成立について：

稲田利文庶務幹事より、理事18名、監事1名、幹事1名が出席し、委任状11名（理事）を受理しており、本理事会は細則第4章第8条により成立する旨報告された。

議事録署名人の選任について：

阿形清和理事長より、議事録署名人として、荒木弘之の理事と木村宏理事が指名され、承認された。

議 事：

1. 報告事項

1) 執行部報告

・理事長報告

①年会運営に際しての災害対応(損害保険加入)について

前期理事会で決定した方針に基づき、今回初めて、第42回福岡年会の運営に際して損害保険（chubb損害保険（株））に加入したことが報告された。保険の種類は興行中止保険で保険期間は2019年10月1日から12月6日（会期最終日）、保険料103万円、最大補償金額は約1億8,600万円である。今後毎年、年会ごとに収支（負担経費）資料を準備し、複数の保険会社の資料を集めた上で、当該年会長の要望をお聞きし、執行部の確認を経て契約を交わしていく。

②学会（年会）の国際化に関して

年会の国際化を視野に入れて、今期は、2019年会長から現在決まっている2022年会長まで執行部に参画してもらっている。近く選出される2023年会長を含め、2019年～2023年の5カ年計画をもって年会の国際化を進められればと考えている。

EMBOとの連携の可能性を探っていること、本年7月（ハイデルベルグにて）と10月（東京にて）、EMBO Leptin会長と会談したこと、本年夏にKSMCB（韓国分子細胞生物学会）よりアプローチがあり、年会会期中の12月5日にKSMCB代表と面談の予定があることが報告された。

③本年4月、丸善出版より出版企画「分子生物学の百科事典」の申し入れを受けた。執行部では、同企画のコンセプト、メリット、編集長候補などを慎重に検討したが、編集体制を組めない等のこともあり、同出版企画について辞退した。

・庶務幹事報告

①会員現況

稲田庶務幹事より、2019年11月1日現在の会員数につき以下のとおり報告がなされた。ここ7年の演題申し込み時期（7-8月）の入会者数の推移資料が配付され、本年がもっとも新入会者が多かったことが報告された。結果、会員数総計も微増に転じている。

名 誉 会 員	0 名
正 会 員	8744 名 (海外在住 208 含む)
シニア会員	79 名
次世代教育会員	16 名
学 生 会 員	4119 名 (海外在住 71 含む)
賛 助 会 員	22 社
合 計	12980 名 (前年11月対比、+81)
(*上記以外に所定の手続きによる休会者 60 名あり)	

②生物科学学会連合について

稲田庶務幹事より生科連の活動状況につき報告がなされた。

○本年より小林武彦会員が生科連代表に就任した。3点の重点課題を検討するために3つの委員会を設置しており、本学会は「研究費・人材育成委員会」（委員長は井関祥子副代表）に参画している。

○10月5日、生科連シンポジウム「魅力ある生物教育を考える」が開催され、本学会から庶務幹事2名（稲田利文理事、木村宏理事）が出席した。

・ホームページについて

深川竜郎広報幹事より学会ホームページの運用状況について説明が行われた。2019年度中に346件の記事を掲載した。記事の内訳は、人材公募が4割強、関連シンポジウム情報が3割強、学術賞・研究助成・研究プロジェクト等の案内が約2割といった状況であった。

・関連する会議（事業）への後援・協賛対応について

稲田庶務幹事より、本年5月に日本バイオインフォマティクス学会（バイオインフォマティクス技術者認定試験・実行委員長）より、協賛依頼を受けたことが報告された。執行部で検討した結果、資格試験/認定試験の類には慎重に対応したほうがよいとの意見でまとめ、今回は、協賛はできないが広報協力の形で対応したこと（⇒応募締切日までの一定期間、学会ホームページ・ニュース欄の上位の位置に掲載）が報告された。

引き続き、今後、同様の依頼があった場合に備え、意見交換がなされた。討議の結果、資格認定事業からの同様の依頼に対しては、本学会と関連する事業であることを確認した上で、広報協力に留めることが確認された。

なお関連する学術集会などからの本会あて後援・協賛申請の対応については、従来の手続き方法で問題はない（学会HPの「後援・協賛の申請」ページを参照）。

2) 第42回（2019年）年会について

佐々木裕之第42回年会長より、配布資料に基づき準備状況の報告がなされた。一般演題投稿数はLate-breakingを含め3,145題、そのうち266演題は公募ワークショップに採択された。一般演題数はここ7～8年の単独開催では最高となっている。ワークショップについても過去最高の140件の応募があり、うち120件を採択した。事前参加登録は4,780名、企業展示は360小間となり、運営全体として順調に準備が進んでいることが報告された。（*当日参加を含め、最終の参加者数は7,129名であった）

年会国際化対応の試みとして、会期2日目の講演はほぼすべての会場で一日中英語セッションが行われる「英語デー」とした。その他の日程も常にどこかの会場で英語のシンポジウムが行われ

るようにプログラム編成をしている（T字型プログラム）。ポスター発表は、英語推奨として発表言語を発表者の選択に任せるところ、年会演題投稿受付の時点で英語を選択した投稿者は全体の約2割であった。英語を選択しているポスターを2日目にできるだけ集めた結果、2日目のポスターは約3割が英語での発表となっている。

LBA以外の一般演題ではディスカッサー制を導入し、1演題あたり6分（目安として発表3分、討論3分）のプレゼンテーションの時間を設定した。ポスターディスカッサーの推薦ならびにポスター編成にあたってはプログラム委員に大変な尽力をいただき、当日は297名の会員にポスターディスカッサーを担当してもらう予定である。

明日からの年会運営に際し、理事各位の協力をお願いしたい。

3) 第43回（2020年）年会準備状況

上村匡第43回年会長より2020年の年会準備状況につき報告がなされた。

○会期：2020年12月2日(水)～4日(金)

○会場：神戸国際会議場、神戸国際展示場、神戸ポートピアホテル

○組織委員会：

年会長	上村 匡
組織委員長	萩原正敏
プログラム委員長	井垣達吏
組織委員	河内孝之、柳田素子

“New Faces, New Questions, and Revitalized Worlds”をかけ声とし、組織委員会一同で開催準備に当たっている。今回、プログラム委員にはフレッシュなメンバーを多数加えていることが報告された。

シンポジウム・ワークショップはすべて英語で行い、公募ワークショップでは、オーガナイザーや演者に女性研究者が複数含まれている企画を優先的に採用する方針としたい。

また、神戸会場の一部には講演視聴環境について若干の課題があるが、例えば、スクリーンの小さい細長い部屋は横長で使用するなど、スライドが見えやすいように手を尽くしたい。

4) 第44回（2021年）年会準備状況

塩見美喜子第44回年会長より2021年の年会準備状況につき報告がなされた。

○会期：2021年12月1日(水)～3日(金)

○会場：パシフィコ横浜

○組織委員会：

年会長	塩見美喜子
組織委員長	小林武彦

プログラム委員長 胡桃坂仁志

組織委員 岩崎由香、東山哲也

本年9月9日に第1回組織委員会を開催し、年会開催方針・コンセプト、全体日程、プログラム骨子、今後の準備スケジュール等を検討した。

シンポジウムは午前中の135分枠で1日7企画、3日間で21企画を開催予定である(6企画は組織委員による指定シンポジウム、15企画はプログラム委員による企画、あるいはプログラム委員推薦のオーガナイザーによる企画シンポジウムを予定)。シンポジウムの開催言語は原則として英語とするが、補助的に日本語も使用する予定である。

ワークショップについては午前中の開催枠を135分、午後の開催枠を90分とし、3日間で最大150企画を公募したい。ワークショップの開催言語はオーガナイザー任とする予定である。

年会の国際化対応としては、午前中のプログラムはすべて英語、2日目は午前午後ともに英語開催のプログラムを集める予定である(42回年会の「T字プログラム」を踏襲する予定)。

ポスター発表の時間帯は近年の年会全体日程を踏襲し午後最初の時間帯とし、ポスターディスカッサー制も導入予定である。

5) 第45回(2022年)年会準備状況

深川竜郎第45回年会会長より2022年の年会準備状況につき報告がなされた。

○会期: 2022年12月上旬予定

○会場: 最終調整中

(初めての試みとして、ポスター/展示会場内にオーラルのセッションを行える特設会場を設置する構想があり、展示会場の広さ、使い勝手の最終検討段階にある)

○年会組織委員会:

年会長 深川竜郎

副年会長 永井健治

組織委員長 原田慶恵

プログラム委員長 甲斐歳恵

(※今後、実行委員として学生または若手研究者に参画してもらう予定)

メインコンセプトとしては以下3点を考えている。

(i) アジアを中心とした海外からの参加者を増やす。

(ii) 講演・ポスター・展示の一体感を高める。

(iii) 生物物理学会との連携

第41回(2018年)、第42回(2019年)年会は

日本生態学会と協力して開催したが、第45回年会は日本生物物理学会と協力・連携をして開催する予定である。分子生物学会と生物物理学会との間で2022-2023年の2年間、学会連携についての覚書を取り交わしており(*2019年7月、理事会持ち回り審議にて承認済)、第45回年会では生物物理学会の会員が分子生物学会会員と同様の資格で年会に参加・発表できる(同様に分子生物学会員も生物物理学会年会に参加・発表できる)。また両学会による合同セッション(ジョイント・シンポジウム)なども企画予定である。(*2023年に生物物理学会が開催する国際生物物理会議(IUPAB)にて、本学会はジョイントシンポジウムの企画などの学会協力を行う予定)

年明けにまずは会場を確定し、開催形式などの基本方針を決定していきたい。

6) 上村編集幹事より配布資料に基づき学会誌『Genes to Cells』の編集報告が行われた。

昨年8月には原著論文(Original Article, Brief Report)の処理がさらに迅速化し、採択から数日後に原稿のまま早期出版され、同時にPubMedにも登録・検索可能となっている。

伝統絵画のなかに生命科学の遊び心を加えた本誌の表紙デザインは2020年に10周年を迎える。表紙ができるまでの裏話を盛り込んだタペストリー(直近3年分の36作品)を本年会においても展示するので、ぜひご覧いただきたい。

編集委員会に関しては、本年より荒木弘之委員、石井俊輔委員、長田重一委員、花岡文雄委員にEditorに昇格していただいた。また、来年より次の8名の方を編集委員にお迎えすることが報告された。

石川俊平(東大・医)、岡田由紀(東大・定量研)、北島智也(理研・BDR)、北野潤(遺伝研)、木村宏(東工大・IIR)、胡桃坂仁志(東大・定量研)、丹羽隆介(筑波大・TARA)、深川竜郎(阪大・生命機能)<敬称略>

7) 各種学術賞、研究助成候補への学会推薦状況について

正井久雄賞推薦委員長より、2019年に本学会より推薦した各種学術賞について報告がなされた。引き続き、吉森保研究助成選考委員長代理の上田泰己委員(理事)より、2019年の研究助成推薦状況と結果等について報告が行われた。

8) キャリアパス委員会報告

胡桃坂仁志キャリアパス委員長が欠席のため木村宏理事(委員長代行)より、配付資料に基づき委員会の活動内容が報告された。

①本委員会のミッション、委員会活動の流れ、これまでの年会企画、21期の委員会名簿が配られ、活動概要の説明がなされた。

②第42回年会における属性調査結果より、ポスター「バランスの取れた研究環境を築くために～2019属性調査から学べること～」が作成され、本年会会場でも掲示される。本学会会員の男女比率、職階・年齢と発表カテゴリー（一般・スピーカー・オーガナイザー）との関係、各カテゴリーにおける女性比率の比較、等々について説明がなされた。

③本年会においては以下2企画のランチョンセミナーを開催するので、理事各位においては積極的に参加いただきたい。

『それでいいのか？研究室の選び方』（会期初日/12月3日）

『大学院の無償化を目指して』（年会2日目/12月4日）

④本年8月、上記セミナー『それでいいのか？研究室の選び方』の当日ディスカッションの題材のための事前アンケートを行った。アンケート結果により興味深い貴重なデータ（回答者866名）を得、そのポイントについて説明がなされた。アンケート結果は学会HP・キャリアパス委員会年会企画ページで公開している。

9) 研究倫理委員会報告

中島欽一研究倫理委員長が途中退出のため、大隅典子委員（理事）より今年の研究倫理フォーラムの内容について報告が行われた。年会初日夜のフォーラム枠にて開催するので、理事会関係者においてもぜひ参加いただきたい。

○研究倫理委員会企画・研究フォーラム

『研究成果発表のあるべき姿：オープンサイエンス推進の潮流』

・日時：2019年12月3日(火)

18:30～20:00

・場所：第12会場（福岡国際会議場201）（軽食を配付）

・講演1.「オープンサイエンスのススメ」

大隅典子（東北大・医）

講演2.「bioRxivとは何か？」

坊農秀雅（ライフサイエンス統合データベースセンター）

パネルディスカッション

中島欽一（委員長）、大隅典子、小原雄治、斎藤通紀、鍋島陽一（以上委員）、阿形清和（理事長）、坊農秀雅

10) 富澤基金・基金運営委員会報告

小原雄治基金運営委員長より、富澤基金による第9回（2019年）日本分子生物学会若手研究助成結果につき報告がなされた。

(i) 第9回応募の受付期間：2019年1月15日～2月5日

(ii) 応募総数：94名（男性73名、女性21名
※性別は名前からの推定による）

(iii) 選考：

・第1次審査：書類審査

・第2次審査：12名を対象に5月11日にヒアリングを実施

(iv) 審査経過と第9回助成対象者：

審査経過詳細については、会報123号（2019年6月号）に結果報告を掲載済みであるので参照されたい。第9回若手研究助成の助成対象者は以下の5氏である。

○伊藤美菜子（慶應義塾大学医学部微生物学・免疫学教室）

中枢神経系疾患における脳Tregの発生機構と神経修復機構の解明

Elucidation of the development and neuronal repair mechanisms of brain Treg cells in central nerve system disorders

○奥村美紗子（広島大学大学院統合生命科学研究科細胞生物学研究室）

光忌避行動の分子・神経基盤の解明

The molecular and neural mechanism of nematode light avoidance behavior

○小幡史明（東京大学大学院薬学系研究科遺伝学教室）

熱耐性の代謝基盤

The metabolic basis of thermotolerance

○鈴木郁夫（東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻）

ヒト大脳皮質の進化を駆動した分子発生生物学的メカニズムの探索

Deciphering the developmental mechanisms relevant to the evolution of human cerebral cortex

○高岡勝吉（九州大学大学院医学研究院発生再生医学分野 / 申請時の所属はマックスプランク生物物理化学研究所）

マウス胚における対称性の破れ

Symmetry breaking in the mouse embryos.

11) 第8回（2020年）国際会議支援・選考結果報告

石川冬木国際会議支援・選考委員長代理、荒木

弘之委員（理事）より8回目となる国際会議支援についての選考結果について報告された。過去最多の7件の応募があり、選考委員会における慎重な審査を経て、理事長承認のもと、3会議が採択された。

《会議名称》

（和文）Wnt 会議 2020

（英文）Wnt meeting 2020

開催責任者：菊池 章（大阪大学大学院医学系研究科・教授）

会期：2020 年 9 月 22 日(火)～ 25 日(金)

会場：淡路夢舞台国際会議場

助成金額：250 万円

《会議名称》

（和文）国際 3R+3C ミーティング

（Replication Recombination Repair + Cell Cycle Chromosome Chromatin）

（英文）International Symposium on 3R and 3C

開催責任者：太田邦史（東京大学大学院総合文化研究科・教授）

会期：2020 年 11 月 16 日(月)～ 20 日(金)

会場：かずさアカデミアパーク、オークラアカデミアパークホテル

助成金額：150 万円

《会議名称》

（和文）国際細胞老化研究会（ICSA）2020 年度学術会議

（英文）International Cell Senescence Association（ICSA）2020 Conference

開催責任者：原 英二（大阪大学微生物病研究所・教授）

会期：2020 年 11 月 2 日(月)～ 5 日(木)

会場：大阪府立国際会議場（グランキューブ大阪）

助成金額：150 万円

12) 生命科学教育（高校などへの講師派遣の状況）について

胡桃坂仁志担当理事欠席のため、事務局（並木孝憲）より配付資料に基づき、2019 年の高校などへの講師派遣の状況、および年会における高校生研究発表会の状況（過去 7 回の実績と本年会の発表予定）について報告がなされた。今年は過去最高の 141 名の参加予定者数（高校生と引率教員）となっており、キャリアパス委員にディスカッサーとして協力していただく予定である。

また、生命科学教育事業の活動周知の 1 つとして、本年も夏に開催された『SSH 生徒研究発表会』（神戸）に学会ブースを出展、五島剛太教

授（生命科学教育担当委員）に協力いただき、高校生や引率の先生に本学会の活動内容を紹介したことが報告された。

13) その他

稲田庶務幹事より第 42 回通常総会の予定議題の説明がなされ、議事進行と報告担当者の確認、さらに第 9 回富澤基金贈呈式の式次第の確認が行われた。

2. 審議事項

1) 令和 1 年度（2019 年度）決算承認の件

三浦正幸会計幹事欠席のため、会計幹事代理として事務局（福田博）より令和 1 年度活動計算書の収支について詳細説明がなされた。本年度は約 966 万円の黒字決算で終わることが出来た。黒字となったポイントは 3 つあり、① 昨年の 41 回横浜年会が大きく黒字であったこと、② 『Genes to Cells』の出版社からの総利益折半の精算が順調であったこと（精算時の為替レートも前年同様であったこと）、③ 会費収入が順調であったことがあげられる。会費収入については、会員数が微増に転じ、また納入率も順調であった（正会員会費の納入率 93.5%、学生会員会費 73.7%）。経常費用に関しては、事業費・内訳別収支について説明がなされた。さらに「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子基金」の決算についても報告が行われた。本年は消費税約 207 万円を納めており、その他の税務処理についても顧問契約を交わしている税務専門家の指示のもと、収益事業部分の法人確定申告を行った。

本決算は 10 月 28 日に宮城秀敏公認会計士の監査を受け、さらに同年 11 月 5 日に小安重夫監事、町田泰則監事による会計監査を受け、配付資料のとりの監査報告書が提示されている。

続いて、町田監事より 11 月 5 日に学会事務局において会計監査を実施し、監査報告書に記載したとおり、帳簿ならびに会計証憑類は正確に整えられており、各金融機関の通帳と残高証明書をすべて確認し、同決算を認めたことが報告された。監事の職務は、会計のみならず理事会全体の運営や事務局の状況などにも幅広く注意を広げることが職務であると小安監事とも確認しているが、業務状況は順調であり、特段留意すべき付帯意見はないとの説明がなされた。

審議の結果、本決算は理事会で承認され、第 42 回通常総会に諮られることとなった。

続いて、出席理事の一人より内部留保（次期繰越金：約 2 億 1,200 万円）をもう少し積極的に資産運用したほうがよいのではとの意見が提出さ

れたが、阿形理事長より学会の会計であるので今後も手堅くいきたいとの回答がなされた。なお、過去の理事会（2014年～2015年）でも繰越金の運用が話題になったことがあり、当時、専門家の助言を受けたことがあるが、念の為、事務局経由にて公認会計士に確認を取ることとしたい。

2) 令和2年度（2020年度）活動予算書承認の件

木村庶務幹事より総会資料（15頁）掲載の令和2年度事業計画書の説明がなされた後、三浦会計幹事代理の事務局（福田博）より、令和2年度活動予算書と同活動予算・事業費の内訳について説明が行われた。

前年決算の実績をふまえて各科目を微調整している。本予算の大きな変更点は、事業費内訳で新設した「42回年会開催補助・追加支援」の540万円（シンポジウムのみならずワークショップの海外演者招請関係に500万円、福岡年会の新しい試み Foreign Travel Award に40万円（5万円×8名））である。これは阿形理事長が提唱している年会の国際化を目指した追加支援であり、従来の本部補助金500万円にこの540万円を加え、2020年予算では計1,040万円を補助していくこととなる。当面、21期の予算編成方針として、第42回（2019年）年会と第43回（2020年）年会はこの方針で進めていく予定である。

さらに年会運営の災害リスク対応として、本予算では初めて「年会その他」科目にて、損害保険料103万円（事業費内訳科目としては「会場費」に相当）を計上している。

以上、令和2年度は年会の国際化を目指した時限的対応を含み、法人全体として489万円の赤字予算を編成したことが説明された。

審議の結果、同予算書は理事会で承認され、第42回通常総会に諮られることとなった。

3) 次回理事選挙の女性理事枠について（細則改正の件）

阿形理事長より女性理事枠設置の経緯について説明がなされた。第16期において女性理事が1名のみとなった状況を受けて、当時の第16期岡田理事会において初めて女性理事枠（3名）が設置された。その後、17-19期の選挙では4名以上の女性理事が選出されており、実質、時限措置（女性理事枠）が適用・運用されたことはなく、第20期選挙では、一旦、同細則（時限特別措置）は削除されている。その後、一旦廃止して臨んだ20期理事選挙では、選挙当選した女性理事は3名であり、それを受けて、2017年12月5日に開催された20期第2回理事会において、同時限

措置を復活させていることが報告された（*現在の21期の女性理事は5名である）。

来年（22期）の理事選挙に際し、同時限措置を継続するか否か、継続する場合は女性理事枠の人数をどうするか、活発な議論がなされた。本来は女性理事枠の定数を設けなくても適正な人数の女性理事が選出されてくることが望ましいが、過渡期のテンポラルな措置として必要であろうとの意見が多数を占めた。また性別にかかわらず、ぜひ新しい次世代の方に理事会に入っていただき、学会の運営に参画してもらうことが重要であるとの意見が出された。ちなみに現在の正会員の女性比率は約20%、学生会員の女性比率は39%である。選挙実施時には選挙要項とは別に、目標（女性研究者に理事会に参画してもらう）として高みを目指す内容を含んだ理事長メッセージを発信したかどうかとの意見も出された。

審議の結果、時限特別措置を継続し、理事定員の20%（6名）の女性理事枠を設けることが決定された。細則は本日付けで以下のように改正することとなった。

■細則 第2章 役員の選出

第2条

5) 時限特別措置として、理事定員30名の20%（6名）の女性理事枠を設ける。選挙により6名の女性当選者が選出されなかった場合は、女性理事が最低6名になるまで調整を行う。ただし、理事定員30名に変更はないものとする。

4) 年会開催ルール細目の一部修正（男女比・目標値の追加記載）について

2018年11月27日開催の理事会で第20期将来計画委員会提言「年会の開催方針について」および「年会開催ルール細目」「研究発表に関する指針」が承認・公表されているが、そのうち、年会開催ルール細目の3.人材育成の条文に男女比に関する目標値を追加したい、との執行部案が阿形理事長より示され、自由討論に入った。

活発な意見交換の後、細目3.に関して、下記条文（下線部分）を加筆することが決定した。

「年会開催ルール細目」

3. 人材育成

シンポジウム・ワークショップオーガナIZER等およびスピーカーに若手研究者・女性研究者を積極的に含めることを推奨する。男女比

については、オーガナイザー、スピーカーそれぞれに、女性研究者を20%以上含めることを目標値とする。

5) 年会の国際化、海外との連携について

本会議冒頭の理事長報告（年会の国際化）に継続する形で、学会（年会）の国際化を進めるための方策等について自由討論に入った。EMBO等の国際学会組織との連携の可能性やその方策、年会の英語化と同時に海外からの参加者をいかに増やすか、日本でアジア大会を開催できるような手立てがないか（現状の年会とアジア会議とのジョイント）、等々の活発な意見交換が行われた。

続いて阿形理事長より、近く選出される2023年会長を含め、2019年～2023年の5カ年計画をもって年会の国際化を進められればと考えているが、今後、国際化へのトライアル情報を蓄積していき、長期ビジョンに立った国際対応を担当してもらう“国際化担当幹事”を新設したいとの要望が出され、審議の結果、承認された。

国際化担当幹事には2020年1月から執行部に参画してもらい、その人選は阿形理事長と執行部に一任された。

6) 第46回（2023年）年会長について

上記5)で討議された内容を踏まえ、第46回（2023年）年会を担当いただくに相応しい候補者を選出し、あらためて理事会に諮りたい旨（年内に持ち回り審議をさせていただく予定）、阿形理事長より説明がなされた。

上記、第21期第2回理事会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

2019年12月2日

特定非営利活動法人	日本分子生物学会
	第21期第2回理事会
議 長	阿 形 清 和 ㊟
議事録署名人	荒 木 弘 之 ㊟
議事録署名人	木 村 宏 ㊟

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 令和2年度（第42回）通常総会記録

日 時：令和元年12月4日(水) 18:30～19:30

場 所：福岡国際会議場 2階 201（第12会場）

社員数（正会員＋名誉会員＋シニア会員＋次世代教育会員）：
8,839名

出席者数：4,822名（本人出席60名、表決委任者4,762名）

議事内容：

1. 定款第25条に基づき、阿形清和理事長より本総会議長として小林武彦会員が指名された。さらに定款第29条に基づき、議事録署名は、佐々木裕之会員（第42回年会会長兼）と阿形理事長が担当することが確認された。
2. 小林議長より、定款第26条（総会の定足数）に基づき、上記表決委任者（委任状）を含めて出席4,822名となり、本総会は成立する旨報告された。
3. 経過報告（事業報告）

1) 理事長報告

阿形理事長より、総会資料（1頁：令和1年度事業報告）に基づき、事業活動全般と下記4点について報告が行われた。

①年会運営に際しての災害対応（損害保険加入）について

2018年11月27日に開催された20期・21期合同理事会において、2019福岡年会以降の年会について興行中止保険（地震を含む自然災害で年会が中止となった場合に必要となる補償額をカバーできる損害保険）に加入することが決定しており、2019福岡年会は初めて実際に加入手続きを行ったことが報告された。

②年会の国際化について

年会国際化に向けた取り組みとして、5年後の第46回（2023年）年会が一つの集大成となるように目標設定をした。21期の理事会執行部には第42回（2019年）～第45回（2022年）の年会会長が参画しており、年会国際化対応について学会としての方針・課題等を共有し、各年会における試みの結果を年会アンケート等でフィードバックして、後の年会運営に活かすことができるようになっている。これに加え、12月2日開催の21期第2回理事会において、理事会に国際化担当幹事を置くことが承認され、年会国際化の継続的な取り組みを可能にする体制が強化されたと考えている。また本部からの年会補助金は従来500万円であったが、今後2年間（2019年会、2020年会）は、国際化予算として別途500万円を追加支援す

る方向で予算案を作成している。

③女性理事枠の設定について

12月2日開催の21期第2回理事会にて、時限特別措置として理事定員30名の20%（6名）の女性理事枠を設けることが決定した。選挙により6名の女性当選者が選出されなかった場合は、女性理事が最低6名になるまで調整を行う。ただし、理事定員30名に変更はない。本来は女性理事枠の定数を設置しなくても適正な人数の女性理事が選出されてくることが望ましいが、過渡期のテンポラルな措置としてご理解いただきたい。

④研究倫理フォーラムについて

年会初日の12月3日に研究倫理委員会企画・研究倫理フォーラム「研究成果発表のあるべき姿：オープンサイエンス推進の潮流」が行われた。その中でbioRxiv（バイオアーカイブ）の紹介があり、プレプリントサーバの活用について議論がなされた。本来税金が投入されている研究費の成果物である論文が掲載されたジャーナルは、税金の還元として無料で読むことができてしかるべきだが、大学等では商業ジャーナルによるパッケージ販売が高額となり読めない環境も増えている。その対策としてこれまでにオープンアクセスのモデルであるPLOS ONEなどもできたが、従来の数人の査読によるピアレビュー方式から多くの人の目に触れるプレプリントサーバ活用方式へと大きな変化が起こりつつある今、こうした問題については会員が多く集まれる場できちんと議論したほうが良いのではないと思われる。今後も考える機会を作っていきたい。

2) 庶務報告

稲田利文庶務幹事より総会資料（1頁：令和1年度事業報告）に基づき、事業活動全般について詳細の報告が行われた。最新の会員現況は以下の通りである。

〔2019年11月1日現在会員数〕

正会員8744名、シニア会員79名、次世代教育会員16名、学生会員4119名、賛助会員22社、総計12980名（前年11月対比、+81）

3) 編集報告

上村匡編集幹事より『Genes to Cells』について報告が行われた。

西田栄介3代目編集長が就任して2年目を迎

え、来年1月より新しい編集委員8名が加わる予定である。ここ3年で投稿数は増加しており、生命科学すべての分野に開かれたジャーナルであるGenes to Cellsにぜひ積極的に投稿してほしい。

4. 議事

1) 令和1年度(2019年度)決算承認の件

三浦正幸会計幹事より総会資料(2~14頁)に基づき、令和1年度活動計算書の収支について詳細報告が行われた。2019年10月28日、公認会計士宮城秀敏氏の会計監査を受け(総会資料の独立監査人の監査報告書を参照)、同年11月5日に小安重夫監事、町田泰則監事の監査を受けた。

審議の結果、本決算は異議なく承認された。

2) 令和2年度(2020年度)活動予算書承認の件

木村宏庶務幹事より総会資料(15頁)に基づき令和2年度事業計画書の説明がなされた後、三浦会計幹事より総会資料(16~17頁)に基づき、令和2年度活動予算書について説明が行われた。

審議の結果、同活動予算書は異議なく承認された。

5. 第42回(2019年)年会長挨拶

佐々木裕之第42回年会長より年会開催状況について報告が行われた。

7年ぶりに福岡での開催となった本年会は、人工知能や各種分析技術の革新を踏まえた「分子生物学のネクストステージ」を基調コンセプトとし(もうひとつの重要なテーマは「食の都福岡へようこそ!大いに食べて、大いに飲んで、大いに議論しよう!」、事前参加登録者は4,780名となっている(*最終の参加者数は7,129名であった)。

ワークショップは過去最高の140件の応募があり、うち120企画を採択した。一般演題数はここ7~8年では最高となった。近年、企業の出展は厳しい状況が続いていたが、企業展示は360小間、バイテクセミナー16枠と、いずれも準備していたすべての枠が埋まった。

今回、年会国際化対応の試みとして、会期2日目をほぼすべての会場で一日中英語セッションが行われる「英語デー」とし、その他の日程も常にかの会場で英語のシンポジウムが行われるようにプログラム編成をしている(T字型プログラムと呼ばれている)。ポスター発表は、英語推奨として発表言語を発表者の選択に任せるところ、年会演題投稿受付の時点で英語を選択した投稿者は全体の約2割であった。英語を選択しているポスターを2日目にできるだけ集めた結果、2日目のポスターは約

3割が英語発表となったことが報告された。

6. 第43回(2020年)年会長挨拶

上村匡第43回年会長より2020年の年会開催企画案と準備状況について報告が行われた。

・会期:2020年12月2日(水)~4日(金)の3日間

・会場:神戸国際会議場、神戸国際展示場、神戸ポートピアホテル

“New Faces, New Questions, and Revitalized Worlds”をかけ声として生命科学の祭典を盛り上げる。今回、プログラム委員には分子生物学会の会員ではあるがこれまで年会にあまり参加・発表することがないというフレッシュなメンバーも多数加えている。

シンポジウム・ワークショップはすべて英語で行う予定である(ランチョン・フォーラムの言語は自由)。公募ワークショップでは、オーガナイザーや演者に女性研究者が複数含まれている企画を優先的に採用する方針としている。

神戸会場の一部には講演視聴環境について若干の課題があるが、例えば、スクリーンの小さい細長い部屋は横長で使用するなど、スライドが見えやすいように手を尽くしたい。

また、シーズプレゼンテーション(ショーケース)企画の実施を検討している。研究者の持つシーズ研究とベンチャーキャピタルとのマッチングの場を年会会場に設ける初の試みである。

7. 第44回(2021年)年会長挨拶

塩見美喜子第44回年会長より2021年の年会開催企画案と準備状況について報告が行われた。

・会期:2021年12月1日(水)~3日(金)の3日間

・会場:パシフィコ横浜

パシフィコ横浜の会場使用料が大きく改定されたため、横浜での2021年開催は改定前料金で開催できる最後の年会となる可能性があることから、参加者の思い出に残る横浜年会としたい。

年会国際化対応としては、この第42回(2019年)福岡年会に倣った全体日程(会期2日目はすべての会場で一日中英語セッションが行われる「英語デー」としたい(T字型プログラム)。

シンポジウムは公募せず年会組織委員・プログラム委員で企画し、公募ワークショップは時間を短めにして採択できる数を増やすことを検討している。ポスターセッションではディスカッサー制を採用する予定である。特に会期2日目は、海外からの招待演者にもポスター会場で議論に参加してもらえと良いのではと考えている。

8. 第45回(2022年)年会長挨拶

深川竜郎第45回年会長より2022年の年会開催

企画案と準備状況について報告が行われた。

- ・会期：2022 年 12 月上旬予定（3 日間）
- ・会場：最終調整中（初めての試みとして、ポスター / 展示会場内にオーラルのセッションを行える特設会場を設置する構想があり、展示会場の広さ、使い勝手の最終検討段階にある）

第 41 回（2018 年）、第 42 回（2019 年）年会は日本生態学会と協力して開催したが、第 45 回年会は日本生物物理学会と協力・連携をして開催する予定である。本年会では生物物理学会の会員が分子生物学会会員と同様の資格で年会に参加・発表できる（同様に分子生物学会員も生物物理学会年会に参加・発表できる）。また両学会による合同セッション（ジョイント・シンポジウム）なども企画していきたい。

年明けにまずは会場を確定し、開催形式などの基

本方針を決定していきたい旨報告された。

9. 小林議長より閉会の挨拶があり、第 42 回総会が終了した。

上記、令和 2 年度通常総会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

令和元年 12 月 4 日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
令和 2 年度通常総会

議長 小林 武彦 ㊞

議事録署名人 阿形 清和 ㊞

議事録署名人 佐々木 裕之 ㊞

令和 1 年度（2019 年度） 決算報告

令和 1 年度（2019 年度） 活動計算書

平成 30 年 10 月 1 日から令和 1 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目		金 額	
I	経常収益		
1	受取入会金		
	正会員受取入会金	554,000	
	学生会員受取入会金	1,298,000	1,852,000
2	受取会費		
	正会員受取会費	53,138,500	
	学生会員受取会費	9,103,000	
	賛助会員受取会費	960,000	
	シニア会員受取会費	201,000	
	次世代教育会員会費	71,500	63,474,000
3	受取寄付金	5,500,000	5,500,000
4	受取助成金	1,707,820	1,707,820
5	事業収入		
	(1)学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業	193,783,400	
	(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業	17,502,850	
	(3)その他の目的を達成するために必要な事業	0	211,286,250
6	その他収益		
	受取利息	8,208	
	雑収入	81,910	90,118
	経常収益計		283,910,188
II	経常費用		
1	事業費		
	(1)人件費		
	給与手当	11,331,847	
	法定福利費	1,849,902	
	福利厚生費	20,428	
	人件費計	13,202,177	
	(2)その他経費		
	業務委託費	95,427,245	
	編集業務費	3,742,825	
	印刷費	20,667,011	
	通信運搬費	7,137,424	
	旅費交通費	12,951,001	
	会議費	2,509,284	
	支払手数料	1,407,240	
	消耗品費	2,618,969	
	会場費	47,972,390	
	機材費	15,647,742	
	諸会費	60,000	
	広報費	13,024	
	補助金	5,500,000	
	雑費	997,290	
	租税公課	829,143	
	その他経費計	217,480,588	
	事業費計		230,682,765
2	管理費		
	(1)人件費		
	給与手当	16,890,136	
	法定福利費	2,763,327	
	福利厚生費	30,526	
	人件費計	19,683,989	
	(2)その他経費		
	事務所家賃	4,030,037	
	業務委託費	1,910,520	
	会員管理システム運用管理費	2,936,302	
	印刷費	1,504,816	
	通信運搬費	3,317,672	
	旅費交通費	2,307,760	
	会議費	495,874	
	支払手数料	1,487,667	
	消耗品費	1,216,749	
	雑費	754,118	
	租税公課	2,141,300	
	特定預金支出（退職給付引当金）	1,780,200	
	その他経費計	23,883,015	
	管理費計		43,567,004
	経常費用計		274,249,769
	当期正味財産増加額		9,660,419
	前期繰越正味財産額		202,609,713
	次期繰越正味財産額		212,270,132

(単位：円)

令和 1 年度（2019 年度） 貸借対照表

令和 1 年 9 月 30 日現在

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	金 額		
I 資産の部			
1 流動資産			
現金預金	227,743,308		
前払費用	10,329,793		
前渡金	570,628		
立替金	8,485,181		
流動資産合計		247,128,910	
2 固定資産			
工具器具備品	1		
敷金	1,802,000		
固定資産合計		1,802,001	
資産合計			248,930,911
II 負債の部			
1 流動負債			
未払金	120,178		
未払法人税等	70,000		
未払消費税	1,321,400		
前受会費	461,000		
前受金	1,000,000		
預り金	18,307,601		
流動負債合計		21,280,179	
2 固定負債			
退職給付引当金	15,380,600		
固定負債合計		15,380,600	
負債合計			36,660,779
III 正味財産の部			
前期繰越正味財産		202,609,713	
当期正味財産増加額		9,660,419	
正味財産合計			212,270,132
負債及び正味財産合計			248,930,911

(単位：円)

令和 1 年度（2019 年度）財産目録

令和 1 年 9 月 30 日現在

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	金 額	
I 資産の部		
1 流動資産		
現金預金		
現金	60,561	
郵便振替 00110-1-901302	33,000,832	
普通預金 三菱 UFJ 銀行 春日町支店	1,045,380	
普通預金 三菱 UFJ 銀行 所沢支店	4,220,685	
普通預金 三菱 UFJ 信託銀行 上野支店	225,259	
普通預金 三井住友銀行 飯田橋支店	54,591,768	
普通預金 三井住友信託銀行 芝営業部	350,150	
普通預金 みずほ銀行 本郷支店	102,252	
普通預金 静岡銀行 東京営業部	4,146,421	
定期預金 三菱 UFJ 銀行 春日町支店	30,000,000	
定期預金 三井住友銀行 飯田橋支店	30,000,000	
定期預金 三菱 UFJ 信託銀行 上野支店	10,000,000	
定期預金 三井住友信託銀行 芝営業部	36,000,000	
定期預金 みずほ銀行 本郷支店	10,000,000	
定期預金 静岡銀行 東京営業部	14,000,000	
前払費用 事務所家賃 10 月分	311,515	
前払費用 事務所火災保険 2019.10 - 2020.8	11,458	
前払費用 2019 年分 Genes to Cells オンライン費用	5,006,820	
前払費用 第 42 回年会開催補助金	5,000,000	
前渡金 男女共同参画学協会連絡会参加費	10,000	
前渡金 上記振込手数料	108	
前渡金 第 42 回年会 事務局旅費	560,320	
前渡金 両替専用カード	200	
立替金 編集経費（2019 年 1 月分以降）	8,485,181	
流動資産合計		247,128,910
2 固定資産		
工具器具備品 電話取付一式	1	
敷金 学会事務所・編集室	1,802,000	
固定資産合計		1,802,001
資産合計		248,930,911
II 負債の部		
1 流動負債		
未払金 通信運搬費（宅急便代、NTT、メールサーバ）	50,495	
未払金 印刷費（コピーカウンター料）	19,701	
未払金 雑費（外部倉庫、PC サポート）	49,982	
未払法人税等	70,000	
未払消費税	1,321,400	
前受会費 令和 2 年度以降会費	461,000	
前受金 GTC 編集費・出版社補助金	1,000,000	
預り金 富澤基金	18,146,421	
預り金 源泉所得税	161,180	
流動負債合計		21,280,179
2 固定負債		
退職給付引当金	15,380,600	
固定負債合計		15,380,600
負債合計		36,660,779
III 正味財産の部		
前期繰越正味財産	202,609,713	
当期正味財産増加額	9,660,419	
正味財産合計		212,270,132
負債及び正味財産合計		248,930,911

（単位：円）

「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子基金」

令和 1 年度（2019 年度）会計報告

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

●令和 1 年度（2019 年度）富澤基金 決算報告書

平成 30 年 10 月 1 日から令和 1 年 9 月 30 日まで

科 目	決 算 額	備 考
収入の部		
預金利息	2,520	
当期収入合計	2,520	
前期繰越金	33,415,160	
合 計	33,417,680	
支出の部		
研究助成金	15,000,000	第 9 回研究助成者は 5 名（1 人 300 万円）
選考経費 / 会場費	73,607	ヒアリング（2019.5.11）
選考経費 / 旅費	111,600	〃
事務・雑費	86,052	貸金庫使用料（静岡銀行）25,920 円、 送金手数料等 3,132 円、遠方からのヒアリング 出席者（* 不採択）旅費支払 57,000 円
当期支出合計	15,271,259	
次期繰越金	18,146,421	
合 計	33,417,680	

●令和 1 年度（2019 年度）富澤基金 貸借対照表

令和 1 年 9 月 30 日現在

借 方		貸 方	
科 目	金 額	科 目	金 額
資産の部		負債の部	
普通預金	4,146,421	流動負債	0
定期預金	14,000,000	基金会計（期首）	33,415,160
		今年度収支差額	- 15,268,739
		基金正味財産	18,146,421
合 計	18,146,421	合 計	18,146,421

●令和 1 年度（2019 年度）富澤基金 財産目録

令和 1 年 9 月 30 日現在

科 目	摘 要	金 額
普通預金	静岡銀行 東京営業部	4,146,421
定期預金	静岡銀行 東京営業部	14,000,000
合 計		18,146,421

令和1年度(2019年度) 計算書類の注記

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

1. 重要な会計方針

計算書類の作成は、NPO 法人会計基準（2010 年 7 月 20 日 2011 年 11 月 20 日一部改正 NPO 法人会計基準協議会）によっております。

(1) 固定資産の減価償却の方法

有形固定資産の減価償却は定率法を採用しております。

(2) 引当金の計上基準

退職給付引当金は従業員の退職給付に備えるため、当期末における退職給付債務に基づき当期末に発生していると認められる金額を計上しております。

なお、退職給付債務は期末自己都合要支給額に基づいて計算しております。

(3) 消費税等の会計処理

消費税等の会計処理は、税込方式を採用しております。

2. 事業費の内訳

別紙（66 頁参照）

3. 固定資産の増減内訳

(単位：円)

科目	期首取得価額	取得	減少	期末取得価額	減価償却累計額	期末帳簿価額
工具器具備品	955,847	0	0	955,847	△ 955,846	1
敷金	1,802,000	0	0	1,802,000	0	1,802,000
合計	2,757,847	0	0	2,757,847	△ 955,846	1,802,001

【監査報告】

令和1年度(2019年度)決算に関して、令和1年10月28日、独立監査人 宮城秀敏公認会計士の監査を受けました。その計算書類が、我が国において一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して、令和1年度の収支、正味財産増減の状況及び同年度末日現在の財政状態をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。との監査報告書の提出を受けました。その後、同年11月5日に町田泰則監事、小安重夫監事による監査を終了しました。(両監事による会計監査は、帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きにより行われた)ここにご報告いたします。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

第21期理事長 阿 形 清 和

理事(会計幹事) 三 浦 正 幸

令和1年度(2019年度)事業費の内訳

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
(単位:円)

科 目		(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書の発行事業						(3)その他の目的を達成するために必要な事業				合 計		
		第41回年会	年会その他	国際会議支援	会報発行	Genes to Cells 編集	Genes to Cells オンライン	ホームページ関係	社会貢献・教育活動	各種委員会 (キャリアパス・男女共同参画・その他)	事業費その他 (研究倫理・その他)	事業費計	管理部門	合計
I 経常収益														
1. 受取入会金	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,852,000	1,852,000	
2. 受取会費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	63,474,000	63,474,000	
3. 受取寄付金	5,500,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5,500,000	0	5,500,000	
4. 受取助成金	1,707,820	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,707,820	0	1,707,820	
5. 事業収入											0			
(1)学術集会・研究発表会・講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業		193,783,400		0	0	0	0	0	0	0	193,783,400	0	193,783,400	
(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書の発行事業		0	0	17,502,850	0	17,502,850	0	0	0	0	17,502,850	0	17,502,850	
(3)その他の目的を達成するために必要な事業		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
事業収入計		193,783,400	0	0	0	17,502,850	0	0	0	0	211,286,250	0	211,286,250	
6. その他収益	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	90,118	90,118	
経常収益計		200,991,220	0	0	0	17,502,850	0	0	0	0	218,494,070	65,416,118	283,910,188	
II 経常費用														
(1) 人件費														
給与手当	3,416,963	0	0	762,790	762,790	0	1,261,826	1,393,703	3,418,319	315,456	11,331,847	16,890,136	28,221,983	
法定福利費	558,200	0	0	124,557	124,557	0	207,595	226,048	558,200	50,745	1,849,902	2,763,327	4,613,229	
福利厚生費	6,165	0	0	1,375	1,375	0	2,292	2,496	6,165	560	20,428	30,526	50,954	
人件費計	3,981,328	0	0	888,722	888,722	0	1,471,713	1,622,247	3,982,684	366,761	13,202,177	19,683,989	32,886,166	
(2) その他経費														
事務所家賃	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4,030,037	4,030,037	
業務委託費	87,585,935	330,480	0	0	0	5,019,960	1,823,040	0	528,600	139,230	95,427,245	1,910,520	97,337,765	
編集業務費	0	0	0	0	3,742,825	0	0	0	0	0	3,742,825	0	3,742,825	
会員管理システム運用管理費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2,936,302	2,936,302	
印刷費	15,908,488	0	0	3,896,532	0	0	15,336	846,655	0	0	20,667,011	1,504,816	22,171,827	
通信運搬費	3,117,825	0	0	3,974,756	0	0	44,843	0	0	0	7,137,424	3,317,672	10,455,096	
旅費交通費	12,378,971	67,600	0	0	0	0	163,430	307,200	33,800	12,951,001	2,307,760	15,258,761	15,258,761	
会議費	1,600,932	96,746	0	0	0	0	0	0	654,106	157,500	2,509,284	495,874	3,005,158	
支払手数料	1,360,869	756	2,592	3,240	0	0	1,296	3,672	3,672	34,815	1,407,240	1,487,667	2,894,907	
消耗品費	2,386,724	0	0	232,245	0	0	0	0	0	0	2,618,969	1,216,749	3,835,718	
会場費	47,972,390	0	0	0	0	0	0	0	0	0	47,972,390	0	47,972,390	
機材費	15,647,742	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15,647,742	0	15,647,742	
諸会費	0	0	0	0	0	0	0	0	10,000	50,000	60,000	0	60,000	
広報費	0	0	0	0	0	0	10,000	10,000	0	3,024	13,024	0	13,024	
補助金	0	0	5,500,000	0	0	0	0	0	0	0	5,500,000	0	5,500,000	
雑費	965,750	0	0	0	0	0	30,000	0	0	1,540	997,290	754,118	1,751,408	
租税公課	0	0	4,000	0	825,143	0	0	0	0	0	829,143	2,141,300	2,970,443	
特定預金支出（退職給付引当金）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,780,200	1,780,200	
その他経費計	188,925,626	485,582	5,506,592	8,106,773	4,567,968	5,019,960	1,823,040	264,905	2,350,233	419,909	217,480,588	23,883,015	241,363,603	
経常費用計	192,906,954	485,582	5,506,592	8,995,495	5,456,690	5,019,960	3,294,753	1,887,152	6,332,917	786,670	230,682,765	43,567,004	274,249,769	
増減額	8,084,266	△ 485,582	△ 5,506,592	△ 8,995,495	12,046,160	△ 5,019,960	△ 3,294,753	△ 1,887,152	△ 6,332,917	△ 786,670	△ 12,188,695	21,849,114	9,660,419	

※ 事務局の人員費(給与手当)は担当業務別に合わせ、事業費の各種目に按分計上しています。
※ 別紙、第41回年会決算の収支は、NPO法人会計基準に基づき本事業内訳書にて科目振分けがなされています。

【補足資料】第41回日本分子生物学会年会 収支決算書

【収入の部】

(単位：円)

項 目	内 訳	金 額	備 考
I 参加費収入		49,633,500	
1 正会員 事前	9,000 × 2,393名	21,537,000	
2 学生会員 事前	3,000 × 1,715名	5,145,000	
3 豪雨災害・北海道地震被災学生会員 / 海外若手招聘	0 × 43名	—	
4 学部学生 事前	0 × 61名	—	
5 非会員 事前	12,500 × 260名	3,250,000	
6 正会員 当日	(4,472名)	8,019,000	
7 学生会員 当日	11,000 × 729名	660,000	
8 学部学生 当日	4,000 × 165名	—	
9 非会員 当日	0 × 932名	10,860,500	
10 展示会参加者	14,500 × 749名	162,000	
	(2,575名)	5,000,000	
II 主催団体補助金	2,000 × 81名	5,000,000	
I 日本分子生物学会本部		1,394,000	
III フ로그램販売		1,394,000	
1 フ로그램集	3,000 × 444冊	1,332,000	
2 オンライン要旨ID/PW (非会員)	10,000 × 5件	50,000	
3 オンライン要旨ID/PW (会員)	3,000 × 4件	12,000	
IV 助成金		1,737,520	
1 JST サテライトシンポジウム開催補助金	1式	557,820	
2 JST 研究領域ポスター宣伝費	1式	50,000	
3 ワークショップ・フォーラム冠費用	100,000 × 11件	1,100,000	
4 旅行会社協賛金	1式	29,700	
V 広告関係費		3,801,600	
1 フ로그램集広告	1式	2,084,400	4小間以上無料対象、割引含む
2 ホームページバナー広告	1式	820,800	
3 シンポジウム協賛プレセッション	32,400 × 9枠	291,600	
4 スクリーニング広告	1式	302,400	複数枠申込割引を含む
5 ポスターチャエースピンカップ広告	54,000 × 1枠	54,000	
6 ミニセミナー開催関係費	216,000 × 1枠	216,000	
7 スタンブラリー協賛	32,400 × 1枠	32,400	
VI 商業展示出展料		122,328,900	
1 Aタイプ	383,400 × 212小間	81,280,800	
2 Aタイプ (2次)	399,600 × 69小間	27,572,400	
3 Bタイプ	129,600 × 15小間	1,944,000	
4 Bタイプ (2次)	151,200 × 6小間	907,200	
5 ACタイプ	216,000 × 12小間	2,592,000	
6 出展キャンセル料	191,700 × 1式	191,700	
7 その他別小間	64,800 × 1式	64,800	
8 NBRP 特別展示	135,000 × 39小間	5,265,000	
9 NBDC 特別展示	135,000 × 13小間	1,755,000	
10 最先端技術コーナー	135,000 × 4小間	540,000	
11 面談ブース	216,000 × 1式	216,000	
VII バイオテクノロジーロジウムセミナー		16,491,600	
1 バイオテクノロジーロジウムセミナー共催費 (展示有り)	1,080,000 × 12枠	12,960,000	
2 バイオテクノロジーロジウムセミナー共催費 (展示無し)	1,296,000 × 1枠	1,296,000	
3 アカデミックタイフバイオテクノロジーセミナー共催費	756,000 × 1枠	756,000	非当代100 割分を含む
4 キャリアパス企画セミナー共催費	723,600 × 1枠	723,600	非当代200 割分を含む
5 特別企画共催費	756,000 × 1枠	756,000	非当代100 割分を含む
VIII 寄付金		5,500,000	
1 日本製薬団体連合会		5,500,000	
IX 雑収入		104,100	
1 会議室借用料		25,500	
2 託児料金	78,600 × 1式	78,600	
合 計		205,991,220	

●上記Ⅱ (本部補助金) を除く収入の合計 200,991,220 円⇒本体会計の事業費内訳「年会」経常収益計へ

【支出の部】

(単位：円)

項 目	金 額	備 考
I 事前準備関係費	36,491,395	
1 旅費・交通費	278,318	
2 庁費	36,213,077	
(1) 印刷費・制作費	24,594,928	
(2) 通信・運搬費	2,840,265	
(3) 会合費・旅費	64,251	
(4) 事務費	8,713,633	
II 当日運営関係費	151,112,421	
1 人件費	9,624,759	
2 旅費・交通費	1,972,053	
3 会場関係費	47,972,390	
4 機材・備品費	18,312,026	
5 看板装飾費	13,961,160	
6 展示関係費	23,565,872	
7 招請関係費	9,768,480	
8 会合関係費	1,397,151	
9 業務委託費	22,538,530	
III 事後処理費	1,321,810	
1 会議費	139,530	
2 会計監本費	580,050	
3 税理・会計事務経費	602,230	
IV 残額 (本体会計への精算)	17,065,594	
合 計	205,991,220	

●上記支出Ⅰ～Ⅲの合算 188,925,626 円⇒本体会計の事業費内訳「年会」経常費用の「その他経費計」へ

監査報告書

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
理事長 阿形 清和 殿

令和1年11月5日
特定非営利活動法人 日本分子生物学会

監事 田中 泰則 

令和1年11月5日
特定非営利活動法人 日本分子生物学会

監事 小安重夫 

私たちは、日本分子生物学会の令和1年度における財産並びに収支の状況について監査を行った。帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて計算書類の正確性を検討した結果、計算書類は、財産並びに収支の状況を正しく示していると認める。

以上

独立監査人の監査報告書

令和1年10月28日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
理事長 阿形 清和 殿

宮城公認会計士事務所

公認会計士 宮城 秀典 

私は、特定非営利活動法人 日本分子生物学会 の平成30年10月1日から令和1年9月30日までの令和1年度の計算書類、すなわち、活動計算書、貸借対照表及び財産目録並びに平成30年10月1日から令和1年9月30日までの令和1年度の富澤基金 会計報告、すなわち、富澤基金 決算報告書、貸借対照表及び財産目録について監査を行った。この計算書類及び会計報告の作成責任は理事者にあり、私の責任は独立の立場から計算書類及び会計報告に対する意見を表明することにある。

私は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、私に計算書類及び会計報告に重要な虚偽の表示がないかどうかの合理的な保証を得ることを求めている。監査は、試査を基礎として行われ、理事者が採用した会計方針及びその適用方法並びに理事者によって行われた見積もりの評価も含め全体としての計算書類及び会計報告の表示を検討することを含んでいる。私は、監査の結果として意見表明のための合理的な基礎を得たと判断している。

私は、上記の計算書類及び会計報告が、我が国において一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して、特定非営利活動法人 日本分子生物学会 の令和1年度の収支、正味財産増減の状況及び同年度末日現在の財政状態並びに 富澤基金 の令和1年度の収支及び同年度末日現在の財政状態をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 と私との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

令和2年度（2020年度）活動予算書

令和2年度（2020年度）活動予算書

2019年10月1日から2020年9月30日まで

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	金 額		
I 経常収益			
1 受取入会金			
正会員受取入会金	500,000		
学生会員受取入会金	1,300,000	1,800,000	
2 受取会費			
正会員受取会費	53,000,000		
学生会員受取会費	9,000,000		
シニア会員受取会費	200,000		
次世代教育会員受取会費	100,000		
賛助会員受取会費	960,000	63,260,000	
3 受取寄付金	5,000,000	5,000,000	
4 受取助成金	1,250,000	1,250,000	
5 事業収入			
(1)学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業	189,990,000		
(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業	16,000,000		
(3)その他目的を達成するために必要な事業	0	205,990,000	
6 その他収益			
受取利息	10,000		
雑収入	100,000	110,000	
経常収益計			277,410,000
II 経常費用			
1 事業費			
(1)人件費			
給与手当	11,750,000		
法定福利費	1,910,000		
福利厚生費	40,000		
人件費計	13,700,000		
(2)その他経費			
業務委託費	97,050,000		
編集業務費	3,500,000		
印刷費	19,700,000		
通信運搬費	7,150,000		
旅費交通費	25,370,000		
会議費	1,450,000		
支払手数料	1,440,000		
消耗品費	2,660,000		
会場費	38,530,000		
機材費	19,800,000		
諸会費	60,000		
広報費	10,000		
補助金	5,000,000		
雑費	1,000,000		
租税公課	750,000		
その他経費計	223,470,000		
事業費計		237,170,000	
2 管理費			
(1)人件費			
給与手当	17,150,000		
法定福利費	2,800,000		
福利厚生費	40,000		
人件費計	19,990,000		
(2)その他経費			
事務所家賃	4,100,000		
業務委託費	2,000,000		
会員管理システム運用管理費	3,000,000		
印刷費	1,600,000		
通信運搬費	3,500,000		
旅費交通費	2,300,000		
会議費	500,000		
支払手数料	1,500,000		
消耗品費	1,200,000		
雑費	800,000		
租税公課	2,800,000		
特定預金支出（退職給付引当金）	1,840,000		
その他経費計	25,140,000		
管理費計		45,130,000	
経常費用計			282,300,000
当期正味財産増加額			△ 4,890,000
前期繰越正味財産額			212,000,000
次期繰越正味財産額			207,110,000

(単位：円)

令和2年度(2020年度)活動予算事業費の内訳

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
(単位:円)

科 目	(1)学術集会、研究発表会、講演会の開催等 による分子生物学に関する学術研究事業				(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業				(3)その他目的を達成するために必要な事業				合計	
	第42回年会	42回年会 開催補助・ 追加支出 (国際化支援)	年会その他	国際会議支援	会報発行	Genes to Cells 編集	Genes to Cells オンライン	ホームページ 関係	社会貢献・ 教育活動	各種委員会 (キャリアパス・男女共同 参画・その他)	事業費その他 (研究倫理・ その他)	事業費計	管理部門	合計
I 経常収益														
1. 受取入会金	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,800,000	1,800,000
2. 受取会費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	63,260,000	63,260,000
3. 受取寄付金	5,000,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5,000,000	0	5,000,000
4. 受取助成金	1,250,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,250,000	0	1,250,000
5. 事業収入												0	0	0
(1)学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業	189,990,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	189,990,000	0	189,990,000
(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業	0	0	0	0	0	16,000,000	0	0	0	0	0	16,000,000	0	16,000,000
(3)その他目的を達成するために必要な事業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
事業収入計	189,990,000	0	0	0	0	16,000,000	0	0	0	0	0	205,990,000	0	205,990,000
6. その他収益	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	110,000	110,000
経常収益計	196,240,000	0	0	0	0	16,000,000	0	0	0	0	0	212,240,000	65,170,000	277,410,000
II 経常費用														
(1) 人件費														
給与手当	3,500,000	0	0	0	800,000	800,000	0	1,300,000	1,500,000	3,500,000	350,000	11,750,000	17,150,000	28,900,000
法定福利費	560,000	0	0	0	130,000	140,000	0	220,000	240,000	570,000	50,000	1,910,000	2,800,000	4,710,000
福利厚生費	10,000	0	0	0	0	0	0	10,000	10,000	10,000	0	40,000	40,000	80,000
人件費計	4,070,000	0	0	0	930,000	940,000	0	1,530,000	1,750,000	4,080,000	400,000	13,700,000	19,990,000	33,690,000
(2) その他経費														
事務所家賃	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4,100,000	4,100,000
業務委託費	89,000,000	0	350,000	0	0	0	5,000,000	2,000,000	0	550,000	150,000	97,060,000	2,000,000	99,050,000
編集業務費	0	0	0	0	0	3,500,000	0	0	0	0	0	3,500,000	0	3,500,000
会員管理システム運用管理費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3,000,000	3,000,000
印刷費	15,000,000	0	0	0	3,800,000	0	0	0	50,000	850,000	0	19,700,000	1,600,000	21,300,000
通信運搬費	3,000,000	0	0	0	4,100,000	0	0	0	50,000	0	0	7,150,000	3,500,000	10,650,000
旅費交通費(シンポ・ワーク招請関係費)	19,100,000	5,400,000	70,000	0	0	0	0	0	200,000	500,000	100,000	25,370,000	2,300,000	27,670,000
会議費	500,000	0	100,000	0	0	0	0	0	0	650,000	200,000	1,450,000	500,000	1,950,000
支払手数料	1,400,000	0	0	0	0	0	0	0	0	10,000	30,000	1,440,000	1,500,000	2,940,000
消耗品費	2,400,000	0	0	0	250,000	0	0	0	10,000	0	0	2,660,000	1,200,000	3,860,000
会場費	37,500,000	0	1,030,000	0	0	0	0	0	0	0	0	38,530,000	0	38,530,000
機材費	19,800,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	19,800,000	0	19,800,000
諸会費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10,000	50,000	60,000	0	60,000
広報費	0	0	0	0	0	0	0	0	10,000	0	0	10,000	0	10,000
補助金	0	0	0	5,000,000	0	0	0	0	0	0	0	5,000,000	0	5,000,000
雑費	950,000	0	0	0	0	0	0	0	50,000	0	0	1,000,000	800,000	1,800,000
租税公課	0	0	0	0	0	750,000	0	0	0	0	0	750,000	2,800,000	3,550,000
特定預金支出(退職給付引当金)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,840,000	1,840,000
その他経費計	188,650,000	5,400,000	1,550,000	5,000,000	8,150,000	4,250,000	5,000,000	2,000,000	370,000	2,570,000	530,000	223,470,000	25,140,000	248,610,000
経常費用計	192,720,000	5,400,000	1,550,000	5,000,000	9,080,000	5,190,000	5,000,000	3,530,000	2,120,000	6,650,000	930,000	237,170,000	45,130,000	282,300,000
増減額	3,520,000	-5,400,000	-1,550,000	-5,000,000	-9,080,000	10,810,000	-5,000,000	-3,530,000	-2,120,000	-6,650,000	-930,000	-24,630,000	20,040,000	-4,890,000

※「42回年会・国際化支援」540万円
追加の開催補助500万円、Foreign Travel Award 採択40万円(8名分)として。

学術賞、研究助成の本学会推薦について

本学会に推薦依頼あるいは案内のある学術賞、研究助成は、本号に一覧として掲載しております。そのうち、応募にあたり学会等の推薦が必要なものについての本学会からの推薦は、賞推薦委員会または研究助成選考委員会の審査に従って行います。応募希望の方は、直接助成先に問い合わせ、申請書類を各自お取寄せのうえ、ふるってご応募下さい。

本学会への推薦依頼の手続きは次の通りです。

1. 提出物

- 1) 本申請に必要な書類（オリジナルおよび募集要項に記載されている部数のコピー）
- 2) 本学会の選考委員用および学会用控に、上記申請書類のコピー計6部
- 3) 申込受付確認のための返信封筒（返信用の宛名を記入しておいて下さい）
- 4) 論文（別刷は各種財団等応募先の必要部数をご用意下さい。委員会用の論文は不要です）

2. 提出先

※賞推薦についての送付先

日本分子生物学会・賞推薦委員長 正井 久雄
〒102-0072 千代田区飯田橋 2-11-5
人材開発ビル 4階
日本分子生物学会事務局気付

※研究助成についての送付先

日本分子生物学会・研究助成選考委員長 吉森 保
〒102-0072 千代田区飯田橋 2-11-5
人材開発ビル 4階
日本分子生物学会事務局気付

3. 提出期限

財団等の締切りの1カ月前まで。提出期限後に受取った場合や、提出書類が不備な場合は、選考の対象にならないことがあります。推薦手続きのことでご不明な点がございましたら、学会事務局までお問い合わせ下さい。

※研究助成（学会推薦）に関する留意事項

学会推薦した会員が財団等の研究助成対象者となった場合には、その研究成果を将来、学会誌「Genes to Cells」に論文あるいは総説として発表して頂くように要請いたします。

応募に際しては、その旨をご了解くださるようお願いいたします。

※各種学術賞（学会推薦）に関する留意事項

●委員会の内規により、外部財団等の各種学術賞への推薦は、原則として一人につき年度あたり1件となっておりますので、ご了解ください。

（本学会の事業年度は10月1日から翌年9月30日までです）

●重複申請があった場合、すでにある賞等の推薦が決定されている候補者は、それ以降審査する他の賞等の推薦候補者として原則的に考慮いたしません。応募に際し、ご留意くださるようお願いいたします。

学術賞、研究助成一覧

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
第 51 回三菱財団 自然科学研究助成	(公財)三菱財団 〒 100-0005 千代田区丸の内 2-3-1 TEL : (03) 3214-5754	総額 3 億 6,000 万円	2020 年 2 月 5 日	1 件当たり 2,000 万円まで	自然科学のすべての分野にかかわる独創的かつ先駆的研究を支援。2019 年および 2020 年度は 50 周年記念特別助成として「若手助成」を実施。
山田科学振興財団 2020 年度研究援助	(公財)山田科学振興財団 〒 544-8666 大阪市生野区巽西 1-8-1 TEL : (06) 6758-3745	15 件程度 (本学会の 推薦枠は 5 件)	2020 年 2 月 28 日	1 件当たり 100 ～ 500 万円、 総額 3,000 万円	自然科学の基礎的研究に対しての研究費援助。 「推薦書は山田財団 HP より ダウンロード http://www.yamadazaidan.jp/ 」
山田科学振興財団 国際学術集会開催助成 (2022 年開催)		総額 800 万円以内	2019 年 4 月 1 日～ 2020 年 2 月 28 日 (募集期間)	総額 800 万円以内	以下の要件を満たす学術集会を山田コンファレンスもしくは山田シンポジウムと称し、これらの開催を援助する。 ①基礎科学の適切なテーマについて、国際的視野で最高レベルの研究を総括する。 ②研究者の世代間の対話によって、若い世代の研究の発展の基礎を構築する。 ③異分野間の交流を図り、cross-disciplinary な討論を通じて新しい発展を模索する。 詳細 山田財団 HP 参照。
第 36 回国際生物学賞	国際生物学賞委員会 〒 102-0083 千代田区麹町 5-3-1 日本学術振興会内 TEL : (03) 3263-1724	1 件 (1 件)	2020 年 4 月 10 日	賞状、賞牌、 1,000 万円	生物学の研究において世界的に優れた業績を挙げ、世界の学術進歩に大きな貢献をした研究者。授賞分野は、国際生物学賞委員会が毎年決定する。授賞分野は、国際生物学賞委員会が毎年決定する。第 36 回の授賞分野は「環境応答の生物学 (Biology of Environmental Responses)」。
2020 年度 持田記念学術賞	(公財)持田記念医学薬学振興財団 〒 160-0003 新宿区四谷本塩町 3-1 四谷ワイズビル TEL : (03) 3357-1282	2 件以内 (1 件)	2020 年 * 5 月 20 日	1 件 1,000 万円	学術賞は次の 6 項目の研究分野で、研究の進歩発展のため顕著な功績のあった研究者に贈呈。 (1)バイオ技術を基盤とする先端医療に関する研究
2020 年度 研究助成		総額 3 億 4,500 万円 115 件	2020 年 * 5 月 8 日	1 件 300 万円	(2)バイオ技術を基盤とするゲノム機能 / 病態解析に関する研究 (3)免疫 / アレルギー / 炎症の治療ならびに制御に関する研究
2020 年度国内または 海外留学補助金		総額 1,000 万円 20 件	2020 年 * 5 月 15 日	1 件 50 万円	(4)循環器 / 血液疾患の病態解析 / 治療制御に関する研究 (5)創薬・創剤の基盤に関する研究 (6)創薬の臨床応用に関する研究
2021 年度笹川科学 研究助成	(公財)日本科学協会 〒 107-0052 港区赤坂 1-2-2 日本財団ビル TEL : (03) 6229-5365	生物系で 144 件 (2019 年度実績)	募集期間 2020 年 * 9 月 17 日～ 10 月 15 日	1 件当たり 100 万 円まで	人文・社会科学および自然科学(医学を除く)の独創性・萌芽性をもつ研究に関するもの。4 月 1 日現在、35 歳以下の若手研究者へ助成。
上 原 賞	(公財)上原記念生命科学財団 〒 171-0033 豊島区高田 3-26-3 TEL : (03) 3985-3500	2 件以内 (1 件)	2020 年 * 9 月 3 日	金牌、 3,000 万円	生命科学の東洋医学、体力医学、社会医学、栄養学、薬学一般および基礎医学、臨床医学で顕著な業績を挙げ、引き続き活躍中の研究者。
第 37 回井上学術賞	(公財)井上科学振興財団 〒 150-0036 渋谷区南平台町 15-15-601 TEL : (03) 3477-2738	5 件以内 (2 件)	2020 年 * 9 月 18 日	賞状、金メダル、 200 万円	自然科学の基礎的研究で特に顕著な業績を挙げた者 (ただし締切日現在、50 歳未満の者)。
第 37 回井上研究奨励賞		40 件	2020 年 * 9 月 18 日	賞状及び銅メダル、 50 万円	過去 3 年間に、理学・工学・医学・薬学・農学等の自然科学の基礎的研究において、新しい領域を開拓する可能性のある優れた博士論文を提出し博士の学位を取得した研究者で、37 歳未満の者。
第 13 回井上リサーチ アワード		4 名以内 (うち 1 名以上 女性研究者)	2020 年 * 7 月 31 日	1 人当たり 500 万円	開拓的發展を目指す若手研究者の独創性と自立を支援する目的で、研究を助成。研究期間は 2 年。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
第 29 回木原記念財団 学術賞	(公財)木原記念横浜生命科学 振興財団 〒 230-0045 横浜市鶴見区末広町 1-6 TEL : (045) 502-4810	1 件 (1 件)	2020 年 * 9 月 30 日	賞状、 200 万円	生命科学の分野で優れた独創的 研究を行っている国内の研究者 であり、今後のさらなる発展が 大きく期待できる者。原則とし て締切日現在 50 歳以下を対象と する。
第 4 回バイオ インダストリー大賞	(一財)バイオインダストリー協会 〒 104-0032 中央区八丁堀 2-26-9 グランデビル 8F TEL : (03) 5541-2731	1 件	2020 年 4 月 20 日	賞状、賞牌、 副賞 300 万円	バイオサイエンス、バイオテク ノロジーおよびバイオインダス トリーの分野の発展に大きく貢 献した、または今後の発展に大 きく貢献すると期待される業績 を上げた個人、少人数のグルー プまたは組織に授与される。
第 4 回バイオ インダストリー奨励賞		10 件以内	2020 年 4 月 20 日	賞状および 副賞 30 万円	バイオサイエンス、バイオテク ノロジーに関連する応用を指向 した研究で、 ④医薬・ヘルスケア ⑤食品・第一次産業 ⑥化学・材料・環境・エネルギー などの分野で産業を生み出す研 究であり、これらの分野に携わ る有望な若手研究者を対象とす る。年齢 45 歳未満。
住友財団 2020 年度 基礎科学研究助成	(公財)住友財団 〒 105-0012 港区芝大門 1-12-6 住友芝大門ビル 2 号館 TEL : (03) 5473-0161	総額 1 億 5,000 万円 90 件程度	2020 年 * 6 月 30 日 (データ送信の 締切日: 6 月 7 日)	1 件当たり 500 万 円まで	理学(数学、物理学、化学、生物学) の各分野及びこれらの複数にま たがる分野の基礎研究で萌芽的 なもの。若手研究者(個人また はグループ)を対象とする。
第 62 回藤原賞	(公財)藤原科学財団 〒 104-0061 中央区銀座 3-7-12 TEL : (03) 3561-7736	2 件 (1 件)	2020 年 * 12 月 11 日	副賞 1,000 万円	推薦の対象は自然科学分野に属 するもの。わが国に国籍を有し、 科学技術の発展に卓越した貢献 をした者。
科学技術分野の 文部科学大臣表彰 科学技術賞および 若手科学者賞	文部科学省 研究振興局振興企画課奨励室 〒 100-8959 千代田区霞が関 3-2-2 TEL : (03) 6734-4071	科学技術賞88 件(年)のうち、 研究部門は 43 件 (31 年度) 若手科学者賞 は 100 名程度 (学会推薦枠は定 まっていないが推 薦は若干名まで)	2020 年 * 7 月 25 日	表彰状及び副賞	我が国の科学技術の発展等に寄 与する可能性の高い独創的な研 究又は発明を行った個人又はグ ループを表彰。 萌芽的な研究、独創的視点に立 った研究等、高度な研究開発能 力を示す顕著な研究業績を挙げ た 40 歳未満の若手研究個人。
2020 年度島津賞	(公財)島津科学技術振興財団 〒 604-8445 京都市中京区 西ノ京徳大寺町 1 TEL : (075) 823-3240	1 件 (推薦件数に制 限なし)	2020 年 * 7 月 31 日	賞状、賞牌、 副賞 500 万円	科学技術、主として科学計測に 係る領域で、基礎的研究および 応用・実用化研究において、著 しい成果をあげた功労者を対象 とする。
2020 年度島津奨励賞		3 件 (推薦件数に制 限なし)	2020 年 * 7 月 31 日	賞状、トロフィー、 副賞 100 万円	わが国の科学技術振興を目的と して、科学技術、主として科学 計測に係る領域で、基礎的研究 および応用・実用化研究におい て独創的成果をあげ、かつその 研究の発展が期待される研究者 を表彰する。対象者は 45 歳以下。
島津科学技術振興 財団研究開発助成		総額 2,300 万円	2020 年 * 7 月 31 日	1 件 100 万円	科学技術、主として科学計測に 係る領域で、基礎的研究を対象 とする。国内の研究機関に所属す る 45 歳以下の新進気鋭の研究者。 国籍不問。
東レ科学技術賞	(公財)東レ科学振興会 〒 103-0021 中央区日本橋本石町 3-3-16 (日本橋室町ビル) TEL : (03) 6262-1655	2 件以内 (2 件)	2020 年 * 10 月 9 日	1 件につき 賞状、金メダル、 500 万円	理学・工学・農学・薬学・医学(除 臨床医学)の分野で、学術上の 業績顕著な者、学術上重要な発 見をした者、効果が大きい重要 な発明をした者、技術上の重要 問題を解決し貢献が大きい者。
東レ科学技術研究助成		総額 1 億 3,000 万円 10 件程度 (2 件)	2020 年 * 10 月 9 日	特に定めず最大 3,000 万円程度 まで	今後の研究の成果が科学技術の 進歩・発展に貢献するところが 大きいと考えられる、独創的、 萌芽的な研究を活発に行ってい る若手研究者(原則として 45 歳 以下)。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
ノバルティス研究 奨励金	(公財)ノバルティス科学振興財団 〒106-6333 港区虎ノ門 1-23-1 虎ノ門ヒルズ森タワー 29F TEL: (03) 6899-2100	約 35 件 指定機関から の推薦必要	2020 年 * 9 月 11 日	1 件 100 万円	生物・生命科学、関連する化学 および情報科学の領域における 創造的な研究に対して助成。
第 52 回内藤記念科学 振興賞	(公財)内藤記念科学振興財団 〒113-0033 文京区本郷 3-42-6 NKD ビル 8F TEL: (03) 3813-3861	1 件 (1 件)	2020 年 * 9 月 24 日	金メダル、 1000 万円	人類の健康の増進に寄与する自然 科学の基礎的研究において、 独創的テーマに取り組み、その 進歩発展に顕著な功績を挙げた 研究者。
第 52 回海外学者 招へい助成金		前期・後期 各 10 件以内 (前期・後期 各々 1 件)	2020 年 * 5 月 27 日・ 9 月 24 日	1 件 20 ～ 80 万円 まで (エリアによる)	同上のテーマに取り組み、国際 的に高い評価を得ている外国の 研究者を招へいする受入れ責任 者(当該学術集会の組織委員長) に助成。
ブレインサイエンス 財団研究助成		15 件以内	2020 年 * 10 月 11 日	1 件 80 ～ 100 万円	脳科学の広い分野における独創 的な研究計画への助成。
塚原伸見記念賞	(公財)ブレインサイエンス振興 財団 〒104-0028 中央区八重洲 2-6-20 TEL: (03) 3273-2565	1 件		賞牌ならびに 副賞 100 万円	生命科学の分野において優れた 独創的研究を行っている 50 歳以 下の研究者。
海外派遣研究助成		若干件	2021 年 * 1 月 10 日	1 件 30 万円まで	我が国における脳科学の研究の促 進を図るため、国際学会、シンポ ジウム等への参加、あるいは短期 間の研究者の海外派遣を助成。
海外研究者招聘助成		若干件		1 件 30 万円まで	脳科学研究分野において独創的 テーマに意欲的に取り組んでい る外国人研究者の短期間の招聘 を助成。
2020 年 コスモス国際賞	(公財)国際花と緑の博覧会記念 協会 〒538-0036 大阪市鶴見区緑地公園 2-136 TEL: (06) 6915-4513	1 件 (1 件)	2020 年 * 4 月 13 日	賞状、メダル、 副賞 4,000 万円	花と緑に象徴されるすべての生 命現象に関し、地球的視点にお ける生命体相互の関係性、統合 成の本質を解明しようとする研 究や業績を対象とする。
2021 年度研究助成	(公財)長瀬科学技術振興財団 〒550-8668 大阪市西区新町 1-1-17 TEL: (06) 6535-2117	20 件程度	2020 年 * 11 月 2 日	1 件 250 万円	有機化学(材料化学を含む)及 び生化学並びに関連分野にお ける研究が助成対象。
第 17 回日本学術 振興会賞	(独)日本学術振興会 研究者養成課 「日本学術振興会賞」担当 〒102-0083 千代田区麹町 5-3-1 TEL: (03) 3263-0912	25 件程度 (機関長推薦 扱いとして 学会推薦枠 も若干件あ り)	2020 年 * 4 月中旬 (受付日)	賞状、賞碑、 研究奨励金 110 万円	人文、社会科学及び自然科学に わたる全分野が対象。博士の学 位を取得しており、国内外の学 術誌等に公表された論文、著書、 その他の研究業績により学術上 特に優れた成果を上げたと認め られた研究者(45 歳未満)。
第 11 回日本学術 振興会育志賞		16 件程度 (1 件)	2020 年 * 6 月中旬 (受付日)	賞状、賞碑、 学業奨励金 110 万円	我が国の学術研究の発展に寄与 することが期待される優秀な大 学院博士課程の学生を顕彰(34 歳未満)。
(一財)材料科学技術 振興財団 山崎貞一賞	(一財)材料科学技術振興財団 〒157-0067 世田谷区喜多見 1-18-6 TEL: (03) 3415-2200	各分野 1 件	2020 年 * 4 月 30 日	賞状、金メダル、 300 万円	授賞対象は、「材料」、「半導体及 び半導体装置」、「計測評価」、「バ イオサイエンス・バイオテクノ ロジー」の 4 分野からなり、う ち 2 分野が毎年、授賞対象とさ れる。論文の発表、特許の取得、 方法・技術の開発等を通じて、 実用化につながる優れた業績を あげている者。
令和元年度研究助成		25 ～ 35 件 総額 5,000 万円	2020 年 * 7 月 13 日	助成金総額 約 5,000 万円	光科学に関係する研究に対して 助成。対象課題有り。
令和元年度 晝馬輝夫 光科学賞	(公財)光科学技術研究振興財団 〒430-0926 浜松市中区砂山町 325-6 TEL: (053) 454-0598	1 件	2020 年 * 6 月 30 日	副賞 500 万円	日本の光科学の基礎研究や光科 学技術の発展に貢献する研究に おいて、独自に独創的な研究業 績を挙げた研究者個人。(応募締 切時点で 45 歳未満) 外国籍の場合は、日本の大学等 公的機関に 5 年以上在籍し、そ の間に対象となる研究成果の中 核を形成された方。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
2020 年度朝日賞	朝日新聞社 CSR 推進部 「朝日賞」事務局 〒 104-8011 中央区築地 5-3-2 TEL：(03) 5540-7453	ここ最近 は 4～5 件 (1 件)	2020 年 * 8 月 26 日	正賞(ブロンズ像) と副賞 500 万円	学術、芸術などの分野で傑出した業績をあげ、わが国の文化、社会の発展、向上に多大の貢献をされた個人または団体に贈られる。
第 32 回加藤記念研究助成	(公財)加藤記念バイオサイエンス研究振興財団 〒 194-8533 町田市旭町 3-6-6 TEL：(042) 725-2576	総額 5,000 万円	2020 年 * 9 月 30 日	1 件 200 万円	バイオサイエンスの基礎分野において、独創的かつ先駆的研究をめざす国内の若手研究者(40 歳以下)を支援する。
第 10 回(2021 年度)三島海雲学術賞	(公財)三島海雲記念財団 〒 150-0012 渋谷区広尾 1-6-10 ジラフファビル TEL：(03) 5422-9898	自然科学部門 で 2 件以内 (2 件)	2020 年 * 9 月 30 日	賞状、 副賞 200 万円	自然科学部門は、食の科学に関する研究が対象。国内外の学術誌等に公表された論文、著書、その他の研究業績により独創的で発展性のある顕著な業績を挙げている 45 歳未満の若手研究者。
2020 年度三島海雲学術研究奨励金(研究助成)		全部門計 60 件程度	2020 年 1 月 10 日 ～ 2 月 28 日	個人研究奨励金は 1 件 100 万円	食の科学に関する学術研究。若手研究者および女性研究者の積極的応募を期待する。
第 8 回ヤマト科学賞	ヤマト科学(株)内 ヤマト科学賞選考委員会事務局 〒 135-0047 江東区富岡 2-11-6 HASEMAN ビル TEL：(03) 5639-7070	1 件	2020 年 * 11 月 30 日	賞状、賞牌、 副賞 100 万円	独創性、創造性に富む、気鋭の研究者を顕彰。対象分野はライフサイエンス、マテリアルサイエンス、インフォメーションサイエンス等の自然科学、技術分野およびその融合領域分野。
2020 年度小野医学研究助成	(公財) 小野医学研究財団 〒 541-8526 大阪市中央区道修町 2-1-5 TEL：(06) 6232-1960	12 件以内	2020 年 * 6 月 1 日 ～ 7 月 31 日 (受付日)	1 件 200 万円	助成テーマは脂質代謝異常に伴う疾患の病態生理に関する研究(2019 年度)。①基礎医学②臨床医学③疫学④薬学⑤その他の領域研究奨励助成は満 40 歳以下に限る。
2020 年度小野医学研究奨励助成		16 件以内		1 件 100 万円	
第 4 回早石修記念賞		1 件 (1 件)	2020 年 * 8 月 31 日	正賞(楯)、 副賞 500 万円	
第 25 回慶應医学賞	慶應義塾医学振興基金事務局 〒 160-8582 新宿区信濃町 35 TEL：(03) 5363-3609	2 件[国内 1 名、 国外 1 名] (若干名)	2020 年 * 3 月 6 日	メダル、 副賞 1,000 万円	基礎医学・臨床医学ならびに医学に密接に関連した生命科学の諸領域で活躍されている方が対象。
大隅基礎科学創成財団第 4 期研究助成	(公財) 大隅基礎科学創成財団事務局 〒 226-8503 横浜市緑区長津田町 4259 S2-16 TEL：(045) 459-6975	基礎科学(一般)で 6～10 件	2020 年 * 6 月 30 日	1 件 1,200 万円まで	細胞・組織・個体の新しい生理現象の発見とその分子機構の解明をテーマとする基礎研究を支援。
		基礎科学(酵母)で 3 件程度		1 件 500 万円まで	新しい生理現象の発見やその分子機構の解明等、人類と深い関わりのある酵母を対象としたこの生物種ならではの基礎研究をテーマとして支援。
第 2 回小林賞	(公財) 小林財団東京事務所 〒 106-0032 港区六本木 1-7-27 全特六本木ビル East TEL：(03) 5575-7525	1 件 (1 件)	2020 年 * 9 月 25 日	賞状、賞牌、 副賞 3,000 万円	医学、薬学、農学、工学、理学などの生命科学に関する分野において、独創的な研究を行い、顕著な成果を挙げ、さらにその後も当該研究分野の発展が期待される国内の研究者を対象とする。
2020 年度地神芳文記念研究助成金	理化学研究所 環境資源科学研究センター内(特非)酵母細胞研究会 〒 351-0198 和光市広沢 2-1 TEL：(048) 462-1335	2～3 件	2020 年 4 月 17 日	1 件 50 万円以内	酵母あるいは糖鎖に関する研究を助成。基礎あるいは応用の別を問わない。39 歳以下を対象者とする。

●件数の()内は、応募に当たり学協会等からの推薦が必要な場合、本学会の推薦枠を示しています。

*は、本年度の案内を受取っておらず、昨年締切日を参考に示してあります。

締切日を過ぎているものは、本年度応募は終了していますが、参考資料として掲載しました。

各種学術集会、シンポジウム、講演会等のお知らせ

○千里ライフサイエンスセミナー P1

「新しい医薬品概念が変える医療」

日 時：2020年5月28日(木) 10:30～16:50

場 所：千里ライフサイエンスセンタービル5階
山村雄一記念ライフホール

趣 旨：

医薬品の形は大きく変化してきています。以前は低分子化合物が医薬品の形として主流でしたが、近年は身体の構成成分である蛋白質もしくは核酸が新しい薬の形として受け入れられています。特に異物に対する生体防御として働く抗体が医薬品の形を大きく変革させ、抗体医薬品として医薬品の主要な形として市場をリードしています。特に抗がん薬、抗自己免疫疾患薬にこの傾向があります。わが国で発明されたアクテムラ、オプジーボなどもこの抗体医薬品です。しかしながら、現在の新しい医薬品の形である抗体医薬品や核酸医薬品の基本概念は日本で発明されたものではありません。そのために現在医薬品の貿易収支は大きな赤字になっています。今後、病気で苦しむ患者さんを救うために世界をリードできる医薬品のさらなる新しい形が求められています。本セミナーでは、日本で研究されている新しい医薬品の概念を紹介していただき、患者さんを救うために医療を変える医薬品の形について議論します。

プログラム：

1. 概論：医療技術開発の動向と将来展望
辻 真博（科学技術振興機構 研究開発戦略セン

ター フェロー）

2. 血液がんに対する新規 CART 細胞療法の開発
保仙 直毅（大阪大学大学院医学系研究科 教授）
3. わが国におけるゲノム編集細胞創薬の展望
一戸 辰夫（広島大学 原爆放射線医科学研究所 教授）
4. 腸内細菌株を用いた新規治療法の開発
本田 賢也（慶應義塾大学医学部 教授）
5. バクテリオファージを用いた疾患治療法の開発
氣賀 恒太郎（自治医科大学 講師）
6. 創薬のための抗体工学技術開発
小西 博子（中外製薬株式会社 部長）
7. ヘルスケア業界の抱える課題と新たなフェーズへの挑戦
小林 博幸（塩野義製薬株式会社 部長）

コーディネーター：

坂田 恒昭（大阪大学産学共創・渉外本部 特任教授）

参 加 費：無料

申込要領：氏名、勤務先、所属、〒所在地、電話番号、Eメールアドレスを明記の上、Eメールで下記宛お申し込み下さい。件名は「千里ライフサイエンスセミナー P1」として下さい。

申 込 先：千里ライフサイエンスセミナー P1 係

E-mail：sng-2019@senri-life.or.jp

URL：http://www.senri-life.or.jp/seminar-1.html

Tel：06-6873-2001 FAX：06-6873-2002

第21期役員・幹事・各委員会名簿

理事長

(任期：2019年1月1日～2020年12月31日)

阿形 清和 (基生研)

副理事長

佐々木裕之 (九大・生医研)、塩見美喜子 (東大・理)

理事

荒木 弘之 (遺伝研)	五十嵐和彦 (東北大・医)
石川 冬木 (京大・生命)	一條 秀憲 (東大・薬)
稲田 利文 (東北大・薬)	上田 泰己 (東大・医)
上村 匡 (京大・生命)	大隅 典子 (東北大・医)
菊池 章 (阪大・医)	木村 宏 (東工大・科学技術創成研究院)
倉永英里奈 (東北大・生命)	胡桃坂仁志 (東大・定量研)
後藤由季子 (東大・薬)	小原 雄治 (遺伝研)
近藤 滋 (阪大・生命機能)	斎藤 通紀 (京大・医)
佐谷 秀行 (慶應大・医)	中島 欽一 (九大・医)
中山 敬一 (九大・生医研)	鍋島 陽一 (FBRI・先端医療研究センター)
西田 栄介 (理研・BDR)	原 英二 (阪大・微研)
正井 久雄 (都医学研)	三浦 正幸 (東大・薬)
本橋ほづみ (東北大・加齢研)	山本 卓 (広島大・統合生命)
吉森 保 (阪大・生命機能 / 医)	

監事

小安 重夫 (理研・IMS)、町田 泰則 (名大・理)

幹事

庶務幹事	稲田 利文 (東北大・薬)、木村 宏 (東工大・科学技術創成研究院)
会計幹事	三浦 正幸 (東大・薬)
編集幹事	上村 匡 (京大・生命)
広報幹事	深川 竜郎 (阪大・生命機能)
国際化担当幹事	林 茂生 (理研・BDR)

第21期執行部

阿形理事長、佐々木副理事長、塩見副理事長、稲田庶務幹事、木村庶務幹事、三浦会計幹事、上村編集幹事、深川広報幹事、林国際化担当幹事

Genes to Cells 編集長

西田栄介 (理研・BDR)

賞推薦委員会

正井久雄 (委員長)、後藤由季子、近藤 滋、中山敬一、原 英二

研究助成選考委員会

吉森 保 (委員長)、上田泰己、菊池 章、本橋ほづみ、山本 卓

国際会議支援・選考委員会

石川冬木 (委員長)、荒木弘之、五十嵐和彦、一條秀憲、佐谷秀行

キャリアパス委員会

胡桃坂仁志 (委員長)、木村 宏 (副委員長)、石谷 太、井関祥子、加納純子、
 夾生 (道下) 江利子、倉永英里奈、斎藤典子、鈴木淳史、花嶋かりな、林 克彦、
 山本 卓

研究倫理委員会

中島欽一 (委員長)、大隅典子、小原雄治、斎藤通紀、鍋島陽一

生命科学教育

胡桃坂仁志 (担当理事)、五島剛太 (委員)

「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子基金」 第3期 基金運営委員会 (任期：2018年1月1日～2020年12月31日)

小原雄治 (委員長)、林 茂生 (副委員長)、大杉美穂、黒田真也、
 後藤由季子、東山哲也、深川竜郎、阿形清和 (職指定)

日本分子生物学会 賛助会員一覧

(2020 年 2 月現在)

アサヒグループホールディングス株式会社
株式会社エー・イー企画
科研製薬株式会社 薬理部
コスモ・バイオ株式会社
株式会社 SeeDNA 法医学研究所
第一三共株式会社 モダリティ研究所
タカラバイオ株式会社 事業開発部
株式会社ダスキン 開発研究所
株式会社東海電子顕微鏡解析
東洋紡株式会社 ライフサイエンス事業部
株式会社トミー精工
ナカライテスク株式会社 開発企画部広報課
日本甜菜製糖株式会社 総合研究所第二グループ
日本たばこ産業株式会社 植物イノベーションセンター
浜松ホトニクス株式会社 システム営業部
富士レビオ株式会社 研究推進部バイオ研究グループ
フナコシ株式会社
三菱ケミカル株式会社
ヤマサ醤油株式会社 R & D 管理室
湧永製薬株式会社 湧永満之記念図書館
ワケンビーテック株式会社 学術部

(21 社、50 音順)

■第 43 回（2020 年）日本分子生物学会年会 公式サイト

URL: <https://www2.aeplan.co.jp/mbsj2020/>

■日本分子生物学会 Facebook 公式アカウント

URL: <https://www.facebook.com/mbsj1978/>

特定非営利活動法人

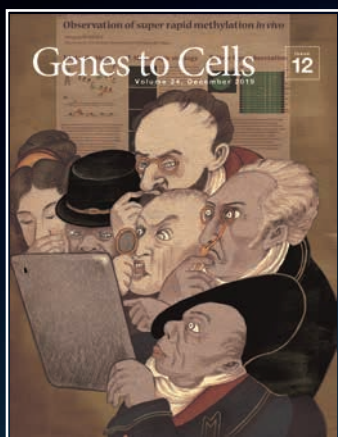
日本分子生物学会 事務局

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 2-11-5

人材開発ビル 4 階

TEL: 03-3556-9600 FAX: 03-3556-9611

E-mail: info@mbsj.jp



Genes to Cells

Published on behalf of the Molecular Biology Society of Japan

Edited by: Eisuke Nishida

Frequency: Monthly | Impact Factor 1.922

日本分子生物学会の学会誌Genes to Cellsは、分子生物学の優れた研究成果を掲載し、著者にとって有益な学術情報や先見性の高い最新の研究情報を提供しています。全世界14,000以上の機関で読まれており、年間300,000件以上のダウンロード数を誇ります。是非Genes to Cellsにご投稿ください。

Genes to Cells 投稿の利点

- わかりやすく便利なオンライン投稿システム
- カラー掲載料無料
- 出版までの過程をお知らせするAuthor Servicesをご利用いただけます
- 早期出版EarlyViewサービスにより、最新号への収載を待たずにオンラインで出版されます
- 出版後6ヵ月経過した全論文が無償公開となり、世界中からアクセス可能になります
- オープンアクセス希望者はオプションで『Online Open』（有料）を選択できます
- 総説は日本分子生物学会のサポートをうけ、出版と同時に無料公開されます

オンライン投稿はこちら <https://mc.manuscriptcentral.com/gtc>

2017年・2018年出版 引用数TOP論文 *2019年12月現在

MYB transcription factor gene involved in sex determination in *Asparagus officinalis* (Volume 22, Issue 1)

Murase, K; Shigenobu, S; Fujii, S; Ueda, K; Murata, T; Sakamoto, A; Wada, Y; Yamaguchi, K; Osakabe, Y; Osakabe, K; Kanno, A; Ozaki, Y; Takayama, S

Novel tRNA function in amino acid sensing of yeast Tor complex1 (Volume 22, Issue 2)

Kamada, Y

Severe damage to the placental fetal capillary network causes mid- to late fetal lethality and reduction in placental size in

Peg11/Rtl1 KO mice (Volume 22, Issue 2)

Kitazawa, M; Tamura, M; Kaneko-Ishino, T; Ishino, F



iPhone, iPad 用ジャーナルアプリ
を使って閲覧できます。

← 無料ダウンロード

ジャーナル閲覧ページ

www.wileyonlinelibrary.com/journal/gtc

日本分子生物学会員は無料でアクセスできます。

初回ユーザー登録は学会事務局まで (info@mbsj.jp)

登録後の問合せはWileyまで (cs-japan@wiley.com)



WILEY

The Molecular Biology Society of Japan NEWS

日本分子生物学会 会報

(年3回刊行)

第125号 (2020年2月)

発行——特定非営利活動法人 日本分子生物学会

代表者——阿形 清和